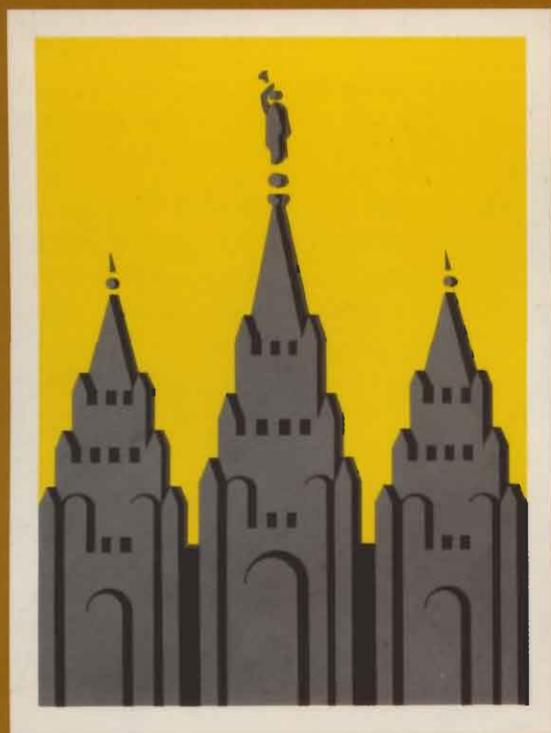


# 聖徒の道 7 1982

## 第152回年次総大会報告



## 第152回年次総大会報告

1982年4月3, 4日の両日, ユタ州ソルトレーク・シティー, テンプルスクエアのタバナクルにおいて催された大会の説教とその模様。

本大会各部会の祈り：福祉部会—フランクリン・D・リチャーズ長老, チャールズ・ディディエ長老。土曜日午前の部会—ロイデン・G・デリック長老, ウィリアム・R・ブラッドフォード長老。土曜日午後の部会—セオドア・M・バートン長老, ジェイコブ・ディエガー長老。神権部会—ハートマン・レクター・ジュニア長老, ジェームス・M・パラモア長老。日曜日午前の部会—ローレン・C・ダン長老, F・バートン・ハワード長老。日曜日午後の部会—アドニー・Y・小松長老, レックス・D・ピネガー長老。

表3の写真説明：左上／建設中のソルトレーク神殿；中央／1982年4月, ソルトレーク神殿基石安置の様子を見るために, テンプルスクエア周辺に群がった人々；右上／ソルトレーク神殿建設に働いた人々；下／1800年代のソルトレーク・シティー, テンプルスクエア。左から順に, 完成したアッセンブリーホール, タバナクル, 建設中のソルトレーク神殿。手前の店舗様式の小さな建物は—一時期教会本部, 銀行, Z C M I百貨店などとして用いられた。

**第** 152 回年次総大会に集った指導者、教会員は、キンボール大管長の出席を得て、大いに鼓舞されるところがあった。

1981年4月以来初めて大会の席で話をしたキンボール大管長は、その気持ちを「私はきょうの日を待ち、望み、信じてきました」と述べた。

4月3日(土)午前の部会での基調演説は、キンボール大管長が前もって準備したものを、私設秘書のD・アーサー・ヘイコック兄弟が代読した。

ゴードン・B・ヒンクレー長老は土曜日の午前の部会が始まるに先立って、大管長の近況を次のように語っている。

「キンボール大管長の容態は昨年9月の手術以来快方に向かっています。一時的に副管長がその代行を務めてきました。ここ数カ月、大管長は神殿で開かれる大管長会と十二使徒定員会の週例評議会にも出席し、私たちにその声を聞かせて下さっています。きょうもこの大会に出席しておられますが、今申し上げたこととあわせて考えますと、これこそ主の<sup>神</sup>憐れみの証であり、この並み優れた人物が持つ信仰と祈りの力、また忍耐の表われと言うことができます。私たちは大管長を愛し、その健康を心から願っています。」

今大会で注目すべき点は、財政問題、正直な商取引などの事柄に関する説教が多かったことである。正直、儉約、誠実さなどはどの大会においても繰り返し語られてきたテーマであるが、今大会では特にそれらが強調されている。

インフレ、景気後退、世界的に不安定な経済情勢など様々な問題を抱えた時代にあつて、人々は真摯な態度で教会幹部の声に耳を傾けた。今私たちの周囲には、一獲千金を夢見て危険な投機に走る人々があふれている。話の中には、合衆国以外の国々の人にはなじみのない箇所もあるかも知れないが、そこに述べられている様々な原則は世界のどの地にあつても応用できるものである。教会幹部がこれまで何度も繰り返してきたように、私たちは正直な取引をし、負債を避け、慎重に財産を運用していかなければならない。また、富を得ることばかりに心を奪われて、危険な投機事業に誘われることのないように注意しなければならない。

大会の司会はマリオン・G・ロムニー第二副管長とヒンクレー副管長が務めた。N・エルドン・タナー第一副管長は、司会には立たなかったものの全部会に出席し、日曜日の午後の大会では証を述べた。

大会は6つの部会に分かれ、土曜日には福祉部会、午前、午後の部会、神権会の4部会、日曜日には午前、午後のふたつの部会が開かれた。

会期中、教会幹部全員が出席した。

2日にわたる大会に先立ち、4月2日金曜日には、地区代表訓練集会ならびに地区代表、ステーキ部長合同訓練集会が行なわれた。これらの集会には、特に招待された指導者のほかに、全世界からの約1,650名に及ぶ地区代表、ステーキ部長が出席した。

第152回年次総大会報告……………表2

**4月3日(土) 午前の部会**

教会の使命を覚える……………スベンサー・W・キンボール…4  
 イエスの復活……………マリオン・G・ロムニー…8  
 「何ら害悪にあらず」……………マービン・J・アシュトン…14  
 再出発……………ヒュー・W・ピノック…19  
 「われらは、正直なることを信ず」……………マーク・E・ピーターセン…24

**4月3日(土) 午後の部会**

教会監査委員会報告……………ウィルフオード・G・エドリング…29  
 1981年度統計報告……………フランシス・M・ギボンズ…30  
 真の偉大さ……………ハワード・W・ハンター…32  
 人類の希望である永遠の結婚……………ロバート・L・シンブソン…36  
 瞑想は生活を霊的なものにする……………ジョセフ・B・ワースリン…40  
 義なる教師のために……………ジーン・R・クック…44  
 神の愛は罪の壁を越えて……………ロナルド・E・ポールマン…48  
 福音が教えるもの……………リブランド・リチャーズ…51

**神権部会**

神権の教理……………ブルース・R・マツコンキー…57  
 神権による活発化……………ビクター・L・ブラウン…62  
 傷ついた兄弟……………ニール・A・マックスウェル…67  
 什分の一の律法に従う……………ゴードン・B・ヒンクレー…73  
 神権……………マリオン・G・ロムニー…78

**4月4日(日) 午前の部会**

教会員数500万人到達一発展への道しるべ……………ゴードン・B・ヒンクレー…82  
 誠実さ一諸徳の泉……………ジェームズ・E・ファウスト…87  
 家族の祈り……………ジョン・H・グローバーク…92  
 「さあ、われらは神の家へ行こう」……………L・トム・ベリリー…98  
 人生の大海原を安全に航海する……………トーマス・S・モンソン…102

**4月4日(日) 午後の部会**

教会役員の指示……………ゴードン・B・ヒンクレー…107

イエスの証をなすに雄々しくあれ	エズラ・タフト・ベンソン	108
神殿の業を推し進めよ	A・セオドア・タトル	112
教会の将来	G・ホーマー・タラム	116
愛は家族を癒す力	F・エンツィオ・ブッシェ	120
神殿の目的	W・グラント・ハンガーター	123
「救い主、イエス」	デビッド・B・ヘイト	127
自己改善	N・エルドン・タナー	132
主が指揮しておられる	スペンサー・W・キンボール	134

**福祉部会**

仕事の価値	J・リチャード・クラーク	135
「その子らは立ち上がり、彼女を祝し」	バーバラ・B・スミス	140
1980年代の雇用に関するチャレンジ	J・トーマス・ファイアンス	146
福音一職業の基盤となるもの	ポイド・K・バック	150
歴史的見地から見た労働と福祉	マリオン・G・ロムニー	156

**3月27日(土) 扶助協会大会における説教**

成長への誘い	ドゥワン・J・ヤング	161
喜びを求めて	イレイン・A・キャンノ	164
同じ心を持つ人々	バーバラ・B・スミス	168
キリストに倣いて	マーク・E・ピーターセン	172
チャーチニュース/ローカルページ		178

**末日聖徒イエス・キリスト教会**

**大管長会**

- スペンサー・W・キンボール
- N・エルドン・タナー
- マリオン・G・ロムニー
- ゴードン・B・ヒンクレ

**十二使徒評議員会**

- エズラ・タフト・ベンソン
- マーク・E・ピーターセン
- リグランド・リチャーズ
- ハワード・W・ハンター
- トーマス・S・モンソン
- ポイド・K・バック
- マービン・J・アシュトン
- ブルース・R・マッコンキー
- L・トム・ベリ
- デビッド・B・ヘイト

- ジェームズ・E・ファウスト
- ニール・A・マックスウェル
- 顧問**
- M・ラッセル・バラード
- ローレン・C・ダン
- レックス・D・ビネガー
- チャールズ・A・ディディエ
- ジョージ・P・リー
- F・エンツィオ・ブッシェ
- 編集長**
- M・ラッセル・バラード
- 国際機関誌**
- 編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー
- 編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル
- 子供の頁編集：  
ボニー・ソングダース

- デザイナー：  
ロジャー・ギリング
- 制作：  
ノーマン・ブライス

聖徒の道 7月号  
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 東京都港区南麻布5-10-30  
 印刷所 株式会社 精興社  
 配 送 東京ディストリビューション・センター  
 東京都世田谷区上用賀4-9-19  
 定 価 年間予約2,200円 1部350円  
 海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0307JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512  
 口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
 東京ディストリビューション・センター

## 教会の使命を覚える



大管長  
スパンサー・W・キンボール

**愛**する兄弟姉妹の皆さん、この大会を始めるにあたり、私は主が再度私をお守り下さったことをこの場をお借りして主に感謝したいと思います。主はこれまでも何度か私を守って下さいました。また、私のために多くの祈りを重ねて下さった皆さんにも、私の愛と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

私は、タナー副管長、ロムニー副管長、ヒンクレイ副管長という忠実で、熱心で、有能な方々を大管長会にいただいていることを非常に感謝しています。またペンソン会長をはじめ十二使徒評議員会の方々、その他の教会幹部の方々にも感謝しています。これらの素晴らしい、忠実な兄弟たちの指導によって主のみ業は前進しています。これこそ主のみ業です。そしてその先頭には主が立っておられます。

今、私の体はしたいことが何でもできるという状態にはありませんが、力の及ぶ限り自分の務めを果たしていくつもりです。もっと力があつたらと思うのですが、少しでも力のある限り、この大なる末日の業

が真実であることを証し、また主の祝福と導きが私たちの上にあるように祈り続けていきたいと思っています。

この総大会にこうして皆さんと共に集うことができ、非常にうれしく思います。私の心は、神の王国がその聖なる目的地に向かって進み行く時に、天父が私にこのような役割を与えて下さったことに対する感謝の気持ちで一杯です。

私が前回このタバナクルで大会に出席してから丁度1年がたちました。御存じのように、昨年10月の大会の時には私は病院に入っていました。昨年4月の大会で私は、教会の使命が次にあげる3つの局面を持ったものであることをお話しました。

1. 主イエス・キリストの福音をあらゆる国民、血族、国語の民、人々に宣言する。
2. 福音の儀式を受ける備えをさせることにより、また昇栄を得るに必要な指導と訓練を行なうことにより、聖徒たちを完き者とする。
3. この世を去った人々のための身代わりの儀式を行なうことにより、死者を贖う。  
(「聖徒の道」1981年9月号, p. 4 参照)

この3つはすべてひとつの業の一部となるものです。その業とはすなわち、「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」(モーセ1:39)という壮大な栄光あふれる目的を持ちたもう天父と御子イエス・キリストを補佐することです。私はきょうこの宣言を新たにします。

どうかこれらの聖なる原則を心に留め、日々の生活の一部にして下さい。すなわち福音を宣言する、聖徒たちを完き者とする、死者を贖うという原則を実践していただきたいと思っています。

教会が世界中で発展していることは喜ば

しいことです。会員数は今や500万人に達しました。先にも述べましたように、私たちが自分に与えられた責任を果たすならば、人数だけでなく民の正しさの面においても大きな成長が見られることでしょう。

また新しくアイダホ州のボイスとコロラド州のデンバー、台湾の台北、エクアドルのグアヤキルに神殿を建築するという計画が発表になりました。今や教会は、教会の歴史を通じて神殿建築の最も盛んな時代に入っています。この4つの神殿が完成すると、世界中で運営されている神殿の数は41になります。

これらの神殿を建築するにあたっては、すべての教会員が系図の探求により一層の努力を払うことが必要です。さらに神殿を建てるということの中には、聖徒たちが定期的に神殿に参入するという原則も含まれています。私たちの霊性を高め、神権の原則に対する理解を深めるのに、神殿に定期的に参入することほど効果的なことはないのです。

ところで、皆さんも御存じのように世界の各地でいろいろな災難やもめ事が起きていますが、主はこうした問題が起こることを御存じでした。しかしまた、こうした問題がありながらも、この教会とその民が成長し発展することを予知しておられます。元気を出しましょう。主がこの教会を導いておられるのですから。教会幹部としてこの40年間、私は主がこの教会を導いておられることを見してきました。そして、主が弱点の多い私たちを使ってどのようにその目的をお果たしになるのだろうかと思惑に思うのですが、主は現にそれをしておられるのです。

兄弟姉妹の皆さん、互いに愛し合って下

さい。家庭の中に、また皆さんの心の中に愛を育て下さい。世の中に戦いと戦いのうわさが広まっても（教義と聖約45：26参照）、平和をもたらす人であって下さい。この総大会で受ける勧告に従って下さい。私も全力を尽くしてそのように努めるつもりです。主の目的はいつも完全に理解できるとは限りませんが、そのような時でも主と主の目的を信頼して下さい。いつかはその目的がわかる時がきます。

兄弟姉妹の皆さん、また良い宣教師になって下さい。指導者に従って下さい。新しく発行された聖典（改訂版の英文聖典）を勉強して下さい。家庭菜園を造って下さい。家や庭をきれいに片づけ、ペンキを塗り、修理や手入れをして下さい。収入の範囲内で暮らして下さい。良き隣人であって下さい。どこの国に住んでいても良い市民であって下さい。安息日を聖く守って下さい。（出エジプト20：8参照）家庭の夕べを定期的に開いて下さい。以前にも申し上げた



ことですが、これが今回の私の皆さんへの忠告です。

兄弟姉妹の皆さん、教会を批判する人々のためにも祈って下さい。敵を愛するので。(マタイ5:44参照)言葉と行ないに知恵と判断力を働かせて下さい。そうすれば人々が教会や教会員に良くない印象を持つ理由を与えないこととなります。サタンは愚かにもこの業を破壊しようと躍起になっていますが、この業こそ人類を引き上げるために神がこの世に置かれたものなのです。

この大会が終わったら、もっと良いことをしよう、もっと良い人間になろうという新たな決意をもって、それぞれの家庭に、ステーキ部、ワード部、支部にお帰りになって下さい。主は皆さんを見守っておられます。皆さんが主に近くあるならば、主は試練や問題を切り抜けるように皆さんの力になって下さいます。私は、そのような試しを身をもって経験した者として証することができます。

主は、私たちを逆境や苦しみから解放するとは約束しておられません。その代わりとして、祈りという意味伝達の道を与えて下さっています。祈りによって私たちは謙遜になり、主の助けと導きを求めることができます。以前にも申し上げましたように、「人生の深みに到達し、そこで静寂のうちに神の御声を聞く人々には、揺るぎない確信があり、この確信により種々の難事の嵐の中を平穩無事に航海できる」のです。(「聖徒の道」1974年6月号, p. 285)

この最後の神権時代に回復された教会が地上に置かれてから152年の歴史が流れましたが、私はその半分以上を生きてきました。そして、教会が驚くべき発展を遂げる様もこの目で見てきました。今や教会は世

界中に確立されるに至っています。予言者ジョセフ・スミスはこう述べています。

「宣教師は様々な国に出て行っている。そしてドイツ、パレスチナ、オランダ、オーストラリア、東インド、その他の地域に真理の旗が立てられている。いかなる汚れた者の手も、このみ業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国に広まり、あらゆる者の耳に達し、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして、大いなるエホバは、み業は成ったと告げられることだろう。」(*History of the Church* 「教会歴史」4:540)

これからも約束された栄光の時代を待ち望みつつ、自信をもって主のみ業を推し進めようではありませんか。私たちの忠実さによって、神が約束されたことはすべて成就されるのです。

ここで重ねて主に、また私の妻と家族に、幹部の方々に、そして皆さん一人一人に私の愛を表わしたいと思います。私は皆さんの愛を感じています。そして皆さんも私の愛を感じて下さればと願っています。皆さんの上に祝福がありますように。天の父なる神は生きておられます。イエスはキリストであり、御父の生みたもう独り子です。イエスは生きておられます。イエスは私たちの長兄であり、救い主、贖い主です。これが、愛する兄弟姉妹の皆さんへの私の心からの証です。この証を愛と感謝をもってへりくだりイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

---

# イエスの復活

---



第一副管長  
マリオン・G・ロムニー

**愛**する兄弟姉妹の皆さん、この復活祭の時期に、イエスの復活について証を述べ、少しなりともその証の基となる事柄についてお話する機会がありますことを感謝します。

「イエスはよみがえって、ここにはおられない。」(マルコ16:6)この簡潔な言葉の中に、歴史上最も偉大な出来事である主イエス・キリストの復活が雄弁に語られています。この出来事があまりにも想像を絶するものであったので、主が地上におられる時に最も親しく接し、後に起こることを詳しく教えられていた使徒たちでさえ、その意味をなかなか完全には理解できませんでした。復活の事実を耳にした弟子たちの最初の反応は、「それが愚かな話のように思われて……」(ルカ24:11)という言葉で表わされています。無理もありません。それまで無数の人々が生を受けては死に、山や谷の土の中に葬られてきましたが、そのイースターの朝まで、墓からよみがえった人はひとりとしていなかったからです。

私たちが復活されたイエスについて語る時、それは、かいばおけて生まれてから十

字架上でお亡くなりになるまでの間、肉の体に命を与えていた霊が再び体に入り、このふたつが、すなわち霊の体と肉の体が二度と離れない状態で結合し、不死不滅の体となって墓からよみがえられたことを意味します。

私たちが信じ、そして証することは、イエスは自ら死に打ち勝たれて栄光の復活体を得られただけでなく、それによって全人類にも復活の祝福をもたらして下さったということです。これこそが、天上の大会議で私たちの救い主、贖い主として選ばれた時に召され、聖任された使命なのです。

この地上での使命を果たすにあたり、贖い主には4つの必要条件がありました。

第一は、霊体が死すべき肉体という衣をまとわねばならないということです。これは、天のみ使いが名もない羊飼いたちにこう語りかけた時に成就しました。「恐れるな……きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである。」(ルカ2:10—11)

第二に、全人類の苦痛を一身に受けなければならないということです。これは主に、ゲツセマネの園での大いなる苦しみの中で成就しました。その苦しみを主御自身が次のように表現しておられます。「その苦しむたるや、われ神、すなわちすべての中、最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ、すなわちこの苦さきかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。然はあれども、父なる神は讀むべきかな。さればわれはこの苦しみをなめ、人の子らの為に準備を為し終りたり。」(教義と聖約19:18—19)

第三に、命を捧げることです。主が十字

架上でお亡くなりになったのは、人々から拒まれ、裏切られ、途方もない仕打ちを受けた後のことですが、この事実については、キリストに対して信仰を持たない人にとっても疑問の余地のないところです。主は、先程述べたように復活を遂げるために、御自分から命を捧げられたのですが、この点についてはすべての人が受け入れているわけではありません。しかし、これは事実です。確かに主は、邪悪な人々から憎まれ彼らの手にかかって殺されました。しかしその実、いつでも彼らを制することのできる力を持っておられたのです。主はこう言われました。「命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受け取る力もある。」(ヨハネ10：17—18)

この力は、死すべき肉体を持つ処女マリヤと、不死不滅の日の光栄の体を持ちたまう神との間にお生まれになったイエスに、生まれながらに<sup>14</sup>貰っていたのです。

このように、まず肉体を受け、次にゲツセマネの園で全人類の罪のために苦しみ、そして十字架上で命を捧げた主にとって、残されていることはただひとつ、死の縄目を断ち切ることでした。これが4番目、最後の条件です。こうして贖い主としての地上での使命は完了するのです。主は、地上での御自身の生涯がこの完成に向かって進んでいったと繰り返し教えておられます。このことは、命を捨ててそれを再び得るという次の言葉に予告されています。悲しむマルタに主は言われました。「わたしはよみがえりであり、命である。」(ヨハネ11：25) ユダヤ人にはこう言われました。「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう。」(ヨハネ2：19)

復活は人類の経験からはほど遠いことでしたので、主を信じていた弟子たちでさえ、なかなか理解できないものでした。しかしこの教義は、主を十字架につけた人々の耳にまで届いていました。彼らはこの教えに心を騒がせ、ピラトのところへ行って言いました。「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。」そしてピラトの同意のもとに墓に番人を置き、「弟子たちが来て彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらす」ことができないようにしました。(マタイ27：63—64) こうして、見張り番として雇われた人々が、はからずも天使によって墓が開かれるのを目撃することになったのです。(マタイ28：2—4 参照) よみがえられた主がみ姿を現わされる前の出来事として、これが最後のものでした。

イエスが復活された証拠には、論ばくの余地がありません。金曜日の午後に十字架でお亡くなりになった主は、続く日曜日にも5回にわたりみ姿を現わされました。

最初に主にまみえたのは、マグダラのマリヤでした。その日の朝早く、イエスの遺体が墓からなくなっているという知らせを受けて、ペテロとヨハネがそれを確かめに来ます。やがてふたりが去った後、マリヤはその場にとどまって涙を流していました。そして、「うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。イエスは女に言われた、『女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか』。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、『もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります』。イエスは彼女に『マリヤよ』と言



われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で『ラボニ』と言った。それは先生という意味である。」(ヨハネ20：14—16)

主は優しく彼女を制してこう言われました。「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行つて、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であつて、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上つて行く』と、彼らに伝えなさい。」(同上17節)

やがて日の出と共に、「ヤコブの母マリヤとサロメ」(マルコ16：1)と他の女たちが主を埋葬するために香料を持って墓に来ますが、墓は開かれ、主の遺体はそこにありません。驚いている彼女たちに、輝く白い

衣を着たふたりの人が現われて言いました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にならずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24：5—6)「そこで女たちは……弟子たちに知らせるために走つて行つた。すると、イエスは彼らに出会つて、『平安あれ』と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。」(マタイ28：8—9)

同じ日、クレオバともうひとりの弟子がエマオへの道を歩いていると、イエスが近づいて来て一緒に歩いて行かれました。しかし、ふたりはイエスであることに気づきませんでした。イエスはふたりの話していることについて尋ねます。ふたりは女たちの言ったことを繰り返しますが、その心に疑いがあるのを見て取つたイエスはこう言われます。「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」こうして聖書全体にわたり、御自身について記してあることを解き明かされます。そしてエマオにとどまられて、「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかつた。すると、み姿が見えなくなつた。」(ルカ24：13—31 参照)

その夜、弟子たちが集まつて、イエスがシモンとクレオバにみ姿を現わされたという話を聞いていると、「イエスが彼らの中にお立ちになつた。」イエスは恐れている弟子たちを静め、御自分は霊ではないと語り、手と足とわきをお見せになりました。こう記されています。「『まさしくわたしなのだ。さわつて見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。』……彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思つていると、イエスが『ここに何か食物があるか』と言われた。

彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。」(ルカ24:36—43参照)

このようにして、この重要な日に、かつて主と行動を共にした人々が主の栄光の復活体を見たのです。彼らは主を見ただけではありません。主の声を聞き、手と足とわきの傷にも触れたのです。また主は、皆の前で食物を手に取り、それをお食べになりました。彼らが墓に横たえたあの体を、主は再びまどわれたのです。こうして主が生きておられ、不滅の霊と肉体を得ておられることを知って、彼らの悲しみは喜びに変わりました。

主はそれから40日間、聖地で弟子たちと共にみ業を行なわれました。その間、エルサレムでトマスも共にいる時に弟子たちにも姿を現わし(ヨハネ20:26—29参照)、またテベリヤの海辺では漁の方法を教え、共に食事をするように弟子たちを招き、御自身が火で焼かれた食物を彼らに与え、み業についていろいろお教えになりました。(ヨハネ21:1—14参照)さらにガリラヤの山では、11人の弟子たちに全世界に出て行って福音を宣べ伝えるように命じられました。(マタイ28:16—18参照)そして最後にベタニヤで皆を祝福し、天に昇って行かれたのです。(ルカ24:50—53参照)

主はパレスチナでの使命を終えられると、今度はアメリカ大陸のニーファイ人のもとを訪れ、彼らにも復活についてお伝えになりました。御父は主をこう紹介されました。「わが喜ぶ愛子を見よ。」群衆は御子が天から降りてこられるのを見て、「白い衣を召したお方」が下ってきたと表現しています。主は言われました。「見よ、われはイエスキリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。」群衆はイエスを見、そのみ声を聞き、招きにに応じて「近よって



その手をイエスの<sup>筋</sup>にさし入れ、また手足にある釘あとに触れた。」そしてその御方がまさしく復活された贖い主であることを知り、それを証したのです。(IIIニーファイ11:7—15参照)

このように主は復活の後に、聖地で主に従う者たちに、またアメリカ大陸でニーファイ人にそれぞれみ姿を現わされましたが、同じことが私たちの時代にも起こりました。事実、この神権時代は、予言者ジョセフ・スミスが御父と御子の訪れを受けるという栄光に満ちた示現によって、その幕が切って落とされたのです。ジョセフは御二方の語られる声を聞きました。そして御父から復活されたイエスを直接紹介されました。御二方の栄光に満ちた体を目のあたりにしたジョセフは、こう記しています。「御父は人間の有する肉体と同じく<sup>骨</sup>触知<sup>し</sup>得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り。」(教義と聖約130:22)

それから約12年後、救い主はジョセフ・スミスとシドニー・リグドンにみ姿を現わされました。ふたりは次のように記しています。「『主は実に生きたもう』……。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。

また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。」(教義と聖約76:22-23)

予言者ジョセフはカートランド神殿で再び主とまみえ、この時はオリヴァ・カウドリが一緒でした。ジョセフはこう記しています。

「われらの心より覆い取去られて覚りの眼開かれたり。

われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声言いたもう。

われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110:1-4)

正義の律法が要求する無限の贖罪を成し遂げることができたのは、イエスただおひとりです。なぜなら、この地上に生を受けた人の中で、イエスは唯一の罪のない御方であり、その罪のない生命を捧げられたからです。また、神の御子として、命をとどめる力も捨てる力も持つておられたからです。イエスが進んでそうされるのでなければ、だれも主の命を奪うことはできませんでした。「だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。」(ヨハネ10:18)ですから、主が身代わりとなって破られた律法の償いをし、正義の要求を満たされたのは、主の無限の愛とあわれみがあつたからなのです。

私たちが主に負うところは、そればかりではありません。イエスは贖罪によって正義の律法を満たされただけでなく、あわれみの律法を確立され、それにより人が霊の

死から贖われるようにして下さったからです。したがって、人は肉体の死については責任がありませんが、神の前から断ち切られる霊の死に対しては、その責めを負わなければならないのです。

地上に住むすべての人は、義しいことから影響を受けるだけでなく、邪悪なことにも心を動かされます。また人は、善悪を選ぶ自由意志という賜を神から授かっています。かつて地上に生を受け責任をとれる年齢に達した人の中で、この賜を行使して悪からの影響を完全に拒むことのできた人は、イエスを除けば、ひとりもいません。罪を犯さない人はいないのです。ですから、どの人も自分の犯した罪の程度に応じて汚れています。そのために、すべての人は自ら犯した過ちの結果が自身に及ぶ限り、主のみ前から放逐されるのです。

霊の死は自分自身の罪の結果として起こるものですから、霊の死からの救いを、当然受けられるものとして要求することはできません。まただれにも、自分だけの力で完全に償いをし、自分自身の過ちの結果から完全に逃れるということもできません。もし人が自ら犯した罪の結果から逃れ、神のみ前に帰れるとしたならば、それは何か途方もない力が働いて、その人を罪の当然の報いから解放したということになります。イエス・キリストの贖罪が計画され、行なわれたのは、このためなのです。

贖罪は、私たちに対するイエスの大いなる愛によって成し遂げられた、この世で最も慈愛に満ちたみ業です。主はこの贖罪によって正義の律法の要求するところを満たされ、私たちが永遠に自らの罪の結果に縛られなくともよいようにして下さいました。またそればかりでなく、あわれみの律法を確立され、全人類のために罪から清められる道をも備えて下さったのです。

何を信じ、いかに生きるかにかかわらず、私たちは復活します。それは、キリストの贖罪により、墓からよみがえることが全人類に無条件で許されたからです。しかし、私たち自身の罪の結果からの赦しと贖いについてはそうではありません。そのような赦しと贖いを受けられるのは、贖い主が定められた条件を受け入れてそれに従い、自らの罪の程度に応じて、自分自身を主の贖いの血の及ぶ範囲にまで引き上げた人だけなのです。

主は主の福音という条件をお授けになりました。イエス・キリストの福音です。それはあわれみの律法であり、その第一の条件は、イエスを文字通り、贖い主として受け入れることです。これは「主イエス・キリストを信ずる信仰」です。(信仰箇条第4条参照)次に自らの罪を捨て、自らの力の及ぶ限り、自分自身を元に戻すようにしなければなりません。これが悔い改めです。

これらの原則に従わなければ、またその他の福音の原則や儀式に従わなければ、人はあわれみの律法の及ぶ範囲に到達できず、正義の律法に依存することを余儀なくされます。つまり、自らの罪に対して、イエスが味わわれたと同じ苦しみを味わわなければならないのです。(教義と聖約19:16—18参照)聖典には次のように記されています。「悔改めを生ずるような信仰を起さない者たちは、正義の法の要求する裁判を充分に受けるのである。それであるから永遠にして偉大な贖いの計画は、ただ悔改めを生ずるような信仰を起す者にだけ与えられる。」(アルマ34:16)

これまで述べたことを総合していくと、復活されたイエスの姿が心に浮かんできます。しかし、私たちが確信し、証するところは、主が前世で贖い主として選ばれ聖任されたこと、また神の肉における独り子と

してマリヤを通してお生まれになり、私たちの罪のために苦しまれ、十字架の上で自らその命を捧げられたこと、復活を通して御自身のため、全人類のために死の縄目を断ち切られたこと、復活の初穂として不滅の霊と体をもってよみがえり、聖典に記されているようにマグダラのマリヤをはじめいろいろな人々にみ姿を現わされたこと、そしてニーファイ人を訪れ、さらにはこの神権時代にジョセフ・スミスや他の人々に御自身を現わされたことです。私たちの証は、これらのことを記した記録にだけ基づくものではありません。私たちのもつ確信と証は、聖霊により、聖きみたまの証によりもたらされます。私たちは聖霊の力によってこれらのことが真実であることを知り、記録されている出来事が真実であることを、その出来事を経験した人々と共に証するのです。この証を得て人々に述べるこそ、私たちの使命なのです。

主の贖罪によって私たちの復活は確かなものとなり、信仰と悔い改めと終わりまで耐え忍ぶことを条件に、私の罪は赦されるわけですが、そのことについて考えると、私の心は感謝と喜びではりさけんばかりになります。そして、こう叫びたくなるのです。「ああ、わがため 主は死にたもう くしきみわざ」(讚美歌76番)

以上がイエス・キリストの復活を記念するこのイースターの季節に、私の心に去来する思いなのです。天のみ使いはイエスの復活を、次のように静かに告げています。「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」(マタイ28:6)

この厳粛な証を、私たちの贖い主イエス・キリストの聖なるみ名を通して申し上げます。アーメン。

## 「何ら害悪にあらず」



十二使徒定員会会員  
マービン・J・アシュトン

**学**生が、教師から教わった言葉を24時間  
間違わず覚えていることはまれなこと  
です。しかし、ある教師が毎朝クラスが  
始まる前に復唱させていた言葉を、当時  
の子供たちは、50年たった今でも感謝し、  
覚えています。この慎み深い、あまり目立つ  
ことのない女教師は、毎朝この言葉を復唱  
させて、正直ということの意味を私たち子  
供の心に植えつけてくれました。それはこ  
のような言葉です。「人をだまそうと思っ  
てすることは何でもうそになる。」

教師のこの言葉を辞書の定義と比較して、  
私は感謝せずにはいられません。辞書には  
「うそとは人を欺くために事実と反するこ  
とを言うこと」とあるからです。うそは時  
として言葉を伴わないことがあります。う  
なずきや沈黙さえも欺きになることがある  
のです。あまり正体のわからない仕事に投  
資をするよう持ちかけること、二重帳簿を  
作ること、心にもないおせじを言うこと、  
事実を明かさないこと、これらは皆「人を  
だまそうと思っ

ずっと未婚で通したにもかかわらず、私  
たちを母親のように愛してくれたその教師

は、この朝の復唱を終えた後で、どんな時  
でも真実を語ることがいかに大切かをほん  
の短い言葉で説明してくれました。「うそを  
つかない。うそを広めない。うそに耳を貸  
さない。」

うそをつくことはどれほど重大なこと  
でしょうか。聖典をひもといてみると、そ  
こかしこに、サタンが偽りの父だと書いてあ  
ります。そしてサタンがどのようにしてう  
そをつく方法を教えるかが教義と聖約の10  
章に書いてあります。「然り、サタンは人々  
に向いて言う。……欺(け)……見よ、こは  
何ら害悪にあらず、……偽(いつはり)るとも罪にあ  
らず、と。……かくして彼らが己がわなに落  
入りて捕えられるようになすなり。」(教義  
と聖約10:25—26)

しかし私たちはサタンのせいにして、「サ  
タンがさせたんです」と言い訳をすること  
はできません。サタンはただ「こは何ら害  
悪にあらず」と言うだけで、その後で私た  
ちがわなにまってしまうのです。

うそは罪です。うその犠牲になった人は  
実にかわいそうです。不正直やうそをつく  
というわなにたった1回ではまってしまう  
ことはありません。ひとつの小さなうそや  
不正直な行ないが次の行ないを呼び、それ  
がついにはクモの巣のようにその人を捕ら  
えてしまうのです。サムエル・ジョンソン  
は「習慣という鎖はあまりにも小さくて、  
強く切れないようになるまでは気づかない  
」と言っています。(The International  
Dictionary of Thoughts 「世界思想辞典」  
p. 348) このうそというわなに陥った人は、  
一生の間重荷を負うことにもなります。自分  
に問題があることを認めようとせず、変え  
る努力をしないからです。多くの方は犠牲  
を払ってまでもうそという鎖を切ろうとは思  
いません。また中には、正真の価値をよく  
知っていながら、正直に立ち返る第一歩

を踏み出せない人がいます。

たぶん、人がうそをつく理由を分析すれば、この邪悪なわなを克服することができのかもしれない。

私たちは時々、恥をかくのを恐れてうそをつくことがあります。最近のことで、ある若い女性が不正直を理由に仕事をやめさせられたことを聞きました。ところがこの人が次の仕事に応募した時に、雇い主に、前の会社で上役の親戚の子を入れたので自分がやめさせられたと言いました。たぶん同じことを家族や友達にも話しているでしょう。自分の恥をさらしたくないからです。

経済的に自分が大変な状態にあることも人にはあまり言いたくないものです。またこういう言葉もよく聞きます。「ちょっと忙しくてできませんでした。」でも本当は忘れていたのではないのでしょうか。ある人は引き延ばすために、有利になるように、また相手を印象づけたり、おだてたり、負かしたりするために不正を働きます。

人は意図的かどうかに関係なく、うそをついて他の人の人生を台無しにしてしまいます。また、しつとや劣等感から他の人の習慣や人格を傷つけてしまうことがあります。皆さんは野心に燃えた人が、欲のために人に心にもないおべっかを使っているのを聞いたことがありませんか。

またうそはしばしば勇気のなさの口実になります。また仕事や勉強がよくできなかったことの口実にも使われます。普通、うそが1回でおわることはありません。一度うそをつく、そのうそを隠すために次から次へとうそのためにうそが必要になってくるのです。

また、善悪などという区別はない、相対的なものだと信じ込ませる人がいます。しかし私たちは、正しい行ないや決定というもの善と悪の中間の都合のよい所にある

などと考えるはなりません。

広告やセールス、マーケティングにおいて偽りや欺きが日常茶飯事になっている今日、私たちはこう祈るべきでしょう。「おお主よ、お助け下さい。自分が偽りを言わないだけでなく、世の欺きによって生活をだめにすることがないように私に知恵をお授け下さい。」

私たちはどのようにして不正直の餌食になるのでしょうか。いろいろ考えられますが、ここで少し取り上げてみましょう。

ひとつは、次のイザヤの言葉から明らかになります。「この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。彼らはまた悟ることのできない牧者で、皆おのが道にむかいゆき、おのおのみな、おのれの利を求め。」(イザヤ56:11) 欲は人を不正直に、まただまされやすくします。同じことが教義と聖約68:31—32に書かれています。「その眼は貪欲を以て笑えるればなり。かかることはあるべからず。故にすべからく彼らの中よりこれを無くすべきなり。」欺かれぬ方法については、教義と聖約9:13に出ています。

「忠実にして誘惑に負くことなかれ。」

ある友人が最近告白してくれたのですが、彼は投機に財産をつぎ込んで皆なくしてしまいました。欲というバルブを閉じることができなかったのです。次から次へと物を欲しがり、収入の範囲を越えて生活する、こうなると、不正直に傾いていくことは否めません。莫大な報酬が得られるようなプランや一生に一度しかないチャンスなどうたっているものは避けるべきです。

著名な人の名を語ったり、自分がある特別な所に住んでいることや特定の宗教団体に加入していると偽ることが、相手の信頼を得る手段として、またセールスの手として使われます。

すぐ決定を迫る人や即金を求める人は避

けましょう。投資として価値のあるものは、皆長い時間をかけて調べてもボロが出ません。事実を集められるだけ集め、よく考え、すべてにとって利益になるような決定をしなければなりません。どちらとも決めかねるようなケースの場合は、個人の高潔さが決定の上で大切な要素となります。正しい行動が明らかでない時は、私たちが正直な生活をしていれば、他の人が気づかない点や事実に気づくようになるでしょう。高潔な人は他の人をも正直にします。高潔な人は、物を尋ねるにも答えるにも的を得ています。高潔な生活をしていれば、実際の行動を起こすずっと前から、どのような行動を取るかがわかるのです。

賢明な人は、誤った自尊心のために平気で悪事をする人の犠牲になることはありません。時々人は、誤った自尊心のためにわからないことを聞くことができず、そのためてんにかかることがあります。恥をかくことを恐れたり、また無知だと思われたくないために、口達者なセールスマンの言葉を本当に理解できなくても、うなづいてしまうのです。「どういうことですか。」「どういうリスクがありますか。」「落とし穴はありませんか。」「会社の歴史を教えてください。」「あなたのことをだれに照会したらいいでしょう。」これらは尋ねて損のない事柄です。セールスマンが不用意に「制約」「保護」「免除」「年金」「無税」「特別な」「後金払いの」というような、簡単でいてつかまえてどころのない言葉を口にした時は要注意です。

もしも自分の知識だけで結論を出しかねる場合は、その分野で知識のある、また信頼のおける人にアドバイスを求めます。時間をかけて検討することを拒むようなものは不合格です。

アブラハム・リンカーンはこう言いまし



た。「正しい生活をしている人とは共に立て。その人が正しい時は共に立ち、間違いをしたら退け。」(The Home Book of Quotations 「家族のための名言集」 p. 1726)

私たちは今、「ちょっとしたうそ」や「方便のためのうそ」「誤解を招かうそ」「一生に一度のかけ」「限られた人にしか与えられないチャンス」などという言葉が喧伝されている時代に生きています。こうしたまやかしの誘いが過去現在を問わず、だまされやすい人を餌食にしているのです。

幸か不幸か、投資を呼びかける人にとって、景気の上昇は関係ないようです。不景気の時は、少ない収入を補うためと称して借金の話を持ってきますし、景気のいい時はいい時で、今こそ借金をしてでも投資をし、この成長の波に乗ってもう一段高い生活を、と誘うのです。私たちは「景気が落ち込まなかったらもっと大きくなっていったのに」という言葉を何度聞いたことでしょうか。私たちは歴史を通じて十分に学ん

だはずです。たとえ普通の、地味な投資であっても、先の子測の上に立って行なうものですから、あまりにも話が大きい時は、注意してしかるべきです。

いつの時も同じですが、投資のために自己資金がなく、借金をした人ほど最後になって泣きを見る人はありません。確かに借金はクモの巣と同じです。

サムエル・ジョンソンは言いました。「借金を不便なものだとしか感じないようにするのはならない。借金は災いになる。」(*The International Dictionary of Thoughts* 「国際思想辞典」p.196) 投機のために借金をしないようにして下さい。「金銭を愛することは、すべての悪の根である。」(1テモテ6:10) また財政的な束縛から逃れるためには、金銭の管理を上手に行なうことを私たちの目標にする必要があります。

タナー副管長はこう述べています。「神に心から喜んで仕えるために、私たちは家庭や十分な金や収入や、私たちに喜びと幸福をもたらすこの世のものを必ずしも捨てる必要はない。必要なのは、この世のものを求める時でも神とイエス・キリストの教えから背を向けてはならないということである。」(*Ensign* 「エンサイン」1971年6月号, p. 14)

すべての末日聖徒の目標は「あの人の言葉には決して間違いがない」と言われるような人になることです。私たちは言葉や行ない一つ一つについて「都合がよいだろうか、満足のいくものだろうか、便利なものだろうか、もうかるだろうか」ではなく、「それは正しいだろうか、真実だろうか」と自問するようにしようではありませんか。賢明な人は「それは正しいことか」と問いますが、欲深い人は「もうかるだろうか」と問うのです。

時々、投資のプロモーターは、資金ぐり

がどうにもならなくなって、何とか生きのびようともがき、支払いはできるだけ引き延ばすという手に出ます。失敗でもしようものなら正直さも危うくなってきます。高潔な人はどのような時でも正直でなければなりません。

正直は基本です。うそが他のすべての悪の共犯者であることは事実です。またある人は言いました。「罪には道具がたくさんある。しかしうそはそのどれにも合う取っ手である。」欺き、不誠実、ごまかし、これらはうそが形を変えたものです。若人の皆さん、不正行為は試験の時だけの言葉ではありません。

うそは他の人を傷つけます。また次第次第に私たち自身をも滅ぼします。私たちはそのわなにはまって信用を失い、顔もつぶしてしまうのです。欺きやうそから遠ざかるならば、私たちの心には平安が訪れるでしょう。

かつて私の友達が苦難にあっていました。うそというわなにはまって長い間抜け出せず、もがきにもがいていたのです。彼はこう言いました。「長い間うその言い通しだったので、率直に言って自分がいつ本当のことを言っているのかわからないんだ。」初めこのことを聞いた時、私は同情しました。しかし私は、彼のその言葉自体もうそではないかと考えたのです。この友達の生活は本当にうそで満ち充ちていました。一体この欺きの被害者に対してだれが「うそは害のないものだ」と言えるでしょう。

うそをつく人はうその僕です。うそをつくる人はその結果をも身に受けます。執事とビーハイブの少女たちはうそがどんなに悪いことか教えられなければなりません。教師とマイアメイドは真実の大切さを学ばなければなりません。祭司とローレルは、不正直には落とし穴があることを学ぶ必要が

あります。宣教師は正しい原則に従ってこそ成功することを悟らなければなりません。プライマリーの子供たちはうそをつくのはいけないことだと学ばなければなりません。子供たちは家庭で模範を通して正直を学びます。正直は原則であって実際の生き方ではないと家庭で教わった人は何と不幸なことでしょうか。

私たちは律法の世界に住んでいます。この世の法は避けて通ることができるかもしれませんが、しかし、天の律法はきょうもあしたも、そして永遠に私たちに決定的な影響を及ぼすのです。

「あなた方は真理を知るであろう。そして真理はあなた方に自由を得させるであろう。」(ヨハネ 8 : 32) うそをついて自由な人はひとりとしていません。うそという重荷を背負いながら生きてきた人には、そのことが痛いほどわかるはずですが、また多くの人がやっているからといって、悪いことでも悪くないと考えるのは間違いです。まただれも見えていないからいいというのも間違いです。

天の御父が勇気をお与え下さり、私たちがうそで固めた生活を捨て去ることができるようになります。正直は原則以上のものです。同胞と幸福な生活を送り、自分自身も幸せになるために欠くことのできないことです。

皆さんがこの話の初めに述べたあの教師のようであろうと、また友人、隣人、家族であろうと、正直に生き、正直を教えましょう。学校というクラスでもまた人生のクラスでも、正直という徳は「神の栄光は英智なり、すなわち、光明と真理なり」(教義と聖約 93 : 36) を信奉するすべての人によって強調されるべきです。光明と真理は私たちに悪を捨てさせ、勝利へと導きます。「害のないもの」とは敵の言葉です。敵は私たちを滅ぼそうとしているものです。

もしも「人をだまそうと思ってすることが何でもうそになる」のであれば、私たちは真理を理解し、真理を見出すために神の導きを続けて求めるはずですが、高潔な人はうそを育てることも、養うことも、人に言うこともしません。知恵のある人は、欲を恐れ、野望、金銭のために不正直な人々のわなに陥ることはしません。不正直な人々は、手ぐすねをひいて、だまされやすい人から財産をまき上げようとねらっているのです。

次の言葉を常に心に留めましょう。「富を求めずして智恵を求めよ。さらば見よ、神の奥義は開かれ、それより汝ら富める者とせらるべし。見よ、永遠の生命を有つ者は富めるなり。」(教義と聖約 11 : 7)

神が高潔な人すべてに力と強さをたまひ、不正直というわなにはまらないだけの洞察力と知恵を授けたもうことを、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。



## 再出発



七十人第一定員会会員  
ヒュー・W・ピノック

**最**近、私は深い同情の念を抱きながら、どうしようもない挫折感や心痛に苦しんでいる人々、何の望みもないかのような状態に立ち至ってしまった人々を大勢見てきました。そこできょうは、苦しんでいる方々、悲しみや怒りや罪にあえいでいる方々にお話したいと思います。私がお話することは、これから苦難や困難に立ち向かうとする方にも、役に立つでしょう。

皆さんの中の多くは、子供の頃、次のような詩を読んだことがあるのではないでしょうか。

ああ、ないものだろうか  
新規まき直しの国が  
そこでは、失敗や心配、ちっぽけな悲しみを  
みんなすりきりれた上衣のように  
玄関先で脱ぎ捨てて  
二度と再び着ることもないのだ  
(ルイズ・フレッチャー編、*The Best Loved Poems of the American People*  
「アメリカ人の愛した詩」より『新規まき直しの国』)  
「新規まき直しの国」などという国は、

地上のどこにも存在しませんが、苦しみ、罪、悲しみなどを捨て去って、新たにやり直そうとする、霊的なある地点は確かに存在します。今朝は、皆さんでそこへ旅してみようではありませんか。

古代の予言者エレミヤは、ある日のこと、自分の家にいた時に主のみ言葉を聞きました。

「『立って、陶器師の家に下って行きなさい。その所でわたしはあなたにわたしの言葉を聞かせよう』。わたしは陶器師の家へ下って行った。見ると彼は、ろくろで仕事をしていたが、粘土で造っていた器が、その人の中で仕損じたので、彼は自分の意のままに、それをもってほかの器を造った。

その時、主の言葉がわたしに臨んだ、『主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある。』(エレミヤ 18：2-6)

主はエレミヤに、昔のイスラエルの陶器師のように失敗をしてしまった時には、失敗した作品をこね直して、もう一度造り直すことができると説明なさいました。陶器師は、失敗したからと言って、あきらめて、その粘土を投げ捨てたりはしませんでした。ですから、私たちも望みをなくしたり、自暴自棄になったりしてはいけません。そうです、私たちは問題を克服し、自らの持てる物を手にとり、あるがままの自分を受け入れて、再出発すべきです。

こうして私の話を聞いておられる方々の中には、重大で手に余るような、何如とも仕難い罪を犯してしまった方もおいででしょう。しかし、主から与えられた簡単な指示に従い、必要があれば、監督と話すことができます。そうすれば、その人は新たな

人として再出発できるのです。

皆さんの中には、最近、賢明でない、あるいは利の薄い商売にお金をつぎ込んでしまった方はいないでしょうか。そのような方にとっては、「今」がやり直しの時です。二度と、自分の過ちの故に傷つくようなことがあってはなりません。もし過去の過ちや不正に心を奪われ、怒りに身を任せるならば、その人の過ちはその人をそこなうことでしょう。

また、他人の心を傷つけ、苦痛や恐れや心痛を与えてしまった人はいないでしょうか。そのような方々にとっても、「今」が傷つけた人の所へ行って、自分のしたことに対して悲しく思っていることを示し、赦しを請い、できるならいつでも損なった物を元に戻す時です。それをするのは今です。神様は、私たちが負債を支払うように計画なさいました。教義と聖約の中で、主はこう言っておられます。「……見よ、汝らごとくその債務を償却すべし。これわが旨なり。」(教義と聖約104:78)

ギリシャ帝国は繁栄の極みに達した時、西は地中海沿岸から東は現在のインドのあたりまで、勢力下に治めていました。そしてその軍事力によって、数えきれない程の市や国民を征服して行ったのです。

ギリシャ人たちは勇敢な人々を称えただけではなく、戦いが優勢に転じた地点をも神聖なものとししました。そしてその場所に印をつけました。石を置いたり、奪い取った武器を積み上げたりしたのです。彼らは、そのような印のことを、トロフィーと呼びました。古代ギリシャ語のトロフィーという語には、「変わり目」という意味があります。

今は、あなたの人生のトロフィー(変わり目)ではないでしょうか。人生の戦いの中で、あなたは今、自分が変わったことを

示す記念碑を建て、今からあなたの人生を今までとは違ったものにすべきではないでしょうか。

銘記しておいていただきたいのですが、すべての問題が、ダビデの前に立ったゴリアテが一撃のもとに倒れたように、一度に解決するわけではありません。またすべての戦いが、クモラの戦いのように劇的な終末を迎えるわけでもありませんし、奇跡もジョセフ・スミスがミズーリ河岸で病人を祝福した時のように、全部が全部、直ちに起こるわけではありません。しかし、私たちはだれでも、人生のすべての問題を払いのけ、戦いに勝ち、奇跡を起こすことができます。申命記7:22の中で、主はイスラエルを清めるための戦いの計画について、こう述べておられます。「あなたの神、主はこれらの国民を徐々にあなたの前から追い払われるであろう。」大抵の場合、勝利は徐徐にもたらされるものです。

人生を新たな方向へと転換させるに必要な段階を、提案したいと思います。人生は山登りと同じです。私たちが清くなるためにしなければならないことは、悔い改めです。悔い改めとは、より良い道を見つけ、それをたどることなのです。

まず、「もし、ああしていたら……」というようなことは、言わないようにしなければなりません。

もし、サムソンがデリラと交わったらどうなるかを知っていたら、デリラに会いに行きはしなかったでしょう。(士師16参照)

もし、シドニー・リグドンが自分の哀れな最期を予知できたなら、へりくだって教会にとどまっていたかもしれません。

もし、あの金持ちが墓の彼方を見るのができたなら、すぐにも祈るようになったかも知れません。しかし、彼は地獄に落ちて初めて祈るようになりました。(ルカ16:

19：25参照)

もしも、あの頃に帰れたなら、もしもあそこへ行っていたら、もしもあのことに投資していたら、もしもあのの人に会っていたら、あなたの人生は別のものになっていたかも知れません。

私たちは皆、「もし、ああしていなければ……」と言って、大切な時間を無駄にしています。兄弟姉妹、本当に再出発がしたいなら、「もしも」という問いを発してはなりません。自分が現在いる所と到達したいと思っている所に目を向け、今までのように「もしも」に心を奪われてはなりません。

第二に、再出発をあすに延ばしてはなりません。「あすのことを誇ってはならない、一日のうちに何がおこるかを知ることができないからだ。」(箴言27：1)

「きょう」は、私たち一人一人が自分の戦場に記念碑を建て、再出発の印とする日です。私たちが大会を開く理由のひとつは、どのようにしたらよりよい人間になれるかを学ぶためなのです。

第三に、すべての面でイエス・キリストの福音に従って生活することを学ばなければなりません。「主は、汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84：88) 多くの人々は、自分の解釈した福音に従って生活しています。それは、自己欺瞞です。

真実の福音はただひとつです。私たちはそれを、自分のよいように解釈しているかも知れません。しかし、純粋なイエス・キリストの教えに忠実であれば、結局は問題に陥りかねない合理化の多くを避けることができます。主のメニューには、料理名はひとつしか載っていません。自分に都合のよい教えを選ぶということは、自己中心的なサタンのお考えです。高潔は私たちの生活の基礎なのです。

第四に、あるがままを見ることです。時として私たちは、問題から逃れて飛んで行きたいと願うことがあります。ダビデ王がそうでした。ダビデは善良な人でしたが、大変に困難な立場に追い込まれてしまいました。ダビデには、それが耐え難い重荷に思われました。ある日のこと、彼はこう泣き言を言いました。「……どうか、はどのように翼をもちたいものだ。そうすればわたしは飛び去って安きを得るであろう。」(詩篇55：6) 彼の心は、自らが犯した罪のために安らかではありませんでした。彼は、あらゆるものから逃れたいと思いました。実際にどこかへ逃げて行こうとする人もいれば、精神的な逃避をしようとする人もいます。しかし、それは問題の解決にはなりません。唯一の本当の逃げ道には、「個人の責任」という印がついているのです。

救い主の言葉を思い出しましょう。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11：28) そして救い主は、主の言葉を学び、主のくびきを負うようと私たちに誘っておられます。(マタイ11：29参照)

第五に、積極的な姿勢でチャレンジに立ち向かうことです。さあ奮い立って、始めましょう。ある詩人が次のように書いています。

あきらめるな、逆境迫り来るとも  
神の摂理の賢さよ  
その杯には、苦あり楽あり  
悲嘆の最中に、いと善き助言  
力強き金言よ、「あきらめるな」

(マーチン・タッパー、*Joy of Words* 「靈感の詩」『あきらめるな』p. II-77) 主が言われた次の言葉を銘記しましょう。「まず神の王国を建設し、神の義を打ち立てなさい。そうすれば、これらすべてのものは添えて

与えられるであろう。」(ジョセフ・スミス 訳マタイ6:33) また、その教節後に救い主はこう言っておられます。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」(マタイ7:7)

第六に、ある一部分だけしかやり直さない、ということがないようにしましょう。完全に、やり直しましょう。そうしなければ、古い服に新しい布でつぎを当てることになり、古い服は裂けてしまうでしょう。イエスは言われました。「だれも、真新しい布ぎれで、古い着物につぎを当てはしない。……破れがもっとひどくなるから。」(マタイ9:16) つぎを当ててはいけません。全く新しく始めなければなりません。金持ちの青年は、喜んですべてを捧げて完全に主に従おうとはせず、「悲しみながら立ち去」(マタイ19:22) りました。その後のことは、記されていません。

第七に、他人に対して自分を包み隠すようなことがあってはなりません。人生の憂き目の多くは、ふた心を持つために起こります。ありのままを言うことを学びましょう。間違ったことをずっと教えていて、主に咎められた時、ペテロがどんなにきまりの悪い思いをしたか考えてみて下さい。主は、こう言われたのです。「わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」(マタイ16:23) この時から、ペテロは偉大な弟子になりました。自分を包み隠さず、正直であれば、恥を被ることはありません。そのような人にとって、時は友です。またそのような人は、報いとして信頼を勝ち得ることができず。

最後に、これがすべてのことの中で最も難しいことかも知れませんが、赦すことで

す。パウロは言いました。「もしあなたがたが、何かのことについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。」(IIコリント2:10) 再出発しようと思うなら、必ず「敵を愛し、憎む者に親切に」し、「のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈」(ルカ6:27-28) らなければなりません。パウロはこの教えを、次のような言葉で力説しています。「だれも悪をもって悪に報いないように心がけ、お互に、またみんなに対して、いつも善を追い求めなさい。」(Iテサロニケ5:15) 「新規まき直しの国」を見つけた人の生活には、復讐心が入り込む余地はありません。

昔、若きヨセフが嫉妬深い兄たちのために、どんな目に遭ったか考えてみて下さい。兄たちはヨセフを奴隷商人に売りとばしてしまいました。ヨセフには、復讐をするに十分な理由がありました。しかし、事情が変わり、兄たちとエジプトで再会した時、ヨセフはこう言いました。「あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、……多くの民の命を救おうと計らわれました。」(創世50:20)

そうです。心痛や悲しみの多くは、結局は祝福となり、この世の生活の指針となり、私たちを霊的に整えてくれる糧となるのです。たとえ、今「なぜ」苦難に遭わなければならないのかわからなくとも、神様の方に心向け、神様のために私たちの生活を捧げることができます。そうです。「正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得」(教義と聖約59:23) るので。

皆さん、どうか、再出発の必要な地点に立ち至った時には、再出発をされますように。イエス・キリストの福音が回復されたこと、そして、私たちはその原則と教えに



従って生活しなければならないこと、そう  
する時に私たちは昇栄できるということを  
証致します。以上、へりくだって、貴き主

イエス・キリストのみ名により申し上げま  
す。アーメン。

---

## われらは、 正直なるべきことを信ず

---



十二使徒定員会会員  
マーク・E・ピーターセン

**私**たちの宗教の基本は、予言者ジョセフ・スミスによって与えられた信仰簡条です。

その第1条は私たちの信仰の基となるものです。こうあります。

「われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」

神が存在しなければ福音も救いも、復活も、光も、真理も、英知も、命さえも存在しないでしょう。神が存在しなければ天には銀河系はなく、太陽も月も星も地球も、また地が生み出すどのようなものもありません。言い換えれば、神が存在しなければ、ほかにもどのようなものも存在し得ないということです。

主イエス・キリストについても同じことが言えます。この教会で私たちは、救い主を全身全霊をもって受け入れています。

救い主は神の御子です。これは私たちが世の人々に厳粛に証するものです。私たちはそれを声を大にして雄々しく人々に宣言します。私たちの証は真実です。なぜなら啓示によるものだからです。

主イエス・キリストは全人類の贖い主で

す。しかしそれだけではありません。主は創造主です。なぜなら創造主がおられることを、創造主がナザレのイエスであることを私たちは知っているからです。ベツレヘムでお生まれになったみどり子イエスは、イザヤの言う「神われらと共にいますという意味のインマヌエル」(マタイ1:23参照)と同じ方なのです。

天のエホバであられるイエス・キリストは、諸天とその中のすべての天体をお造りになりました。太陽と太陽系を持つ私たちの宇宙を創造されました。またこの地球と生物、無生物を問わず、この地球にあるすべてのものを造られました。

すべてのものは主により、主を通して生まれました。できたもののうち、ひとつとして主によらないものはなかったからです。

主は今から約2千年前に地上に來られ、主の福音と教会とをお与えになり、そして全人類のために十字架におかかりになりました。

不死不滅の命は主によってしかもたらされません。主の福音に従うならば、私たちは主と共に永遠に生きるでしょう。しかし拒むならば、また無視するならば、たとえ生きても主と共にはいられません。低い段階に落とされ、泣き悲しみ、齒がみをするのです。(教義と聖約19:5参照)

キリストは私たちのすべてであり、キリストなくしては何もありません。私たちはまた神会の3番目の御方である聖霊を信じています。私たちは教会に入ると聖霊の賜を受けますが、その賜は、勧めに従いさえすれば一生の間私たちを導いてくれるのです。

ここに私たちは、信仰と行ないの一致点を見いだします。私たちは自問します。「私たちの行ないは信仰を裏づけるものだろうか。それとも空念仏になっていないだろうか。」

か。本当にすべての人に善を行なっているだろうか。」

正直、真実、徳、親切、これらは真のキリスト教精神を表わすものです。それがなければ、私たちはキリストに従う者であるとはとても言えません。

ヤコブはこう言っています。「行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい、そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう。」それから、だれにも誤解されないことがないように「信仰も……行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである」ときわめて明快に述べています。(ヤコブ2：14—18参照)

私たちはヤコブの言葉に賛同するとともに、神を敬うことを公言するだけで行ないのない人は全くの偽善者で、霊のない肉体が死んだものであると同様に、行ないのない信仰も死んだものである(ヤコブ2：26参照)ことを付け加えたいと思います。

罪は初めは魅力的に見えます。罪を犯すことによって得をすと思ったカインの場合もそうでした。今日、多くの人が同じような思い違いをしています。しかし、応報の律法は今も昔も同じです。罪の支払う報酬は、悔い改めがない限り、究極的には悲しみと死なのです。(ローマ6：23参照)

事実がわかっていながら、だれがあえて神に敵対するでしょうか。

しかし、もしも私たちが偽りを言い、ごまかし、欺き、人をそそのかして罪を犯させるならば、その段階で私たちは神の敵になります。

キリストはすべてのことについて正義の側に立たれる御方です。もしも私たちが悪い行ないにより主の教えを捨てたならどうなるでしょう。自分は、主の時代に主に背を向けた者たちと異なるとどうして言えるでしょうか。

罪に陥った人々は、すっかり欺かれて、事実に対して全く盲目になっているのです。主がお授けになった天の光の中にあつてさえも、何も見えないのです。

コラホルがキリストを拒んだ時のことを考えてみてください。すべてが終わって屈辱を受けた彼はこう告白しました。

「まことに私も前から神がましますことを知っていたのである。ところが悪魔が私を欺いて……神はないと私に告げただけでなく私がこの民に教えねばならぬことも教えた。私は悪魔の言葉が肉欲の心を喜ばすのを見てこれを民に教えた。」(アルマ30：52—53)

「悪魔の言葉が肉欲の心を喜ばす」という最後の言葉に注目して下さい。

悪魔の言葉は肉欲の心を喜ばしますが、不正直は確かに悪魔の言葉の中のひとつです。

もしも良きサマリヤ人が偽善者で、傷ついた旅人を助けるふりをしていただけだとしたらどうでしょう。もしもその男をもつと辱めるためにだけ宿に連れて行ったとしたらどうでしょう。宿の主人に、にせ金を渡したとしたらどうでしょう。また自分の





宿賃を払わずに逃げたとしたらどうでしょう。(ルカ10:25-37参照)

また、ふたりの主人に兼ね仕える人だったらどうでしょう。(マタイ6:24参照)彼の信心や思いやりが単なる見せかけだったらどうでしょう。

あなたは彼のことをどう思ったでしょう。救い主は彼を模範として取り上げられたでしょう。それとも他の偽善者にされたように、このサマリヤ人にも非難の言葉を浴びせられたでしょう。偽善者という衣に身を隠し、人を欺いて利用し利益を得、あげくのはは持っているすべてを奪ってしまふ人々が今の世の中にいることを考えたことがあるでしょう。

あなたは不敬な言葉を口にすると、そして人に言われないと偽りを偽りと感じない人について考えたことがありますか。

不正直の罪が重大なものであることを知

っていますか。不正直な単なるクリスチャンらしからぬ行為というだけではありません。反クリスチャン、反モルモン、反キリストの行為なのです。

それがうそであれ、ごまかしや盗みや詐欺であれ、またそれが家においてであれ、仕事、学校、スポーツにおいてであれ、不正直はイエスの教えとは全く縁のないものです。

これがわからないとすれば私たちは全くの盲目です。

カインはアベルを殺した時、盲目の状態でした。

コラホルがアルマと争った時もそうです。キリストを十字架にかけて、<sup>轟</sup>倒した人人は、その犠牲の血が自分たちと自分の何も知らない子供たちにかかってもよいと言いました。(マタイ27:35参照)その時、彼らは盲目でした。

教会員であったにもかかわらず、ジョセフ・スミスの殉教に加担した者たちは、全くどうしようもないほど盲目でした。

私たちは利己心と貪欲さから同じように盲目になりたいでしょうか。

不正直につながるようなことをして、教会の最も悪つな敵になりたいでしょうか。

福音には戒めとしてたくさんの「……してはならない」という項目がありますが、同時に、建設的な戒めもあって、私たちにキリストのような生活をする努力をするように求めています。

キリストの教えが私たちに良くしてくれなければ何の価値があるでしょう。福音は口先だけ、頭の中だけでも遊ぶ心理学のおもちゃではないのです。

福音は生き方です。

その目的は私たちがキリストのようにすることです。

主は「汝らはいかなる人物にてあるべき

か。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」と言われたのではないのでしょうか。(Ⅲニーフай27:27)

主は天の御父が完全であられるようにあなた方も完全な者となりなさいと言われなかったのでしょうか。(マタイ5:48参照)主は心からそう言われました。これは主の律法です。

頭の体操ではありません。主の教えは戒めであって、一つ一つに従順かどうか私たちは申し開きをしなければならないのです。

もしも疑いの心で戒めを受け、しぶしぶ従うならば、私たちは罰せられるだけでしょう。(教義と聖約58:29参照)

私たちは福音を積極的な気持ちで受け入れ、文字通り私たちの生き方に、日々の行動の指針にしなければなりません。一日一日の福音の教えに照らして生活を変えなければなりません。なぜならこの世は試しの時であり、神に会う用意をする時だからです。(アルマ34:32参照)

神に敵対しながら、私たちは神のみもとに行けるのでしょうか。神に敵対させるものは何でしょうか。それは、私たちのかたくなな心です。心がかたくななので、主の計画に従えないのです。私たち自身が主を生活の第一に置くことを拒んでしまうのです。私たちの暗黒を好む心がそうさせるのです。

なぜ主は私たちに神の国と神の義を最初に求めるように言っておられるのでしょうか。(マタイ6:33参照)大切なことでなかったら、このことは言われなくてもいいはず。半分従順な人は戒めを完全に破っている人と同じくらい早く、否もっと早く拒まれるでしょう。半分拒んで半分従うのは人格の欠如、神への愛の欠如を示す見せかけ以外の何ものでもないからです。ちょうどコウモリと同じような生活をしているのです。

私たちはふたりの主人に兼ね仕えること

はできません。たとえ試みても、その結果として確かなことは、私たちの主人はキリストではないと言わざるを得ないということです。なぜなら主はふたりの主人に仕えることは許しておられないからです。

御父は御子をどう表現しておられるでしょう。

御父の言葉を覚えていますか。

御父はイエスを「めぐみとまことに満ちた」と言っておられます。(ヨハネ1:14)

キリストは真理の神です。また愛の神、恵みの神です。

神の恵みとは何でしょうか。

イエスは恵み深き神、すなわち親切で、慈悲深く、思いやりのある神です。美しい福音を私たちに下さったのは、主の恵み、思いやり、愛、慈悲、親切、そして御自身のようになって欲しいという望みからなのです。

しかし、主の真理を拒むと、私たちは主の恵み、慈悲、親切、思いやりをも拒むこととなります。何もいらないと言うことと同じです。そして確かなことは、真理を拒めば、決して何も得られないということです。

大切なのは従順です。サウロがふたりの主人に仕えようとした時、サムエルはどう言ったでしょうか。「従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15:22)

ふたりの主人に仕えて、サウロより優れていると言えるでしょうか。

神を敬っていることを公言しながら、罪を隠して、指導者を欺こうとすることは、使徒ペテロの足もとで打たれたアナニアやサツピラとどこが違うのでしょうか。全く変わりないのです。(使徒5:1-10参照)

私たちはキリストのようになれと言われ



ています。真理と慈悲を育むように戒められています。もしも主のようになれる可能性があり、しかも主が真理と慈悲の神であるならば、私たちはたった今から自分の生活に慈悲と真理を確立しなければなりません。

これでふたりの主人に兼ね仕えられないことはおわかりになったでしょう。なぜなら、そうしたら、主は私たちを拒まれるからです。主は決してルシフェルと共にいることはありません。ですから、主をルシフェルと同じ場に置くことはやめましょう。アルマがモルモンの泉でバプテスマを授けた時、この謙遜な聖徒たちは神の恵みと愛と兄弟愛と慈愛に満たされました。(モーサヤ18:16—26参照)そして祭司たちも正しく働いたので、同じように神の恵みに満たされました。

主は初期の時代の長老たちにも、知識のみならず恵みをも具えた後で福音を宣べ伝えるべきであると言われました。(教義と聖約50:40参照)

また主は予言者ジョセフ・スミスに、戒めを守るすべての人は天からの恵みを受けると言われました。キリストの愛、慈悲、思いやり、いつくしみ、親切という恵みです。

これらは救い主の性格でもあります。ですから私たち自身も身につけるようにしなければなりません。主は、主に従うならば恵みに恵みを加えると言われました。(教義と聖約93:20参照)

それでも私たちは従わないでしょうか。そのつもりもないでしょうか。神の王国と神の義を求めようとしませんか。私たちは日々の生活においてこの宗教を二の次にしてはならないのです。

私たちは主の誓約の民です。私たちはバプテスマの時、終わりまで主に仕えることに同意し、そのために助けとして聖霊を受

けました。もし不正直や他の罪に心を向けるなら、この真理のみたまはどうなるでしょうか。罪を犯せば、追い出してしまうことになるのです。

聖霊の賜を受けている私たちがうそをついたりごまかしたりして不正直な生活をすれば、また真理を侮蔑して自らをうそで汚すならば、神への忠誠はどうなるのでしょうか。

交わした誓約はどうでしょうか。私たちは真理の神に仕えると約束したのです。つまり真理に従うと。

主の晩さんの聖餐はどうでしょうか。私たちはそこにおいてキリストの十字架上の死により高き天に向かい、主を常に忘れず、またその与えられた戒めを守ることを誓約するのではないのでしょうか。(教義と聖約20:77参照)

私は人と天使の舌をもって語っていますが、もしキリストの恵みと慈悲と親切と愛がなければ、私はやかましい鐘やさわがしい鏡鉢と同じになるでしょう。(Iコリント13:1参照)

要はへりくだって従順になることです。救いはそこにしかありません。聖なる主イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

# 教会監査委員会報告

委員長

ウィルフォード・G・エドリング

**私**たちは、1981年12月31日現在の教会の年次財政報告書、ならびに年間の運用状況を検査致しました。当委員会は、教会の中央基金およびその他関連組織の基金、教会財務・記録部の保持する報告書等、すべての財政報告書と運用状況を検査致しました。また、予算編成、会計、監査の手続き、ならびに基金の受領方法と支払いの処理方法についても調べました。その結果、教会の中央基金の支出が大管長会の承認の下に、予算手続きを踏んで行なわれていると判断致します。予算案は、大管長会ならびに十二使徒評議員会、管理監督会より構成された什分の一配分評議会で承認されています。そして、予算歳出委員会が、毎週開かれる会合において、基金の歳出が予算に基づいて行なわれるよう管理しています。

現在、教会の急速な発展に立ち遅れることのないよう、財務・記録部やその他の部門に最新の会計技術と設備を導入して、資料の処理を的確に行なっています。また当委員会と教会の法律上の代行者は、連邦政府ならびに州政府、諸外国の政府による課税問題を共同で適切に処理しています。

監査部は、他のあらゆる部門から独立しており、財政監査、運営監査、教会が利用しているコンピューターシステムの監査という3つの監査を実施しています。また監

査は、教会の全部門、およびその他の教会関連組織（財務・記録部が報告書を保持する）、ならびに伝道部、財務センター、合衆国外にある教会部門についても実施します。教会の発展と活動の拡大に伴って、教会の資産を保護する監査部の役割も大きくなっています。ワード部とステーキ部の基金の監査は、ステーキ部監査委員に割り当てられています。また教会が所有あるいは管理している法人組織の事業については、財務・記録部がその報告書を保管せずに、公認会計士または政府の機関が監査を行なっています。

当委員会は、年次財政報告書、その他の会計資料、ならびに財政運営の管理の基となる会計および監査方法を検討し、さらに財務・記録部、監査部、教会の法律上の代行者の職員と会合を持って調べました。その結果、1981年度の教会中央基金の収支は、先に申しあげました規定の手続きに従って正確に報告されてきました。

教会監査委員会

ウィルフォード・G・エドリング

デビッド・M・ケネディ

ウォーレン・E・ピュー

メリル・J・ベイトマン

テッド・E・デービス

# 1981年度統計報告

大管長会秘書  
フランシス・M・ギボンズ

**大**管長会は、1981年12月31日現在の教会員に関する統計記録を以下のように発表しました。(会員数は、大会までに提出された1981年度報告書に基づく概算による)

## 教会ユニット

ステーキ部数	1,321
地方部数	342
伝道部数	188
ワード部数	8,392
ステーキ部内の支部数	2,719
伝道部内の支部数	2,102
(1981年度中にステーキ部が103, ワード部と支部が622増加したことになる)	
ワード部または支部の組織されている国	86

## 教会員数

教会員総数	4,936,000
現在の教会員数は5,000,000を越えているものと推測される。	

## 1981年度の会員数の増加

幼児の祝福数	111,000
子供のバプテスマ数	69,000
改宗者のバプテスマ数	224,000

## 一般統計

出生率(1,000人当たり)	28.1
----------------	------

結婚率(1,000人当たり)	12.2
死亡率(1,000人当たり)	3.9

## 神権者

執事	213,000
教師	159,000
祭司	311,000
長老	419,000
七十人	32,000
大祭司	170,000

宣教師 専任宣教師	29,700
-----------	--------

## 系 図

1981年度に神殿エンダウメントのために処理した名前の数	4,346,000
------------------------------	-----------

## 神 殿

1981年度に執行されたエンダウメント数:	
生者	49,800
死者	4,101,000
儀式を行なっている神殿	19
建築中ならびに計画中の神殿 (今週発表されたものも含む)	21
年度内に閉鎖した神殿	1
(マンタイ神殿が一時閉鎖したにもかかわらず、エンダウメント数は1980年度よりも139,000増加している)	

## 教会教育制度

1980—81年の在籍者数：

セミナー、インスティテュート  
(特別プログラムを含む)……326,200  
教会経営の学校、大学、生涯教育…72,500

## 福祉活動

末日聖徒社会福祉機関の

援助を受けた人……62,800  
有給の職業に就いた人……27,200  
労働奉仕日数累計……533,800  
倉庫から支給された日用品  
(ポンド)……31,342,000

## 年度内に死亡した著名な会員

七十人第一定員会名誉会員および前七十

人第一定員会前任会長S・デルワース・ヤング長老、前任地区代表デル・アルビントリー、ハロルド・B・リー大管長夫人フリーダ・ジョン・ジェンセン・リー、前扶助協会中央管理会会長(在任期間1945—74)ならびに元全国婦人協議会会長ベル・スミス・スパッフォード、雑誌 *Friend*「フレンド」編集長ならびに元初等協会中央管理会副会長ルシール・リーディング、科学者・著述家ヘンリー・アイリング博士、コミュニケーション分野の権威者・発明家ハービィ・フレッチャー博士、元日曜学校中央管理会副会長A・ハーマー・ライザー、障害者教育に尽くし大統領賞を受けたルイズ・J・レイク、銀行家・地域社会指導者ジョージ・S・エクルズ。



---

## 真の偉大さ

---



十二使徒定員会会員  
ハワード・W・ハンター

**私**たちの中には、人生をおもしろくないと思っている人がいます。そのような人は、自分ではこれだけのことをしたと思っているのですが、何か根本的なところでそれができなと感じているのです。一生懸命働いて、正しい生活を送っているのですが、教会や世間で他の人ほどのことをしていないと思っているのです。このような人々のことを、私たちは心配しています。考えなければならないのは、人は何をもって偉大とされるかということです。

私たちは、いろいろな種類の「偉大」さがあるのはやされる世の中に暮らしています。世界的な英雄といえども長く人々の心に留まることのないことは真実ですが、世の中からチャンピオンや英雄が絶えたことはありません。スポーツ界では記録が更新され、科学者が驚くべき新技術や機械を開発し、また医師が新たな方法で人の命を救ったというニュースを、私たちは毎日のように耳にします。また、優れた才能を持つ音楽家や芸能人、類まれなる才能を具えた芸術家や設計家、建築技術者に会います。また、雑誌、屋外広告、テレビのコマーシャルに

は、顔立ちの整った人、歯並びのいい人、流行の服を見事に着こなした人、その他いろいろな分野で成功した人々が続々登場します。

このように、私たちは常にこの世での成功や偉大さの定義の中に浸っているので、自分とそのような人々を比較して、その人たちの立場を自分の立場、はたまた持てるものまで比較してしまうのは、無理からぬことでしょう。もちろん比較することによって私たちは啓発されますし、もっと頑張る、自分を高めようと思ひます。しかし、不当な、しかも正しくない比較をして自分の幸福を破壊してしまい、自分はだめだ、人生の落伍者だと思ひることがよくあるのです。また、こうした思ひのために、自分をどうすることもできない失敗者だと決めつけ、真の偉大さに至る要素を持っているにもかかわらず、それを無視してしまうこともよくあります。

1905年に書いた短い論説の中で、ジョセフ・F・スミス大管長は、真の偉大さをこう定義しました。

「私たちが、特別な、傑出した、類まれな、と呼ぶところのものは、確かに歴史を作ってきたかもしれない。しかし、それらが真の人生を作ってきたわけではなかった。結局のところ、神が全人類に共通して授けた務めを着実に果たした人が、真に偉大な人なのである。父親として、また母親として成功する方が、將軍として、また政治家として成功するよりも偉大なのである。」

(*Juvenile Instructor* 「ジュビニル・インストラクター」 1905年12月15日号, p. 752)

では、神が全人類に共通して授けたもうた責任とは、一体何でしょうか。確かに、それには良き父親や母親となるためにしなければならないことがいろいろ含まれます。しかし、もっと一般的に言えば、人々や主

のために自らの生活を捧げて行なう奉仕や犠牲など、数えきれない程様々な小さな事柄が含まれるのです。また、天の御父や福音についての知識を得ることもそうです。人々をこの信仰、この王国に導き入れることもそうです。そして、これらのことは、大抵の場合、世の人々の注目を集め、賞賛を浴びることはないのです。

スミス大管長の言葉を広義に解釈し、もっと具体的にすれば、こうなるでしょう。すなわち、初等協会の会長として、デนมザーとして、霊的生活の教師として、隣人として、よく話を聞いてあげる友人として成功すること、それが真の偉大なのです。つまり、いろいろな困難や失敗に遭ってもベストを尽くし、苦しいことの続くこの世の人生にあって長く耐え忍ぶこと、そうした苦難が他の人の進歩や幸福、そし

て自らの救いに寄与するのだと考えて努力すること、それが真の偉大なのです。

そうです。人に顧みられない、忘れられた日常生活の英雄は、わざわざ遠くに捜しに行かなくとも、私たちの身近にいます。皆さんも私も知っている人々の中に自分の努めを着実に果たしている人がいることでしょう。私の言う英雄とは、そのような人のことなのです。いつもいるべき場所において、喜んで働く人々もそうです。また、昼夜を問わず、病気の子供のために懸命に看病する母親、また、体の不自由さにもめげず、不平ひとつ言わずに黙々と生き抜く人々、献血に協力したり、スカウトのために進んで働く人々もそうです。また、母親ではなくとも、この世の子供たちのために母として働く人たち、いつも子供たちのそばにいて、愛し世話をする人たちもそう



のです。

さらに教師、看護婦、農夫など、この世の良き業のために働く人々、すなわち、人人を教え、食物や衣服を作り出し、しかも主のみ業を行ない、人を啓発し愛する人、正直で親切で、いつも勤勉に働き、同時に主であり羊飼いである方に僕として仕える人もそうです。

さて、私はこの世の偉大な業績を過少評価するつもりは毛頭ありません。そうした業績は私たちに多くの機会を提供し、また生活を文化的なもの、秩序あるもの、そして楽しいものにしてきています。ただ私が言いたいのは、私たちは最も価値あるものに焦点を置いて生活しなければならぬということです。救い主はこう言われました。「あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない。」(マタイ23:11)

ここで、再びジョセフ・F・スミス大管長の言葉を読んでみましょう。スミス大管長は、世にもてはやされる様々な業績に対して、正しい見識を持つようにとっています。大管長が、この世的な業績、すなわち世に名声を博するような事柄を「二義的なもの」と言っていることに注目して下さい。

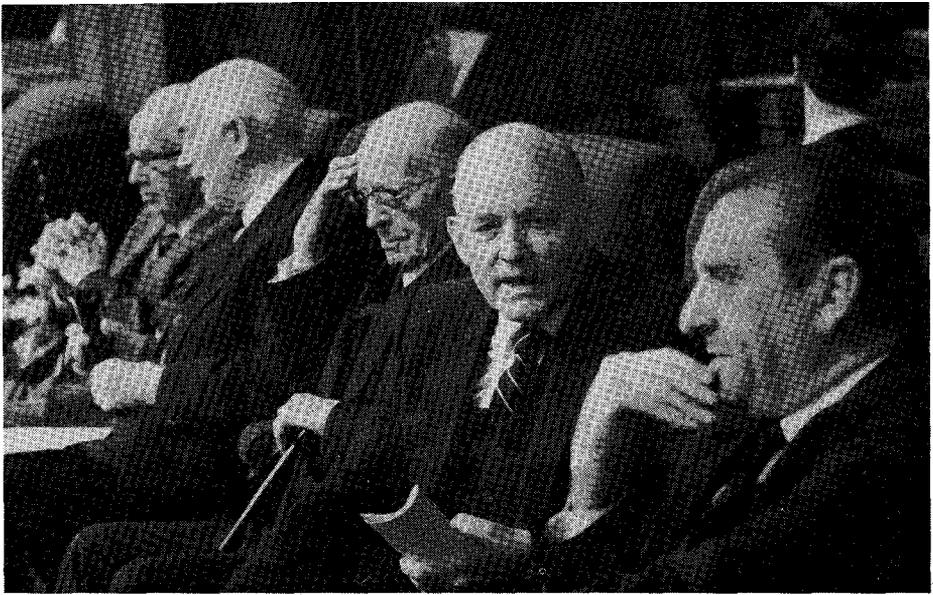
「そうした二義的な偉大さは、私たちが何の変哲もないと考えるものがあって初めて、異彩を放つのである。そうした二義的な偉大さは、そのような土台がなければ、単なる空しい誉れにしかならず、たとえそれが歴史の一頁を飾るものであっても、人生の中で、だれもがするようなごく当たり前の善い行ないの前には、影をひそめてしまふことだろう。」(同上)

さて、真の偉大さの定義ができましたが、ではどのように達成したらよいでしょうか。主は言われました。「小なる事より偉大な

る事起る。」(教義と聖約64:33) 皆さんは、一夜の内に大金持ちになったり、有名になったりした人を見たことがあるでしょう。こうした成功は、何の苦労もせずに入ることでもあります。偉大さは、そういうわけにはいきません。真の偉大さを身につけるには、時間がかかるのです。時には不遇な状態に見舞われることもあるでしょうし、先がわからなくなることもあるでしょう。そして、いつの場合にも、規則正しく、小さなことや、時には当たり前なことを、長い間こつこつと行なうことが要求されるのです。

真の偉大さは、偶然に得られるものでもなければ、一回の努力や達成で得られるものでもありません。人格を築き上げていてこそ得られるのです。日々行なう善悪の判断の積み重ねが必要なのです。ボイド・K・パッカー長老は、こう言っています。「何年にもわたって行なわれるこれら小さな選びの一つ一つが合わさり、私たちがどのような人物であるかを如実に示すことになるのです。」(『聖徒の道』『選び』1981年4月号、p.37) これらの選択はまた、私たちの人格をも示します。

自らの生活を評価するに当たり、私たちは自分が達成したことのみならず、どのような状況のもとで努力してきたかということにも、目を向けなければなりません。私たちは、一人一人異なった存在です。人生というレースで、皆スタートの地点が違っていています。才能や技能も違います。また、チャレンジや抱えている問題もそれぞれに異なっています。したがって、自分自身や自分の達成してきたことを測るのに、達成したことの大きさや数だけで測るのは、片手落ちと言えるでしょう。どういう状況下で達成したのか、また私たちが他の人々に及ぼした影響なども考えてみなければなり



ません。

ごくありふれた、だれでもするようなことが高く評価されるのは、今私が申し上げた一面があるため、すなわち、そのことが他の人に影響を及ぼすためです。ごく一般のありふれたことが、世の人が偉大だということよりもっと大きな影響を人に及ぼしたという例は数多くあります。

私は、天の御父が私たちに求めておられる偉大さというものは、福音を信じるすべての人が達成できるものだと思っています。私たちの周りには、私たちを偉大にしてくれる、小さな、単純なことがたくさんあります。ですから、主と同胞への奉仕と犠牲にその身を捧げてきた人々に、私は、何を申し上げるよりも、今までしてきたことをただもっと行なうようにと申し上げたいと思います。

この世のごくありふれたことを行なって、自分が一体どれほどのことをしているのだろうと考えている人、教会の中で熱心な働きをしている人、地味ではあっても大切な様々な分野で主のみ業を押し進めている人、また地の塩、この世の力、国の力として働

いている人、そのような人々に、私たちは心から賞賛の言葉を贈りたいと思います。終わりまで耐え忍び、イエスの証に雄々しくあるならば、皆さんは真の偉大さを身につけ、天の御父と共に住むことができるでしょう。

ジョセフ・F・スミス大管長は、こう言いました。「真の人生を作りものの人生と交換してしまうことのないようにしようではないか。」(「ジュービニル・インストラクター」p.753) 小さなことから大きなことが起こることを忘れないようにしましょう。神が定めたもうたことを忘れずに行なうようにしましょう。神が定めたもうたことを行なうのは、大切なことであり、欠くことのできないことなのです。たとえ世間がそれをつまらないものと見なしたとしても、私たちは、やがては真の偉大さへと導かれるのです。

神から与えられた事柄を行なうに当たって、皆さんがくじけることがないようにと祈ります。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

# 人類の希望である 永遠の結婚



七十人第一定員会会員  
ロバート・L・シンプソン

**私** はきょう、だれもが憂慮している現代世界の危機を中心にお話したいと思います。この危機は神により定められた家庭をむしばむガンのようなものです。

離婚はその悪魔的とも言える副作用でもって社会の基盤を脅かしつつあります。かつてジョセフ・F・スミス大管長はこう言いました。「結婚は人類を存続させるものである。結婚が行なわれなければ神の目的は達成されず、徳は砕かれて悪徳と墮落と化し、地は空虚なものとなるであろう。」（「福音の教義」 pp. 264—65）この神権時代のどの予言者をとってみても、それぞれ自分の言葉で本質的には同じことを繰り返して述べています。

国立健康統計センターのデータによると、合衆国内で今年すでに 200 万件の離婚が承認されているとのこと。これは歴史上最高の数で、20年前の3倍にあたります。世界のほとんどの国で同じような傾向が見られます。今日、結婚した夫婦の3分の1以上が離婚に至っています。そして、不幸にも教会員の家族の中でもこの傾向に追随する人が驚くほど増えているのです。しか

しそうあってはなりません。

先日、「U.S. ニュース・アンド・ワールド・リポート」誌が離婚や家庭関係の権威ハーバード・A・グレバーマン氏の言葉を引用して次のように述べています。「離婚率が最も増大しているのは結婚生活10年以上の夫婦においてである。今日では、結婚生活25年から30年の夫婦の離婚も決して珍しくない。」さらに、その主要な原因についてこう述べています。

「第一に、互いに正直に話し、心の思いを打ち明け、最高の友として敬う能力の不足があげられる。……話し合いといってもほとんどが互いに自分の考えを一方的に伝えるだけの表面的なものでしかない。」

さらにグレバーマン氏はこう続けています。「あまりにも多くの人が互いに話し合うというよりも、ただ相手と言葉を交わしているといった状態で終わっている。こうした意思の疎通の乏しさの結果、アルコール中毒や不誠実、あるいは肉体的、精神的な苦痛へと追いやられてしまうのである。」

多くの人々の中に、忍耐や苦痛に耐える能力の欠如が見られ、人は不完全であり、自分の伴侶もまた不完全であることを認められないでいる。」（“Why So Many Marriages Fail” 『なぜ多くの結婚が崩壊するのか』「U.S. ニュース・アンド・ワールド・リポート」1981年7月20日号、pp. 53—54）

家族間の意思の疎通を良くする確実な方法はひとつしかありません。すなわち、主の方法しかないのです。その方法として、主は評議会の方法を提唱されました。

教会は各評議会から成り立っています。教会のすべての評議会の中で最も大切なものは、夫婦が管理する家族会議です。この家族会議において夫婦は家族の輪の中で生じるあらゆる神権の祝福を同等に分ち合うと同じように、くびきを共にするのです。

夫婦に対する主の永遠の目的は、夫婦がひとつとなることです。

次に、主は私たちに「共に論ぜん」（教義と聖約50：10）と言っておられます。議論したり、熱弁をふるったり、陰口を言うのではなく、隠やかな声で論じるのです。子供たちにとってこれほど素晴らしい模範はありません。家族が大切な決定をする時、福音の教えに従って判断するならば、決して誤った方向に進むことはないでしょう。そしてその後、共に論じ合うならば、そこでなされた決定は自信を持って押し進められ、しかも神の律法と一致したものとなるに違いありません。

救い主はかつて二マイルの精神について教えられました。（マタイ5：41参照）これは利己心を捨てるということです。この二マイルの精神によって、ほとんどすべての夫婦が結婚生活を実りあるものとすることができます。しかし夫婦の一方だけが二マイルの精神を励行してもその船はバランスを失って転覆してしまいます。結婚生活の破たんとはそのような状態を指しています。利己心を捨てる気持ちは、夫婦双方から生まれてくるものでなければなりません。

結婚して1年目の夫婦も、あるいは25年目を迎える夫婦も、一日の終わりに枕元で交わす会話の価値を知っていただきたいと思います。この夜のひとときこそ、家庭のたな卸しを行ない、明日の予定について話し合う絶好の時間です。そして何よりもお互いに愛と感謝の気持ちを再確認し合う最もよい時間です。またある時には、次のような会話を交わす場となるかもしれません。「きょうはごめんなさいね。許して下さい。」

御存じのように私たちは皆不完全で、互いに譲り合うことのできない点が毎日積み積み積もって、結婚関係の崩壊の原因となる

のです。これらはすべて意思疎通の貧しさから来るものであり、また愚かな高慢さが原因となっていることがよくあります。

教会はいかなる形の独裁に対しても断固として反対する立場を取っています。家庭における神権指導者としての召しの職を独裁的な方法で管理している人は福音の教えに反するものです。そのような人は、「共に論じる」ことからもたらされる霊的な報いを受けることができません。そして、一日の終わりの話し合いも一方的なものとなり、たいていその後にくるものは謀反です。

独裁者はいつも最後通牒を与えようとしています。気づかないかもしれませんが、現代の若者に最後通牒を与えることはほとんど間違いなく失敗に終わるでしょう。それはまさに赤旗を振るようなものであり、愛する者へ宣戦布告をすることなのです。

主は私たちにこう警告されました。「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。また、親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を基だ大いならしむるものによる。」（教義と聖約121：41—42）

またジョセフ・F・スミス大管長は父親の皆さんにこう勧告しています。「正しい精神から離れ、自らの義務をおろそかにしなければ、人は守護を託された人を拒んだり、侮辱したりすることはない。人は妻子を敬う責任がある。」（「福音の教義」p.276）

離婚の要因として、忘れてならないものももうひとつあります。それは、家計管理の失敗です。たとえ什分の一と捧げ物を納めたとしても、その一方で家計の正しい運用に関する天父の勧告を無視するならば、天の窓が少々開きにくくなることはないでしょうか。そして、約束された祝福も期待



されたほどやってこないでしょう。

この神権時代のあらゆる予言者は、明確な、しかも誤解を招くことのない言葉で聖徒たちに負債を避けるように教えておられます。(今朝もキンボール大管長は再び同じことを繰り返されました) また一獲千金を夢みるような計画に参加することのないようにと言われてきました。予言者は私たちに儉約をし、貯金をするように、そして額に汗して働くという伝統的な方法でお金を得よう助言しています。私たちは勤勉と儉約の正しい模範を示し、貧しい人や困っている人に捧げ物をする時は惜しみなく、しかも欠かさず行なうよう勧められています。

この厳しい経済状態の中にあって、家族が神の命令を守って生活することは欠くべからざることです。夫と妻は家計について定期的に論じ合う必要があります。家計の切りつめが必要であれば、今行なって下さい。どうせしなければならないことですから、後で取り返しもつかないような状態を招くよりもはるかにましではないでしょうか。家計の問題は、しばしば私たちを離婚

の法廷へと導く危機をはらんでいるのですから。

次のような言葉ほど結婚生活を破壊に陥れるものではありません。「きょう、ヘルスセンターに200ドル払って入会してきたよ。」よく計画された健康管理プログラムはそれ自体価値あることですが、厳しい家計の中で突然出費するようなものではありません。これらは前もって十分話し合われているべきものです。先日、ニール・A・マックスウェル長老が巧みな表現を使っていました。「もし自分の夫が着陸に失敗しそうであるならば、妻はその飛行計画について見直すべきです。」

次に、安定した結婚生活を築く基となる3つの項目について取り急ぎ申し上げたいと思います。

第一に信仰、すなわち福音の第一原則です。これはまた、結婚の第一原則でもあります。この信仰は、神やその御子に対する信仰、あるいは生ける予言者に対する信仰だけではありません。夫婦が互いに真心から絶えず信じ合うこともそのひとつです。また子供たちに対しても同様の信頼を寄せ

ることではないかと思えます。

第二に従順、すなわち天の第一の律法としてしばしば述べられているものです。神の律法に従うことなくして祝福はありません。主との誓約に対して従順であることは、家族の中に平安と愛をもたらすための必要条件です。

第三に忠実です。苦しい時も楽しい時も自分の伴侶に対して忠実であることは、基本的な特性をより堅固なものとし、そのために夜が昼に次ぐごとく必然的に教会と真理の原則に忠実に従うことができるようになります。

純潔の律法は十戒のひとつです。この中には結婚生活における忠誠も含まれます。兄弟姉妹の皆さん、自分の生活がすべてその忠誠の上に成り立っていると考えてこの神聖な原則を守り通して下さい。なぜなら、永遠の生命は結婚生活における忠誠にかかっていると福音の真理の中ではっきり述べられているからです。

聖典は、その永遠の真理について確認し、「結婚は神の人に定めたるところなればなり」(教義と聖約49:15)と記しています。また次のようにも記されています。「主にあっては、男なしには女はないし、女なしには男はない。」(Iコリント11:11)

この神権時代の予言者のひとりはこちら述べています。「神は結婚を勧めておられるばかりか、命じてさえおられるのである。人がまだ不死不滅の状態にあり、罪が世に入り込む前に、私たちの天父は自ら最初の結婚を執行された。天父は私たちの始祖を聖なる結婚の絆で結び、生めよ、ふえよ、地に満ちよと命じられた。神はいまだこの戒めを変更も、取り消しも、破棄もしておられない。この戒めは人類のあらゆる世代を通じて効力を有している。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」p.266)

マルコはこう述べています。「だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない。」(マルコ10:9)

兄弟姉妹の皆さん、教会における離婚はすべて、王国の働きを妨げるものです。離婚の恐怖にさらされている夫婦は、それぞれ大きな努力を払う必要があります。お互いに話し合うだけでなく、自分を管理する神権指導者からもっと助言を受けることが必要です。そして、結婚の誓約に関する永遠の特質をもっと広い視野で理解することが必要です。

長年の経験から、実りある結婚の鍵は無私の気持ちであることが証明されています。そして、御存じのように、無私の気持ちがあれば「共に論じる」ことを喜んで受け入れます。

また、無私の心は二マイル行く努力を要求します。

無私の心は安全な家計管理への道を備えます。

無私の心は離婚を防ぎます。

離婚をした人々が来世において問われる最も重要な事柄は、多分次のような点についてだと思います。

1. 「あなたは離婚を防ぐために可能なあらゆることを行なってみましたか。」
2. 「福音の真理を余すところなく生活の中に取り入れられましたか。」
3. 「あなたは神権者の助言を求め、耳を傾け、それに従って生活していましたか。」

願わくは主の祝福があって、私たちがすべての結婚を神が定められたものとして考えることができますように。なぜならば、ジョセフ・F・スミス大管長が述べているように、結婚は人類の希望だからです。

これらのことを主イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

# 瞑想は生活を 靈的なものにする



七十人第一定員会会員  
ジョセフ・B・ワースリン

ジョセフ・F・スミス大管長に与えられた啓示の中に私たちにとても大切なメッセージが記されています。

「1918年10月3日、私は自分の部屋において聖典の言葉に思いをさせ、世を贖うために神の御子が払われた大いなる贖いの犠牲……について深く考えていた。……これらのことについて深く考えていると、主のみたまが私の上にとどまり、理解の眼が開かれた。」(死者の贖いに関する示現1-3, 11節)

私がきょうお話したいのは、この「深く考える」ということ、そして深く考えることによって得られる事柄についてです。

「深く考える」とは、心の中で思い計り熟考し、瞑想することであり、それによって靈的な理解の眼を開くことです。また、スミス大管長が記述しているように、考える人には主のみたまがとどまります。

イエスはニーファイ人に次のように警告されました。「されば、汝らは各々その住居に帰りて後、われがこれまで汝らに語りしことをよくよく考えて、汝らの理解できるために、……わが名によりて御父に祈るべ

し。」(IIIニーファイ17:3)

私たちは聖典を通して、単なる表面的な関心ではなく、神の事柄にもっと注意を向けるよう教えられています。私たちは聖典についてもっと深く考え、私たちが一体何者なのか、また将来どうなるのかについて考えなければなりません。

ある所にひとりの若い建築家がありました。彼はちょうど自分で独立して仕事を始めようとしていました。そんな彼のところに、父の友人で非常に金持ちの人が来て、言いました。「それでは手始めに、僕の家を一軒建ててくれないか。ここにその設計図がある。お金ならいくらでも出す。そこで最高の材料を使い、完璧なものを作ってもらいたい。費用はいくらかかってもよい。必要なだけ請求書を私のところに回してもらいたい。」

この若い建築家はこの信じ難いような条件を知り、この際ひともうけてやろうと考えました。最高の技術者を雇い、最良の材料を仕入れる代わりに、いろいろな箇所をごまかしました。最後に、使い古しのくぎを薄っぺらな壁に打ち終わると、この青年は家の鍵と、合計10万ドルにおよぶ請求書を持ってきました。するとその紳士は即座に10万ドルの小切手を切り、それから家の鍵も若い建築家に渡して明るく言いました。「君が建てたこの家は僕からのプレゼントだ。この家で幸せに暮らすように。」

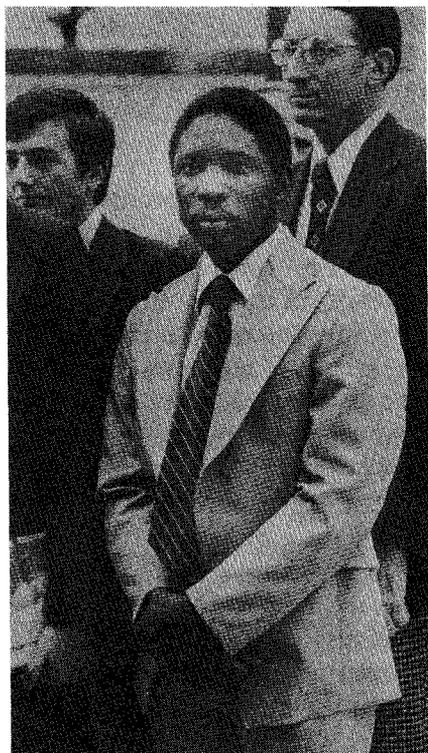
この話の中で、若い建築家は不正直な思いや行ないの結果がどうなるか深く考えませんでした。もし考えていたとしたら、かつてイエスが教えられた次のことがもっとよく理解できたはずでした。

「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行かうものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、

洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ7:24—27)

この愚かな建築家が行ないについて深く考えていたならば、正しいことを行なうと約束をしておきながら、それを実行しなければ身の破滅をもたらすことはわかっていたはずだ。

この愚かな建築家の話は私たちの生活にも当てはめることができます。私たちは過



ちの結果について深く考えなければなりません。天父は私たちに生命を与えられ、そして自由意志を授けられました。この自由意志によって、正しい選択、決定を行ない、その結果喜びと幸福を得るようにチャレンジが与えられました。これは一種の技術であり、修得しなければならないものです。喜びと幸福に至る道は有料です。無私の気持ちと自己訓練という代価を払わずに、真の喜びを得ることはできません。私たちは自分たちの行ないとその結果について深く考える必要があります。

御存じのように、現代の世の中には悪が慢えんしています。精神的、情緒的、肉体的に大きな、しかも長期にわたる問題を引き起こす麻薬の常習者も跡を絶ちません。夫婦は忠誠を忘れ、家庭と家族の崩壊を招いています。サタンは歴史上これまでになかったほど力を増し、方方で成功を取っています。

しかし多くの人が陥る悪はすべて頭の中、つまり考え方から始まります。意志と想像が争えば大抵、想像が勝つことは、経験からわかっています。想像は理性を打ち破り、私たちに味覚、視覚、聴覚、嗅覚、感覚の奴隷にしてしまいます。肉体は確かに心に隷属するものです。イエスは次のように述べておられます。

「しかし、口から出て行くものは、心の中から出てくるのであって、それが人を汚すのである。というのは、悪い思い……は、心の中から出てくるのであって、……」(マタイ15:18—19)

広く人々の間に読まれ親しまれているジェームズ・アレン著の随筆「人、思うが如く」(*As a Man Thinketh*)の中で、アレンはイエスの教えを強調して次のように述べています。

「人を造るのも、破壊するのもその人自



身である。人は『思い』という兵器工場の中で、武器を製造し、その武器で自らを滅ぼす。また道具を発明し、その道具で喜びと力と平和の宿る天の家を建てる。人は正しい選択と思いを自分に適用させることによって、神の完き状態に到達する。逆に、思いを乱し、誤用すれば、獣以下の水準に下落してしまう。この両極端の間に、人格の階級が存在するのである。人はその人自身が造るものであり、またその人の行く末を決めるものでもある。……

人が達成すること、あるいは達成できないこと、これらはすべてその人自身の思いの直接の結果である。」(pp. 8—9, 34)

人が善人から悪人へと知らず知らずのうちに変わっていく様は、微妙なものであり、意識してできるものではありません。それは、誤った思いを抱き、悪の種子をその心

に植え付ける過程から生じるものです。この「種子」という言葉はある過程の始まりを示す象徴的な言葉であり、モルモン経の偉大な予言者アルマはこのことを次のように説明しています。

「今、神の御言葉を種子になぞらえて話すと、あなたたちが一つの種子を自分の心の中に蒔くとき、もしもその種子が真理の種子すなわち善い種子であって、あなたたちが不信心の心でこの種子を抜きとったり、主の『みたま』に逆らったりするとならなければ種子は次第に胸の中でふくれ始めるであろう。そこで、あなたたちは種子がふくれ始めることを感ずると、次のように思う。すなわち、これはまことに善い種子、善い言葉に違ひなく、私の心を大きく開き、私の理解力を増し、私はようやく好い味を感ずると。」(アルマ32：28)

善い種子を良い気持ちで心の中にかくためには、長期にわたる熱心で忍耐強い熟考が必要です。熟考とは、身と霊を清める深遠かつ積極的な再生の過程なのです。

ほぼ100年前、スタンフォード大学にデビッド・スター・ジョーダンという卓越した学長がいました。次の言葉はそのジョーダン学長の「清くあることの力」(*The Strength of Being Clean*)の中の一節です。この問題に対する私の考えを要約しているようですので、ここで引用したいと思います。

「(現在ではおもにポルノグラフィという言葉に代表されている)低俗という言葉は、良い趣味や良い人格を持つといった面での発達が止まっている状態を示している。……低俗は人の心を弱め、そのほかの弱点をも引き寄せる。……低俗な音楽を好きになること、何の益にもならない書物を読みふけること、扇情的な新聞を読むこと、(あるいは卑わいなテレビ番組をみること)……くだらない小説にうつつをぬかすこと、俗悪な映画やショーを楽しむこと、あるいはくだらない冗談を言って喜ぶこと、そのほかいろいろな形の粗野でわがままな行ない、野放図のほうずなことなどは、すべて低俗な行為と言わなければならない。……

[なぜならば]不節制の根本には、幸せでない時に〔まず思いによって、次いで〕麻薬の力を借りて幸せな気持ちになろうとする行為がある。人は身体の組織が引き裂かれる時の刺すような快楽を求めて、自らの神経組織を破壊してしまうのである。」(pp. 24—25, 27)

両親は家庭の夕べについて、また子供たちに福音を教える責任について深く考えなければなりません。またすべての会員は聖餐会や神権会、扶助協会で受ける教えについて深く考え、ホームティーチャーが与えるメッセージについて深く考える必要があります。

神権者は神権を導び、正義の模範となる責任について深く考えなければなりません。定員会指導者は定員会会員に仕え、定員会会員を教え、強め、さらに愛と親切の気持ちで彼らを導く責任について考える必要があります。若人は自分たちが直面する問題について深く考え、両親や指導者、そして天父が望む方法で問題に対処してゆき、自分たちを清く保つことができるよう備えなければなりません。

私たちが神の旗印に従って最善に向かって努力する時、モルモン經の偉大な予言者ベンジャミン王はその方法を次のように指摘しています。

「しかし、これだけは言えると言うのは、もしもお前たちが自分自身と自分の思想と自分の言葉と行いに注意をせず、神の命令を守らず、私たちの主が降臨したもうことについて聞いていることを生涯の終りまで信じないならばお前たちは必ず亡びるということである。それであるから世の人々よ、記憶せよ、亡びるな。」(モーサヤ4:30)

イエスはこう言っておられます。「あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタイ6:21)

スペンサー・W・キンボール大管長は、深く考え、祈り、そして神の王国のために啓示を受ける予言者、聖見者、啓示を受ける者として私たちに偉大な模範を示して下さっています。

願わくは、私たちが清き心を求める時、自分たちの義しい行ないと思ひについて深く考えることができますように。また私たちが忠実に、そして勤勉に働くことができますように。

私は、この「深く考える」という崇高な目的の中に力強い改心の力が隠されていることを心からイエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

## 義なる教師のために



七十人第一定員会会員  
ジョン・R・ワック

**去**年の夏のことですが、砂漠の一本道の彼方が一面水でおおわれたように見えたことがありました。子供たちは、あれは湖だ、貯金を全部賭けてもよいと言いました。しかし、しばらくしてそこへ行き着くと、水など一滴もありませんでした。蜃気楼だったので。

この人生の中には、確かにこうだと思っていたことが、突然逆転してしまうというようなことが、何とたくさんあることでしょう。(アルマ62:41参照) サタンがわなを仕かけるのです。サタンは、錯覚の主です。サタンは、末日聖徒の注意や力を神の純粹な真理からそらせ、私たちに遠まわりをさせ、気をくじこうとして、蜃気楼のような錯覚を起こさせるのです。

サタンは、実にうまく靈的な錯覚を起こさせます。錯覚によって、人の心の中に少しずつ、見せかけの靈性や移ろいやすい心、それに自己欺瞞などの種をまき、人の心をかたくなにし、罪へと導き、神から引き離すのです。(I ニーフアイ12:17; III ニーフアイ6:15)

人の靈性を弱めるサタンのずる賢い錯覚

の使い方について、お話ししたいと思います。サタンは、錯覚を用いて、誇らし気にならざるを得ないように仕向けます。「私には、力がある。私は主が生きておられることを知っているが、主は、これ位のことは主を煩わせず、自分で何とかするように望んでおられる。」聖典をよく読まないといかにも知れませんが、サタンは世の人々には神などないと教えます。しかし、聖徒たちには、こう言うのです。「神は存在する。しかし、単に生命をつかさどるだけであって、今日、私たちの個々の問題に干渉されるわけではない。」また、世の人々には祈るなど教えますが、聖徒たちには、こう言います。「今は祈るな。祈りたい気持ちになっていないのだから。」(II ニーフアイ32:8-9) どちらにしても、結果は同じです。

またサタンは人に、自分は靈的で謙遜であるという錯覚を起こさせます。そうすると、人はそう信じ込むようになり、人目にもそう見えるように振る舞います。また、真理からは遠ざかって行くのに、錯覚のせいで、まだ真直ぐで狭い道を歩んでいるものと思い込むようになるのです。そして、自分は他人よりも正しいという態度をとるようになり、心がかたくなになって、何も感じなくなり、おごり高ぶるようになります。(I ニーフアイ17:45参照) この錯覚の主は、心が主から遠く離れていても、口先では主を敬うようにと教えます。(ジョセフ・スミス2:19参照)

サタンは、真理を真理でないものに見せかけ、靈性は単なる知識であると教え、生活の中で真理を応用するようには、少しも教えません。自分には知識があると思って、自分の道を歩んでいる人は、自分勝手な解釈の入った知識を身につけ(箴言3:5; II ニーフアイ9:28参照)、人の誉れや賛辞を追い求め、人を教えるに十分な知識

を持っていると思込むのです。そうなるともう、その人の知識自体が錯覚となり、その人を主のみたまから隔てるものとなってしまいます。

主は、人に非常に多くの物質的な恵みをお与えになることがあります。するとサタンは、狡猾に立ちまわって錯覚を起こさせ、その恵みを反対のものに用いるように仕向けます。人の心をこの世のものに向けるようにするのは、(教義と聖約121:35) そうすると、その人は兄弟たちを自分自身のように敬わなくなり、本来人間は平等であるはずなのに、わけへだてをしたり、階級を付けたりするようになります。そうです。サタンは、世の初めから偽りを言う者であり、「あらゆる罪の源」であり、暗黒の業を押し進め、「世の人の心を支配」しているのです。(ヒラマン6:30参照)

世の錯覚を利用して、サタンは、身勝手、

不信仰、恐れ、疑い、貪欲、移ろいやすい心、自己中心的な考えを人の心に植え付けます。サタンは、人に遠まわりをさせて時間を無駄にさせ、善いことから心をそらせ、霊的な感受性を弱めます。サタンは、ことさらに末日聖徒を、つまりサタンについて真実を知っている人々を惑わそうとしています。家庭や教室で、あるいは説教壇の上から、あるいは世にあって福音に従うことにより、または直接教えることにより人々に影響を与えることができる人々を、ことさらに惑わそうとしているのです。欺瞞がどんどん増しつつある今日、私たちは霊に関するサタンのわなに敏感になり、自分自身の認識をしっかりと持っていなければなりません。

ではここで、自分自身の福音の理解や他人から教えられた教義が正しいか否かを知り、錯覚を解き、真理を認識する上で助け



となる8つの標準についてお話したいと思います。これらの標準は、「義なる教師のための霊的な指針」と呼ぶことができるでしょう。

1. 教師はただ真理を教えるだけではなく、「みたま」によって教えなければなりません。(教義と聖約50:17-22参照) いかなる時も、教師は「みたま」によって、「みたま」に裏づけられた真理を教えなければなりません。また、えりすぐられた人々でさえも惑わされることを認識し、権威に頼らず、勝手の解釈を教えるようなことがあってはなりません。

2. 教師は、教会幹部や地元の指導者が安全な所へと導いてくれることを認識し、彼らと一致協力しなければなりません。また、主が指導者たちに識別の賜を与えておられることを心に留め、霊にかかわることであれ、この世のことであれ、指導者の教えに従い、指導者と心を一にしようという望みを持たなければなりません。(教義と聖約46:27) また、不平を言ったり、批判をしたり、主に油注がれた者の悪口を言ったりしてはなりません。そのような行ないは、背教の第一歩です。



3. 義しい教師は、聖典からの教え、そして聖霊によって教えられ裏づけられた教えを説かなければなりません。(教義と聖約52:9) 「人の誠命を教えとして教え」(ジョセフ・スミス2:19) てはなりません。また、聖典の教えに人の歴史や意見を混ぜて教えたり、この世の哲学や推測を教えることに大切な時間を費やして、サタンに口を入れさせるようなことがあってはなりません。また、主の予言者が教えていない「教義」を教えるてはいけません。(教義と聖約28:2-3参照) また、義しい教師は、聖典が人を信仰と悔い改めに導き、人の心を変えることを知っています。(ヒラマン15:7; アルマ37:8)

4. 教師は、人々の本当の必要に応じて、信仰、悔い改め、祈りなどだれもが応用できる基本的な福音の原則を平易に教えなければなりません。(教義と聖約19:31; アルマ16:22) また、聖典の教えをあまりに拡大解釈したり、ひどく展開させたり、また、どのような原則を教えるにせよ、風変わりなことや極端なことを教えるてはいけません。たとえば、極端に長い祈り、救い主やアダムについての教義、極端な食物制限、政治や投資の問題などがそれです。極端な事柄には、サタンがかかわっていることを心に留めておきましょう。義しい教師は、主の教えが正しいことと、「何事にても慎しみて」(教義と聖約12:8) 行なわなければならないことを知っています。

5. 教師は、真昼の光の中で語るように語らなければなりません。(モロナイ7:15, 18-19参照) 秘密の教義や、特定の知識層のこと、または隠れた召しについて話してはいけません。(ヤコブ4:13; 教義と聖約42:11参照) 何事であれ、平易な事柄を語るようにしなければなりません。義しい教師は、教義や召しが公開され、聖徒たちの挙

手によって承認されることを知っています。

6. 教師は、生徒たち全員を自分自身と同じように扱い、分け隔てをしてはいけません。(ヤコブ2:17参照) また、主のみ前に優れた教師になれるよう努力しなければなりません、人に勝とうとして争ってはなりません。(教義と聖約58:40-41) 義しい教師は、いかなる人も「その心が謙遜で柔和」でなければ「神のみこころにかなわない」(モロナイ7:44) ことを知っています。

7. 義しい教師は、主に栄光を帰するよう努めます。また、自分に栄光を帰することを避けます。また、売教行為、すなわち、利益や人の誉れのために教えたり、自分自身を高くしたりするようなことをしません。(IIニーフアイ26:29; モーサヤ18:26参照) また、義を教え、罪に立ち向かって力強く語り、神様の方へ目を向け、個人の利益や誉れや人気を求めません。義しい教師は、野望は背教への門を大きく開くものであることを知っています。

8. 教師は、絶えず個人的な悔い改めをしていなければなりません。(モロナイ8:26参照) また、柔和、慈善、純粋な動機を持つこと、主に信頼を寄せることなどにおいて模範にならなければなりません。福音を教えるだけではなく、応用しなければなりません。(教義と聖約41:5; 52:15-16参照) これは、悔い改めをしている人にとっては当然のことです。

では、締めくくりに、どうしたら人間が陥り勝ちな、不完全な真理を教えたり、それに従って生活したりするという過ちに陥らないで済むでしょうか。それは、自分自身の靈性を維持することです。真の靈性とは何でしょうか。それは、知識、知性、学識でしょうか。おそらく、それはもっと別のもの、すなわち心の状態を純粋にしてい

くことではないでしょうか。そうです。それは真心をもって神を仰ぎ見ること、そして、へりくだる心と悔いる精神を持つこと(IIIニーフアイ9:20; 教義と聖約136:32-33)、誠心誠意、物事を行なうことなのです。

私は、ここ数年の間、幹部の兄弟たちと共に働く機会に恵まれています、この方方の何よりも極立った特性は、他の靈的な指導者たちと同様、「誠心誠意」主のみ名をその身に引き受けたい、見返りがどうであれ、だれよりもよく主に仕えたいという望みを持っていることです。(教義と聖約18:27-28, 38参照)

教会の責任を通して主に仕える資格が、その心の持ち方にかかっているということは、何ら驚くに当たりません。(教義と聖約4章; 12:8; 41:11) 主はこう言っておられます。「主なる私は、すべての人々をその行ないと心の望みに応じて裁く……。」(ジョセフ・スミス——日の光栄の王国に関する示現第9節)

兄弟姉妹、主とその僕たちの靈感あふれる助言に従うならば、末日聖徒は道に迷うことはありません。もし人が

- ・絶えず祈ることによって
- ・絶えず聖典を学び瞑想することによって
- ・指導者と光と現在理解している真理に従うことによって

自分の靈性を維持していくならば、惑わされることがないことを証致します。

悪霊たちが仕かける錯覚に惑わされることがないように、主が私たちすべての者を祝福したまいますように。また、心を主に向けてことによって靈性を維持し、信仰を強めていくことができますよう、イエス・キリストのみ名によりお祈り致します。アーメン。

## 神の愛は罪の壁を越えて



七十人第一定員会会員  
ロナルド・E・ポールマン

イエスの聖なる力を初めて知った時、ガリラヤの漁師シモン・ペテロはこう呼びました。「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です。」(ルカ5:8) 私たちも、時にはこのペテロのように、自分は罪深い者で、主に近づくのは怖れ多いと思うことがあるかも知れません。罪を犯していると、私たちは天父から遠く離れたように感じ、愛される資格などないと思ひ込み、受け入れていただけないのではないかと恐れるのです。

しかし、罪を犯し、戒めを破ると、私たちに天父の強い力が必要になります。弱点を克服し、悔い改め、天父と元通り交通できるようになるためには、是非とも助けが必要だからです。悔い改めをしないと、その罪はやがて習慣となります。罪を犯しているとたびたび心に責めを感じます。そうすると、ますます悔い改めが難しくなるのです。この主から離れてしまったという気持ちは、悔い改めて主の赦しを受けようとする時、それ自体大きな障害となります。

自分が天父に逆らってしまったと知ると、私たちは天父の助けを受ける資格がないと

感じ、それを求めることを恐れます。一見理に合わないように思えますが、私たちが最も主の力を必要とするのは、最もふさわしくない時なのです。イエスが身を震わせるペテロに「恐れることはない」(ルカ5:10)と言われたように、主は私たちにもそうおっしゃっているのです。

きょう、私はジョンとゲールという若い夫婦の経験をお話したいと思います。この話によって、私の言わんとすることを何よりもよくお伝えすることができると思うからです。

ジョンは、思慮深く親切な若者でした。また、愛情深く、率直で、寛大な心の持ち主でもありました。彼は誠心誠意、主の戒めに従おうと努め、家族生活の喜びの中に偽りのない満足を見いだしていました。一方、妻のゲールは、若く魅力的で、快活な女性でしたが、少々この世的なものに心を動かされ勝ちでした。彼らの住む社会は、裕福で唯物的でした。人々はこの世的な利益や社会的地位を追い求め、娯楽に熱中し、自己満足に浸りきっているかのようでした。宗教の指導者たちは、家族の崩壊や道徳的標準の低下に胸を痛めていました。

結婚して間もなく、ジョンとゲールは一男一女に恵まれましたが、ゲールは家庭内の責任には関心がないかのようでした。彼女は人生の華やかさやスリルに憧れて、たびたび家を空けてはパーティーや娯楽に時を過ごしていました。そのような時、いつも夫は一緒ではありませんでした。ゲールは見えのために男性たちの気を引き、彼らの気持ちにに応じているうちに、とうとう結婚の誓いに背いてしまいました。

この間、ジョンはゲールに、家庭生活の喜びや、神の律法に従うことによって得られる報いを味わうように、一生懸命勧めました。優しく、忍耐強く勧めましたが、全

く効き目がありませんでした。そうして、三番目の子供、次男が生まれると間もなく、ゲールは夫と子供たちを捨てて、この世的な同胞の下へと走り、放縦と不道德の生活へと身を投じてしまったのでした。拒絶され、侮辱され、ジョンは胸がはり裂ける思いでした。

しかし間もなく、ゲールを魅了していた人生の華やかさやスリルは、色あせていきました。友達と思っていた人々も、やがて彼女にあき、彼女を捨てて去って行きました。彼女は墮落の一途をたどり、生活はすさむばかりでした。そしてとうとう彼女は自分の過ちに気づき、何を失ってしまったのかを知りました。しかし、今さらどうしようもありません。ジョンがまだ自分を愛しているとは、とても思えません。彼女は、自分は彼の愛にふさわしくない、家庭や家族の下へ帰る資格はないと感じました。

そんなある日のことです。通りを歩いていた時に、ジョンは、ぱったりゲールに出くわしました。知らぬ振りをしようと思えばできたでしょう。しかし、彼はそうしませんでした。彼女の最近の生活ぶりがまざまざと見てとれるようなその姿を見た時、ジョンの胸には憐れみと手を差し伸べたい気持ちがわき上がりました。ゲールに多額の借金があることを知ったジョンは、それを支払ってやり、彼女を家へ連れて帰りました。



そして間もなく、最初のうちは彼自身にとっても驚きでしたが、ジョンはまだゲールを愛していることに気づきました。自分の彼女に対する愛と、心を入れ替えて再出発したいという彼女の気持ちに気づいた時、ジョンの心には憐れみに満ちた赦しの気持ちが生まれました。そして、ジョンは心から、過去の生活を克服しようとするゲールを助けたい、また、再び彼女を自分の妻として受け入れたいと思いました。

このような経験を通して、ジョンは、子供である私たちへの神の愛がどのようなものであるか、よく理解することができました。私たちが主の助言を無視しても、戒めを破っても、そして主を拒んだとしても、自らの過ちに気づいて、悔い改めたいと願うならば、主の助けを求めるようにと主は望んでおられます。主は、そのような私たちを受け入れて下さるのです。

このような経験をすることによって、ジョンは神のみ業に仕える準備ができました。私は、ジョンとゲールの物語として、以上の話をしてきましたが、この話は、旧約時代の予言者ホセアとその妻ゴメルのお話からとったものです。

ホセアは、古代イスラエルの人々に、愛情深く慈悲深い父として神を描いて見せています。この点では、他の旧約の予言者たちと違い、新約聖書、モルモン経、さらに近代の啓示のメッセージと精神を伝えた人と言えるでしょう。

この末日に、主はこうおっしゃいました。「すなわち、主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。さりながら、悔い改めて主の誠命を行う者は赦されん。」(教義と聖約 1 : 31-32)

神の律法に背き、戒めを破れば、神の怒りを招くので、私たちは自分から神の下を離れ、神の助けや靈感や力を拒んでしまい

ます。しかし、神の愛は罪という壁を越えて、私たちに注がれるのです。

私たちが神の律法に背くと、正義はその代償を要求しますが、私たちには支払うことができません。しかし、天父は私たちを愛しておられるので、ある計画をお立てになり、救い主イエス・キリストを送って下さいました。その贖いの犠牲は正義の要求を満たし、私たちは悔い改めて赦しを受け、再び天父のみもとへ帰れるようになりました。本当に、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さい」いました。そして、「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため」でした。(ヨハネ3:16)

私たちは、イエス・キリストを信じ、悔い改め、水と霊のバプテスマの時に主と結ぶ誓約に従うことによって、この素晴らしい賜を受けることができます。また、バプテスマの後には、毎週聖餐を受ける時に「御子を常に忘れず、またその下したまえる誠命を守る」という誓約を新たにします。そうすると私たちは、「御子の『みたま』」に常に共にいていただくことができるのです。

ホセアの古代のメッセージは、聖典の随所に繰り返され、織り込まれています。旧約の、また別の予言者イザヤを通して、主は民にこう言われました。

「あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをなさい、公平を求め……主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」(イザヤ1:16-18)

主は、ニーファイ人の予言者アルマに、こうおっしゃいました。「いざ、汝ら行きて

何人<sup>なんびと</sup>にてもわれに対して罪を犯す者をその罪に応じて裁判せよ。されど、もしもわれが汝とわれとにその罪を白状し真心より悔い改むるならば汝はこれを赦せ、われもまたこれを赦すべし。まことにわれはわが聖徒らの悔い改むる毎にかれらのわれに対する罪を赦す。」(モーサヤ26:29-30)

私たちは、互いに赦し合うことをせず、なおさら悔い改めを難しくしてしまうことがよくあります。しかし、近代の啓示では、こう教えられています。「汝ら互いに赦し合うべきなり。そは、人その兄弟の過ちを赦さざれば、その人主の前に罪に値する故にして、そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。主なるわれは、その赦さんと欲する者を赦す。されど汝らにはすべての人を赦すことを求めらる。」(教義と聖約64:9-10)

また、近代の啓示には、最も慰めと希望に満ちた言葉があります。

「およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約58:42)

神は、私たちの父であり、私たちを愛しておられます。その愛には限りがなく、無条件にだれの上にも注がれます。また、私たちが戒めに背き、律法を破る時、神は非常に悲しまれます。神は私たちの罪を見過ごしにはなさいませんが、私たちを愛し、もう一度帰って来てくれるようにと望んでおられるのです。

神の私たち一人一人に対する愛に気づくことほど、私たちが悔い改めて天父のみもとへ帰ろうという気持ちにさせるものはありません。どうかひとりでも多くの方々が、その愛に気づくことができますように。ナザレのイエスが神の御子であり、全人類の救い主であり、私たち一人一人の贖い主であることを、聖なるイエス・キリストの名によって証致します。アーメン。

## 福音が教えるもの



十二使徒定員委員会  
リブランド・リチャーズ

**私**はこの偉大な教会、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることを誇りに思っています。時満ちたる神権時代に建てられたキリストの真の教会の名前として、これに勝るものがあるでしょうか。私はこの教会を、教えの素晴らしさのゆえに愛しています。

もう何年も前、戦時中の話です。ジョン・A・ウィッツオー長老はヨーロッパ伝道部を管理するため、イギリスに入学しようとなりました。その時、入国管理官は書類審査をしてウィッツオー長老がどのような人物であるかを確かめると、「あなたの入国を許可するわけにはいきません。これまであなたがたの教会の宣教師の入国については認めてきましたが、その指導的立場にある人となれば話は別です。あちらでかけてお待ち下さい」と言いました。ウィッツオー長老は言われるままにしました。

数分後、先の管理官はウィッツオー長老を呼ぶとう質問しました。「もし入国が認められたとしたら、あなたはイギリス国民にどのような教えを広めるつもりですか。」

そして、「人はどこから来たのか、また、

なぜこの世にいるのか、死んでからどこへ行くのかということについて教えたいと思っています」という返事を聞くと、彼はウィッツオー長老の顔をまじまじと見つめ、「あなたの教会ではそういうことを教えているのですか」と問い返してきました。

ウィッツオー長老は「そうです」と答えました。

すると、この管理官はこう言ったのです。「私の教会ではそんなことは教えてくれませんよ。」

私にとってこの知識はこの世のどんな富よりも貴いものです。人はどこから来たのか、なぜこの世にいるのか、死んでからどこへ行くのか、また、どうしたらそこへ行くのかを知らない人は、舵や帆などの必要な物を何もつけないで海に浮いてる船と変わりありません。波に漂うだけで、港に着くことはできないのです。

この教会は私に、人は永遠の父なる神の子供として、あらゆる面において、神に似た者となる可能性を秘めていることを教えてくれました。私の息子が私に似た者となり、私が父親に似た者となったと同じように、私たちが神に似た者となるということです。

この世の創造に先立ち、主は諸々の霊の中にお立ちになりました。そして高貴で偉大なる者があると言われました。また、そのような人は、この現世に来る前にふさわしいことをしたからこそ高貴で偉大なる者となれたとも言われました。こう言っておられます。「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而して……これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して、最初の位を保つ者は更に附け加

えられ、最初の位を保たざる者は、最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して、第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん。」(アブラハム 3 : 24—26)

私は、自分が霊界において第一の位を保ったことを、教会を通して知らされました。それを主に感謝したいと思います。第一の位を保っていなければ、私はサタンや天の3分の1の霊と共に、この地上に投げ落とされていたのです。聖書には「地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が……おまえたちのところまで下ってきたからである」、また、悪魔が「食いつくすべきものを求めて歩き回っている」(黙示12:12; Iペテロ5:8)と書かれています。私は第一の位を保ったからこそ、午前の部会においても述べられた、この世の美と喜びのすべてを楽しむ権利を与えられたのです。また、私にはこの肉体も与えられましたが、聖典を読まなければ、それがどういう意味を持つことなのか、本当のところは理解できないと思います。

イエスがある人の体から悪霊を追い出した時の話を皆さんは御存じだと思います。イエスが悪霊に名を聞くと、「レギオンと言います」という答が返ってきました。(訳注:「レギオン」とは「たくさん」の意)その人についていたのは多くの霊だったからです。そして、この悪霊たちはとにかく何かの肉体に入りたいと強く望み、野でえさをあさる豚の中に入れてくれるように懇願しました。イエスがそれをお許しになると、悪霊につかれた豚の群れは海へなだれ込み、溺れ死んでしまいました。確か2千匹程だったと思います。(マルコ5:1—17参照)この悪霊たちがどれほどに肉体を得たいと望んでいたかを、また私たちが今第二の位を得ているのは、第一の位を保ったか

らであることを少し考えてみて下さい。

私は聖書の中の、エノクについて語っている部分が好きです。彼はその民と共に天に移された古代の予言者ですが、まだ地上にある間に、自分は神の意にかなった者であるという証を得ていました。(ヘブル11:5参照)私は、主御自身が言われたようにその命じられたすべてのことを果たして、戒めを守るなら、(申命12:32; マタイ28:20参照)自分の行ないが主に受け入れられるものであり、自分は神の意にかなった者であるという証を、聖霊を通して、得ることができると考えています。

きょうもこの壇上から多くのことが宣言されましたが、私は神が与えて下さった数多くの素晴らしい真理に感謝しています。そのひとつに永遠の結婚の原則があります。私は、この世を去った後に愛する妻や子供なしに永遠の時を過ごすなどは、とても考えることができません。神が家族を与えて下さったこと、また結婚と家族の絆とは神が定めたもうたものであるという教義に感謝しています。聖典には、それらは永遠に続くとはつきり述べられています。

私には100人を超す子孫がいますが、一人一人について思いをめぐらし、彼らが成し遂げようとしていること、その高潔な生き方を見る時、自分が彼らすべての父親になるのだという実感など、とても持てるものではありません。自分の子孫を持つということは、神に似た者になるという点で、現世でなし得る他の何ものにも替え難い経験であると思います。私は若い時から、自分の生き方に目標を持っていました。それは子供の模範となるような生活をしたいということでした。子供が私に倣って皆それぞれに第二の位を大切に、とこしえに栄光を頭の上につけ加えられるようになったら、と考えると努力したのです。

福音の原則にはほかにも素晴らしいものが数多くあります。私は最初の伝道の時、感情、感覚、体を持ちたもう神を信じている人にはただの一度も会いませんでした。パウロは「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」(Iコリント15:22)と述べています。キリストが人類のために御自身の命を捨て、世の罪を一身に負われたという教えや、天父が私たちの肉における父親と同じように実在の御方であり、何世紀にもわたる暗闇の後、御子と共に予言者ジョセフ・スミスの前にみ姿を現わされ、この神権時代を開かれたという教えもまた素晴らしいものです。モルモン経によると、主は定められた時が来た時に、この世の人々に真理を伝えるために、ジョセフ・スミスを天にとどめておかれたのです。これらの事柄は偉大な真理です。そしてさらに多くのことが知らされていくことでしょう。

宣教師のために「奇しきみわざ」を著わした時、私は特にイザヤ書の次の聖句を強調しました。「この民は口をもってわたしに近づき、くちびるをもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、それで覚えた人の戒めによるのである。

それゆえ、見よ、わたし〔主〕はこの民に、再び驚くべきわざを行う、それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は減び、さとい人の知識は隠される」(イザヤ29:13-14)イザヤが見た不思議な驚くべきわざは、人間の教えが神の戒めとして教えられる時に行なわれると、この偉大な教会は教えています。

時間が許す限り、私の伝道中の経験から、「彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、それで覚えた人の戒めによるのである」とい

う、イザヤの予言の言わんとするところをよく表わしている出来事を2、3話してみたいと思います。

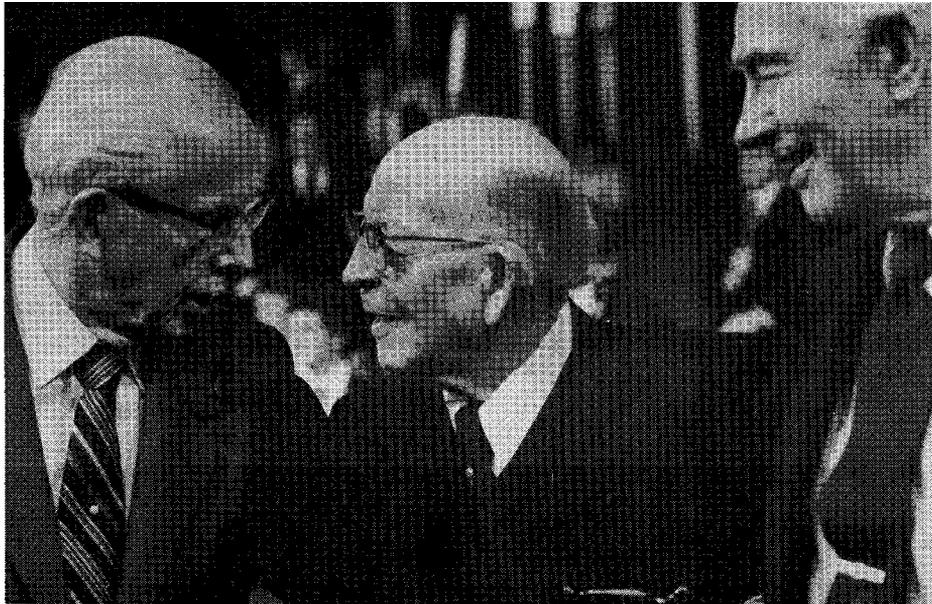
75年以上も前のことです。私は第1回目の伝道の最後の日をアムステルダムで迎えました。その時、ある姉妹の家に招かれ、彼女の近所の人と話して欲しいと頼まれました。同僚と一緒にその家に行くと、その隣人という人が牧師を連れて私たちを待っていました。神権についてその牧師と話しましたが、若干の意見の相違がありました。そこで彼は次の日曜日の夜に彼の教会で話し合いを持とうと言ってきました。

さて、当日私たちが行くと、会場は一杯でした。そこにはその教会に属する会員たちが皆集まっていました。また私たちの教会の人々も全員来ていましたが、彼らがその話し合いのことをどうして知ったのか、いまだにわかりません。私は口外した覚えがなかったからです。

まず牧師が立って話を始めました。「さて、私たちはリチャーズさんをお客さんとしてお迎えしていますが、この討論会の最初の発言権をリチャーズさんに与えたいと思います。その後は順に20分ずつ話していくという進め方にしたいと思います。どうでしょうか、リチャーズさん。」

私は「大変結構です」と答えました。自分の方からは何も要求はしなかったのですが、最初の発言権は何がなんでも自分のものにするつもりでいました。それが向こうから転がり込んで来たのです。そこに神様の意志が働いていたかどうかはわかりませんでした。私はそう信じました。

私は立ち上がりて話を始めました。「先日、私はそこにおられる牧師さんとお話をする機会がありましたが、神権について両者の間に見解の相違がありました。今晚もその問題について論じるつもりで参りましたが、



初めはそれとは別の点から論じていきたい  
と思います。(それは人々に福音を伝える上  
で絶対に欠かすことのできない重要な論点  
であると私は考えていました) 家を建てる  
場合、土台を築かずに、いきなり屋根から  
取りかかるような人はいないと思います。」  
その考えに同意が得られたところで、私は  
さらに言葉を続けました。「まず、イエス・  
キリストの福音の土台を定めたいと思いま  
す。」そしてヘブル書6章からパウロの言葉  
を引用しました。

「わたしたちは、キリストの<sup>初</sup>歩を  
あとにして、完成を<sup>目</sup>ざして進もうではな  
いか。今さら、死んだ行いの悔改めと神へ  
の信仰、

洗いごとについての教と按手、死人の復  
活と永遠のさばき、などの基本の教をくり  
かえし学ぶことをやめようではないか。」  
(ヘブル6：1-2)

信仰と悔い改めの原則は、彼らも信じて  
いると思ったので簡単に説明し、次に、彼  
らが皆納得するまで、罪の赦しを受けるた  
めの水に沈められるバプテスマについて話

しました。

その後は、聖霊の賜を授かるための按手  
礼です。彼らはそれを信じていませんでした。  
私もこの教会以外の教会で、それを教  
えている教会にお目にかかったことは一度  
もありませんでした。彼らも聖霊は風のよ  
うにやって来るものだと考えていたのです。  
私は聖書を引用しました。それは、サマリ  
ヤ人がピリポの伝道によって、神のみ言葉  
を受け入れた時の話です。エルサレムにい  
た使徒たちはそれを聞くと、ペテロとヨハ  
ネを遣わしました。ふたりはサマリヤに着  
くと彼らのために祈りました。そしてふた  
りが彼らの頭の上に手を<sup>あ</sup>せると、サマリヤ  
人たちは聖霊を授けられたのです。魔術師  
シモンは使徒たちが手を<sup>あ</sup>いたために聖霊  
が授けられたのを見て、金をさし出し、「わ  
たしが手をおけばだれにでも聖霊が授けら  
れるように、その力をわたしにも下さい」  
と言いました。

そこで、ペテロが彼に言いました。「おま  
えの金は、おまえもろとも、うせてしまえ。  
神の賜物が、金で得られるなどと思ってい

るのか。」(使徒8:19-20)

それから、聖霊の賜を授けるための按手札について述べた聖句を少し引用してから、私は席に着きました。

さて、今度は牧師がその考えを述べる番になりましたが、彼は私が話したことについては一言も触れずに20分話し続けました。マウンテン・メドローの虐殺から始めて、「モルモンの聖書」、ジョセフ・スミスが自ら多くの過ちを犯したことを認めていることなどを、いんぎんな口調で話し、私にこう問いかけてきました。「リチャーズさん、今私が話した事柄について納得のいく説明をしていただきたい。そうすれば聴衆の皆さんもあなたのおっしゃられたことがよく理解できるはずですよ。」

私は即座に立ち上がって言いました。(後で「どうしてあんなに早く答えが浮かんできたの」と同僚から聞かれた時、私は「君が1週間ずっとお祈りしてくれていたからだと思っていたけど」と答えました)「昔は狡猾な手段をろうして救い主を陥れようとした人がいましたが、今晚ここにおられる方々の中には、そんな策略に訴えるようなことをする人はだれもいないと思っています。ところで、私は討論会というものは片方がひとつの考えを述べたら、相手がそれに対して答えるというやり方で進められるべきものだと考えていましたが、この牧師さんはどうでしょうか。私が申し上げたことに何か答えてくれたのでしょうか。」

聴衆はそれに対して、「答えていない」と口をそろえました。

「まあ、それはそれとして。では牧師さん、あなたにもう20分差し上げます。私が申し上げたことに答えて下されば幸いです。」しかし、私にもわかっていただけませんが、彼は何も言うことができませんでした。

とうとう、聴衆席にいた彼の妻が立ち上

がり、「リチャーズさんが言ってらっしゃることはもっともなことよ。あなたには答える義務があるわ」と言い出す始末です。

それでも彼は口を開きませんでした。私は同僚にコートと帽子を取ってくれるように頼んでからこう言いました。「もう一度だけ機会を差し上げます。私たちの教会はあすの10時から集会がありますが、あなたが自分で決められたルールに従って討論会を続けていくとおっしゃるのなら、それまで喜んでお付き合いするつもりです。それができないというのであれば、私はもちろんそうですが、同僚にも、私たちの教会の会員にも退席してもらいます。今晚のことで、あなたが御自分の教会の人たちとどう話をつけるかは、あなたの責任ですよ。」

このことがあってから後も、彼とは何度も町で会いましたが、彼は私と話すのを恐れるように、いつもうつむいていました。

イザヤが言った「人の戒め」を教えるとはこういうことなのです。

もうひとつお話したいと思います。伝道部長の任にあった時です。ジョージア州のある町で開かれた集会で結婚の誓約と家族の絆の永遠性について話をしました。私はその時、一枚の表を用いました。そこには各種の重要な問題について、いろいろな教会の指導者が述べた、それぞれの教会の公式見解が比較対照されていました。家族の絆や結婚の誓約が永遠に続くと感じている教会はひとつもありませんでした。その集会が終わって、ドアの所に立っていると、ひとりの人が近づいてきて、自分はバプテスト教会の牧師であると自己紹介をしました。私は「きょうの話で何か間違った引用でもしたのでしょうか」と言いました。

「いいえ、リチャーズさん。あなたのおっしゃられた通りですよ。私たちは自分の教会の教義は何ひとつ信じていません。」

「それなら、どうして御自分の教会に戻って真理を教えないのですか。あなたの教会の人も、モルモン長老からは聞こうとしないでしょうが、あなたの話でしたら受け入れるでしょう。」

彼の答えは「またお会いしましょう」というものでした。その晩、彼とはそれ以上話することができませんでした。

4カ月後、私は再びそこに行きましたが、彼は私の訪問を新聞で読んで知っていて、あの小さな教会の外に立っていました。握手を交わしてから、私は「この前ここで私がした説教についてどのように感じられたか、聞かせていただければ幸いです」と言いました。すると、「リチャーズさん、私もそのことをずっと考えてきました。あなたが言われたことはみな信じています。ただ、私はほかの事柄について、あなたのお話を聞きたいと思っていたのです」という返事が返ってきました。残念ですが、この話はここまでです。割り当ての時間がきたら、足をたたいてくれるようにベンソン兄弟にお願いしておいたのです。

もうひとつお話したいと思います。オランダのユトレヒトでのことです。ある教会の聖職者の訓練集会が開かれていました。そこには牧師になるための勉強をしている人たちがいましたが、彼らはよく私たちが集会をしている所に来て、外から話に耳を傾けていました。そして、集会が終わると中に入ってきて、私たちと話し合っていたのでした。

私はその中の若いひとりの人に、罪の赦しを受けるためのバプテスマは水に沈める方法が正しいものであり、その後、聖霊の賜を授けるための接手札が行なわれなければならないという教えの正しさを説きました。彼はそのようなことを教えられたこともなく、信じようとしませんでした。彼は

私に言いました。「リチャーズさん、聖書と完全に一致しないことを、それと知りながら、人に教えたとしたら、主は私たちにその責任を求められるのでしょうか。どう思いますか。」

私は答えました。「その問題についてはパウロに答えてもらった方がよさそうですね。こう書いてありますよ、『たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はろわるべきである。』（ガラテヤ1：8）」それから後、彼は私の所に来なくなりました。

どうやら、時間が過ぎていくようです。皆さんの上に神の祝福があるように。私は主と主の教会を、またすべての末日聖徒を愛しています。神の祝福が皆さんの上にあるように。また私も皆さんに祝福を残したいと思います。主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。



## 神権の教理



十二使徒定員会会員  
ブルース・R・マッコンキー

**神**権者である兄弟の皆さん、私はアロン神権やメルケゼデク神権を持つすべての兄弟たちに次のようにチャレンジしたいと思います。「来たれ、そして神権の教理を学べ。来たれ、そして主の僕としてふさわしく生きよ。」

この教理、すなわちこの神権の教理は、世の中ではもちろんのこと、教会内でさえあまり知られていないもので、聖典を読むだけでは学ぶことのできないものです。また、予言者や使徒たちの説教や教えの中にも、ごくわずかなことを除けば、ほとんど説明されていません。

神権の教理は、個人の啓示によってしか知ることのできないものです。それは、「心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして」神を愛し神に仕える人々に、「規則に規則を加え、誠命にいましめを加え」るように、聖霊の力を通して表わされるものです。(教義と聖約4：2；98：12参照)

私たちには次のような約束が与えられています。「すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれし

むべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。」(教義と聖約121：45)

どのようにしたら、神権の教理を最善の方法で宣べ伝えることができるだろうかということについて、私は熟考と祈りを重ねてきました。

私が7つの雷のような声で話すことができたなら、あるいは一万のラッパによって言葉伝えることができたなら、どんなにいいでしょう、人々は私のメッセージを聞いてくれるに違いありません。私はそう考えました。

しかし、ここで私はアルマのことを思い出します。自ら「出て行って神のラッパのように地を震わせる声で話し、万民に悔改めをすすめること」を切に願ったあのアルマのことです。(アルマ29：1参照)

主はこのような方法ではみ業を行なわれません。主のみ言葉は、主の僕たちが弱いながらも導きと教えを施して働く時に、彼らの口を通して語られるのです。そしてその言葉は、みたまの「静かなる細き声」(教義と聖約85：6)により受け入れる人々の心に浸透します。

みたまの働きによらずに、霊にかかわる真理を理解することができるのでしょうか。無限無窮の神をどうして限りある言葉で表わすことができるのでしょうか。

遠くかすかに聞こえるこだまのような私たちの声が、天上で語られる永遠のみ声のもとで栄光と力とを再現することができるのでしょうか。弱点と欠点をもつ人間に、あの全知全能であられる神のみ姿を心に描くことができるのでしょうか。

しかし、私たちの持つ限界を知りながらも、ここで共に論じてみましょう。そうす

れば、諸々の世界を創造したみ力の驚異を少しなりともかいま見ることができるかもしれません。また、死すべき私たち人間がどうしたらその同じ力を用いて同胞を祝福し、自らを救うことができるのか、わかるかもしれません。

では、神権の教理とは一体何でしょうか。天上で作られ、天より下る露のごとくに忠実な人をうるおすことのできるこの教理とは、一体何なのでしょう。(教義と聖約121:45参照)

神権は地上においても、天上においても、他に類のない力です。それは、神御自身のみ力そのものです。すなわち、諸々の世界を創造した力であり、万物を統制し、支え、保持する力です。

神権は信仰の力です。信仰により天父は創造と統治の業を行なわれます。神が神であられるのは、神がすべての信仰とすべての力とすべての神権を具現した御方であるからです。神がお持ちの命は、永遠の生命と呼ばれるものです。

私たちがどれだけ神のようになれるかは、どれだけ信仰を持ち、神のみ力を得、その神権を行使するかによります。真の意味でまた完全な意味で主のようになった時、私たちがまた永遠の生命を得ることができるでしょう。

信仰と神権は、緊密な関係にあります。信仰とは力であり、力は神権です。私たちが信仰を得てから神権を受けます。そしてその神権を通して信仰を育てていき、やがてすべての力を得て主のようになるのです。

現世における生涯は、試しの期間として定められています。この間に信仰を完きものとし、神権の力を強めることこそ、私たちに与えられた特権です。

私たちは前世においてまず神権を受け、また死すべき人間として再び神権を受けま

す。アダムは神権の鍵を有し、地球の創造に参画した時に神権を行使しました。アダムはバプテスマを受けた後に再び神権を受け、今は、この地球の管理大祭司としての位置にいます。

聖なる神権を行使する責任に召された私たちは皆、キリストに仕えることや、定められた時にこの世に来て主の用向きのために働くことを、前世で予任されていました。

エノクの民は聖なる神権により、他のいかなる時代の人々よりも完き民となりました。この神権は当時「エノクの神権」(教義と聖約76:57)として知られ、彼らが身を変えられたのはその力によるのです。つまり、エノクの民が信仰を持って神権の力を行使したからこそ、身を変えられたのです。

主はこのエノクと永遠の誓約を交わされました。その誓約とは、神権を受けるすべての人々が自らの信仰を通して、地上の万物を統治し制御する力、国々の軍勢にいどむ力、そして栄光と昇栄を受けて主のみに前に立つ力を得るというものです。

メルケゼデクも同じような信仰を持った人で、「その民は正義を行ない、天に上げられ……エノクの市を求めた」(ジョセフ・スミス訳創世14:34)と記されています。それ以来、神権はメルケゼデクの名をとって呼ばれるようになりました。

教会にはふたつの神権があります。すなわちアロン神権またはレビ神権と、メルケゼデク神権です。アロン神権は準備の神権、訓練の神権、あるいは小神権とも言われ、メルケゼデク神権を受ける備えをさせるために神が定められた制度です。

メルケゼデク神権は、この地上で人に与えられる最も高度で神聖な神権です。それは、人の子を救いと昇栄に導くために必要なすべてのことを行なう権威と権能であり、主イエス・キリスト御自身が持つておられ



る神権と同じものです。主が御父の王国で永遠の生命を得ることがおできになったのも、この権能によるのです。

これらふたつの神権は誓約によって与えられます。(教義と聖約84:33—41参照) いずれの神権もこの世のあらゆる力をはるかに凌ぎ、人に救いへの備えをさせます。

アロン神権を受ける人は、召しを全力を尽くして遂行し、主の聖職に携わり、この世的なものを捨て、聖徒としてふさわしい生活をするを誓約し、約束します。

それに対して主は、アロン神権につける誓約を守るすべての人に、その地位と職務を拡大すると誓約し約束されます。また、永遠の生命をもたらすメルケゼデク神権を授けると約束して下さいます。

メルケゼデク神権を受ける人は、召しを全力を尽くして遂行し、「神の口より出るすべての言葉によりて生き(教義と聖約84:44)、族長制度の中でこの世から永遠にわたる結婚をし、主イエスがこの世で導きと教えを施された時のような生活をして奉仕することを、神々と天使たちの前で、誓約

し約束します。

それに対して主は、天父が持つておられるすべてのもの、すなわち永遠の生命を与えると聖約し約束しておられます。この永遠の生命とは、日の光栄の王国において昇栄し神となることであり、そこにおいてのみ家族は永遠に存続できるのです。

さらに主は、永遠の族長制度をもたらして下さいます。これは日の光栄の最高の天界に存在する制度で、そこに入る者に永遠に増し加えられること、言い換えれば復活した状態にあつて霊の子供たちを持つことを保証するものです。(教義と聖約131:1—4参照)

これらは人に与えられた最も栄光ある約束です。これほど驚くべき偉大な約束はほかにありません。だからこそ、主は人類の語り得る最も顕著で力強い言葉を用いて、その重要性和不変性を示しておられるのです。すなわち、主は主のみ名により誓いをなしておられるのです。この誓約ほど偉大なものはありません。つまり、メルケゼデク神権にかかわる聖約を守るすべての人は、

神の永遠の王国においてすべてのものを受け継いで所有し、神の独り子であられる主とともに共同の相続人になると、主は御自身のみ名によって誓っておられるのです。

神はキリストが昇栄されることを聖約されました。そして、私たち一人一人がメルケゼデク神権を受ける時に、もしすべての事柄に正しくかつ忠実であれば、同様の昇栄にあずかることができると、改めて聖約されるのです。

ダビデは、メシヤとしての主イエスについて次のように述べています。「主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、『あなたはメルケゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である。』」（詩篇110：4）

パウロもまたメシヤに関するこの言葉、すなわち神御自身がなされたこの永遠の誓約を引用して、「キリストは……神によって、メルケゼデクに等しい大祭司と、となえられた」（ヘブル5：5—6、10）と述べています。

そして、アブラハムが什分の一を納めたメルケゼデクについてこう記しています。

「なぜなら、メルケゼデクは神の御子の神権の祭司に聖任されていたからである。その神権とは父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終りもないものである。」（ジョセフ・スミス訳ヤコブ7：3）

古代において、アロン神権を行使できたのはレビ人だけでした。この神権は彼らの父母の故に与えられるもので、レビの後裔で資格ある男子にだけ授けられました。しかし、メルケゼデク神権は、いかなる血統に属しようと、それを受ける資格さえあれば、すべての人に授けられました。

パウロは続けてこう記しています。「そして、この〔大〕神権に聖任される人は神の子のようであって、いつまでも祭司なので

ある。」（ジョセフ・スミス訳ヘブル7：3）

キリストは私たちの模範であり、神の御子であり、御父の相続人であられます。しかし、私たちも共同の相続人として、主と同じものを受け継ぐのです。なぜなら、私たちもまた「とこしえに祭司」としてとどまるからです。

このように、私たちは神と誓約を結びます。そして神は、その誓約のもつ重要性和永遠の真価とを示すために、私たち全員に誓いを立てられるのです。

古代において、誓約によって誓いを立てることは、私たちが想像する以上に重大な意義を持っていました。

例えば、ニーファイとその兄弟たちがレーバンから真鍮版を手に入れようとして、危険にさらされた時のことです。ニーファイは誓って言いました。「主が生きていますし私が生きているように確に、私たちは主の命じたもうたことを果すまでは荒野にいる父のところへ帰らない。」（I ニーファイ3：15）

ニーファイは神を自分の共同者とししました。もし彼が真鍮版を手に入れることに失敗すれば、それは神が失敗されることを意味します。しかし神は失敗されることはないので、ニーファイはこの誓いによって、真鍮版を手に入れるか、さもなければ試練の中で命を落とすか、そのいずれかを自らに義務づけたこととなります。

かつて人に与えられた最も厳粛な誓約のひとつが、ジョセフ・スミスとモルモン経について主が語られたみ言葉の中に見られます。「彼〔ジョセフ・スミス〕はその書、正にわが命じたる部分を翻訳したり、而してこの事は汝の主、汝の神生きたもうが如く真実なり。」（教義と聖約17：6）

これはモルモン経に対する神の証です。神が御自身の神性に基づいて、モルモン経

が真実であることを保証されたのです。つまり、モルモン経が真実か、さもなければ神が神たることをやめるかのいずれかなのです。人や神々に知られている言葉で、これほど厳格で力強いものはあり得ません。

同じことがメルケゼデク神権についても言えます。主が生きておられるように、これは主の聖なる神権です。そしてこの神権に属ける誓約を守るならば、人種や皮膚の色を問わず、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる人々が、としえの祭司となって、私たちが主イエス・キリストであると公言するかの偉大なる大祭司と共に、永遠に支配し統治するのです。

それでは、神権の教理とは何でしょうか。私たちは主の僕としていかに生きるべきでしょうか。

この教理とは、父なる神が栄光を受け、完成され、昇栄された御方であって、あらゆる力と権能と支配力とを有し、すべての事柄を御存じで、すべての属性において無限であり、家族という単位で生活しておられるということです。

すなわち、御自身の信仰が完全であり、御自身が有したもう神権が無限であるが故に、私たちの天父が最高の栄光と完全さと力とを享受しておられるということです。

それは、神権こそ神のみ力そのものであり、もし私たちが神のようになるべき存在であるなら、私たちが神の神権すなわち力を受けて、神がそれを行使されたように、行使しなければならぬということです。

それは、神がこの地上にいる私たちに天の力であるエンダウメントを授けられ、そのエンダウメントが神の御子の神権によるものであって、神の力であるが故に「生命の始めなく<sup>無始</sup>の終りなく<sup>無終</sup>」あらゆる時代に必要とされるものであるということです。

それは、私たちが族長制度とも呼ばれる

「新しく且つ永遠の結婚誓約」という「神権の位」(教義と聖約131:2)に入ることができ、その位によって、天父なる神の家族にならって私たち自身の永遠の家族を作ることができるということです。

それは、私たちが信仰により力を得て、霊的にも物質的にもすべてのものを支配し統御し、奇跡を行ない、自らの生活を完きものとし、やがて神の信仰と、神の完全さと、神の権威すなわち神の完き神権を得ることにより、神のみ前に帰って神と似た者になるということです。

これが神権の教理です。これ以上に大いなるものは実在する可能性すらありません。これこそ、信仰と義を通して得ることのできる力なのです。

まさに、神権には力、すべてのことを行なう力があるのです。

この世界そのものが神権の力で創造されたとすれば、その力は山を動かすことも、元素をコントロールすることもできるはず

です。天群の3分の1が神権の力により地上に投げ落とされたとすれば、それと同じ力は国々の軍勢にいどみ、原子爆弾の落下をもとどめることができるはず

です。すべての人が神権の力により、死すべき状態から不死不滅の状態へと高められるとすれば、その力は病人や死にかけている人を癒し、死者を生き返らせることもできるはず

です。そうです、神権には力があります。それは、私たちが用いるために求める力であり、私たちの上に、また私たちの子孫の上に永遠にとどまることを心を込めて願う力なのです。

主イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

# 神権による活発化



管理監督

ビクター・L・ブラウン

**今** 宵この話の責任を、私は祈りの気持ちをもって果たしていきたいと思えます。私に割り当てられたテーマは非常に大切なものであり、必ずしも容易に答えが得られるものでないかもしれません。そのテーマとは、「不活発会員を再活発化するために、アロン神権者とその指導者がとる段階」です。したがって、この話はおもに監督や監督と共に働く人々を対象にして進めたいと思えます。

今宵この場集っている人は皆、アロン神権が何であるかよく御存じであろうと思えますが、記憶を新たにするために申し上げます、「アロン神権」という名前は、モーセの兄アロンから来たものです。モーセは口が重かったので、アロンがその代弁者となりました。ふたりは常に近く交わり、多くの試練を共に経てきました。主はこのアロンの名前をとって、アロン神権と名づけました。

この神権の行使に当たって、歴史上最も大切な出来事は、バプテスマのヨハネがヨルダン川で救い主にバプテスマを施したことです。次に大切な出来事が1829年、5月

15日に起こりました。その時も、同じバプテスマのヨハネがひとりの天使として現われ、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウダリの頭に両手を按いてこう言ったのです。「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきにして捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」(教義と聖約第13章)

私たちがこの天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を有することの意味を完全に理解できるならば、バプテスマの水に入ったすべての若者はアロン神権を受けたいと心から望み、それを受けるにふさわしくなるために全力を尽くしてあらゆることをなそうとするに違いないと思えます。そのように感じている人がある程度いることは確かですが、そのように感じていない人が大勢いることも確かです。

監督はワード部の中に未聖任の少年が何人いて、活動や年齢に応じて神権の職に召されていない者が何人いるか、また集會に出席していない者が何人いるかなどについて正確に知っておく必要があります。この少年たち一人一人も活発な青少年と同じように神の子供です。

指導者として、私たちは活発と不活発の比率に対してどのような考えを持ってばよいでしょうか。皆さんはおそらく、4人の娘を持った父親の話を知ったことがあると思えます。ある晩、娘たちがデートに出かける時、父親は夜中の12時までには家に帰ってくるよう注意しました。最初の娘が11時45分、その次が11時50分に帰ってきました。

3番目の娘が帰ってきたのがちょうど真夜中でした。そこで父親は戸に鍵をかけ、明かりを消して床につきました。妻がまだメアリーが帰ってきませんと言うと、父親は満足そうにこう言いました。「75%が帰ってきている。率としては上出来じゃないか。」

活発で責任感の強い人を愛することはやさしいことですが、不活発で反抗的な人を愛することが時として難しくなることがあります。私たちが青少年の良き指導者となるために、主は私たちに学ぶべきひとつの教訓を与えて下さいました。それは、ルカ15：11—12に記されている放蕩息子<sup>いっとう</sup>の物語です。

御存じのように、父親がその財産をふたりの息子に分けました。ふたりの息子のうち弟は「遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果たし」ました。するとききんが起り、弟は金持ちの豚を飼うようになり、豚の餌<sup>えさ</sup>でもいいから食べたいと思うほどでした。

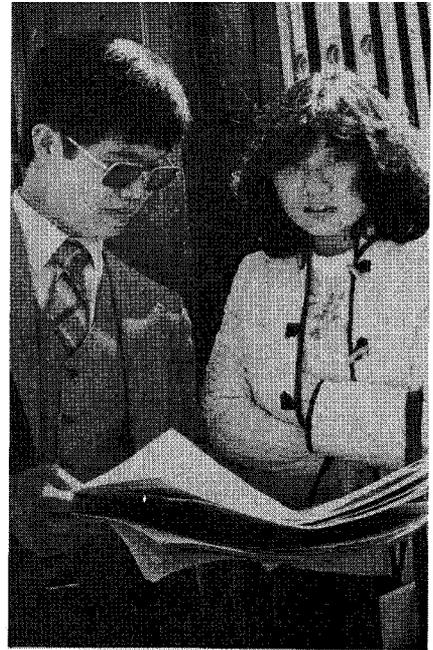
「そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。……』」

そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思っ走り寄り、その首をだいて接吻した。

むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に對しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません。』

しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。』

するとそれまで忠実に信仰を守っていた兄は、父が放蕩の限りを尽くして帰還した



弟を見てことのほか喜んだことを耳にし、怒って自分には何の宴会も開いてくれなかったと不平を並べました。父は言いました。「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである。」

この聖句の中で私が強調したいことは、愛の大切さということです。青少年の教師として成功するためには、その人の行ないがどうであれ、青少年一人一人を心から愛することができなければなりません。心からの愛がなければ、若人の指導者になることはできないのです。

私は、神権の責任を活発に果たしていない人がすべて放蕩息子のような行ないをしているとは決して申しません。私は青少年の皆さんに大きな信頼を寄せています。それでも神権を尊ばない人は、自分たちが選んでいる道は、方向を変えない限り、人類

に与える神の最大の賜である永遠の生命と昇栄を受けることから遠ざかる道であることを認識する必要があります。

では私たち指導者は、このような若人が福音の律法に従い、その結果永遠の祝福を受けるに資格ある者となるために、彼らの生活にどのような良い影響を与えればよいのでしょうか。その方法についてお話ししたいと思います。

まず第一に、青少年の皆さんは自分たちの指導者がだれであるか知る必要があります。監督はワード部におけるアロン神権の長であり、祭司定員会の会長です。アロン神権の長として監督は、神権に聖任されているかどうかに関係なく、12歳から18歳までの若人に対してすべて責任を負います。



もちろん、必要なことをすべて自分ひとりでやるものではありません。助けがなければできないことです。それでも、活動の基調を決めるのは監督です。

賢い監督ならば、その少年にとって父親が最も大切な助け手であることがすぐに理解できると思います。このことは時として問題になることがあります。特に、父親が不活発であったり、教会員でなかったりした時に問題となります。あるいは、家庭に父親がいない場合も問題です。しかし、ほとんどの場合は、その息子に一番大きな影響を及ぼすのは依然として父親です。調査によると、不活発な青少年の大半の父親が不活発であるということです。

父親が少しなりともその息子に対して良い影響を与えたいと考えているならば、監督は長老定員会の会長会およびホームティーチャーを通じて父親が活発になるよう父親に良い影響を与える必要があります。あるいは、少なくともその息子が活発になるよう息子を励ます気持ちを父親に持たせる必要があります。

同時に、この少年に大きな影響を与える管理役員がもうひとりいます。それは少年が属している定員会の会長であり、そして会長と共に働く副会長です。私たちは青少年には同年代の仲間の影響が大きいことを忘れがちです。改めて言うまでもないのですが、定員会会長が最大の影響力を持っているのであるならば、会長は自分の定員会のすべての会員に対する責任をよく認識しておかなければなりません。もし会長がいかげんな方法で召され、しかも成人指導者が会長の職を十分に認識することがなかったならば、会長の考え方もいかげんになり、成功はおぼつきません。監督がその召しを与える責任をだれかほかの人に委任するならば、少年の目にはその召しの重要

性も小さいものとなって映るに違いありません。この召しはアロン神権の会長から来るべきものです。

副監督も非常に大切な責任を負っているわけですが、監督が持っているような会長会の鍵は持っていません。副監督はだれを選ぶか考慮する時には参加しますが、最後の決定を下すのは監督です。定員会会長は、監督会が導きを求めて熱心に祈ったこと、そして自分が主の靈感によって選ばれたことを知っておくべきです。

12歳か13歳の少年が定員会の会長に召され、成人指導者の助けが得られないと、問題を抱えて失敗することがあります。そこでアドバイザーやその他の指導者がよい定員会会長になれるよう助けてあげることが特に大切になってきます。この援助を与えるという大切な役割を担っているアドバイザーは定員会会長の責任を引き受けるのではなく、会長がその職にあって成長できるようそばにいて助けを与えるのです。ある執事定員会会長は次のような経験を話してくれました。おそらくアドバイザーからよい教育を受けていたからでしょう。

ステーキ部アロン神権委員会の会員が数週間続けて定員会集会に出席しました。ある日曜日の朝、彼は今まで一度も見ただけの少年がその場に出席していることに気づきました。驚いたことに、この不活発の少年にお祈りをする責任が与えられたのです。不活発な少年がやっと来た神権会で、お祈りなど頼んで困らせてはならないことはだれもが考えることです。

集会の後で、この高等評議員はアドバイザーに定員会の会長はなぜあのような馬鹿げたことをしたか尋ねました。アドバイザーが、「定員会会長に聞いてみたら」と言うので、尋ねると、定員会会長はこう答えました。「先週3日間かけて、彼にお祈りの仕

方を教えてきたからです。」このような若い人々の中に、同年代の人々でしかできないような特別な働きかけをすることが時々あります。しかし指導方法については、定員会の会長たちに十分教えておくことが大切です。

私たちはこれまでプログラムを縮小し、個人の重要性を強調するために万全の努力を払ってきましたが、まだまだ十分とは言えません。私たちはまずプログラムを作り、すべての少年がそのプログラムに合わせてくれるよう望んできました。そしてプログラムについてこれなければ、それは彼の責任だから仕方がないと考えてきました。しかし私は少年たちをそれぞれ個人的な関心、欲望、才能、そして問題をもった固有の人間として考えていただきたいと思っています。

もしこの提案を受け入れて下さるならば、定員会担当の監督会の面々は定員会会長会やアドバイザーと協力して、若人にとって、世の中への関心がなぜ神権に対する献身や活動よりも大切になってきたかということについて慎重かつ賢明に判断を下すことができるでしょう。そのためには、すべての少年たちが必要としている事柄に注意して耳を傾けなければなりません。そうすれば、指導者は神権の力というものが少年たち個人個人の関心を高めるところにあることがわかるでしょう。定員会会員の再活発化は「広く浅く」行なうべきであるという考えに、私は大きな疑問を持っています。この活発化の方法において、もし成功が得たいならば、少年一人一人に合った方法をとらなければならないのです。

定員会で行なう活動にはすべて明示された目的があり、その目的は福音中心のものでなければなりません。その例として、ここでアロン神権を持つひとりの韓国の青少

年について話をしたいと思います。この青少年の家はかなり裕福でした。ある日、彼の父親は仕事上の友人から電話を受け、何か経済的に困っているようなことでもあるのかと尋ねられました。そして、もし必要なら援助するからと言ってきました。

父親はすべて順調にしているかと答えました。

するとその友人は言いました。「本当かい？」

父親は答えました。「すべてうまくいっているが、なぜそんなことを聞くのかね。」

そこで友人はその父親の息子が街角で新聞を売っているのを見かけたことを伝えました。父親は信じられませんでした。息子には十分な小遣いは与えているし、ひょっとして見間違いではないですかと父親は尋ねました。友人は間違いないと答えました。実際にその子と会って話をしていたからです。

その日の夕方、息子が学校から帰ってくると、父親は息子に、新聞を売っていたかどうか尋ねました。すると、「はい」という返事が返ってきました。父親は言いました。「なぜだ。自分の小遣いだけではたりないのか。」

息子は答えました。「小遣いは十分なんですけど、学校の友達の中に家がとても貧しくて、経済的な援助がなければ学校にも来れなくなってしまう子がいるんだ。」こうして明らかになったことですが、この若いアロン神権者は自分の小遣いを使って新聞を買っていたのです。その新聞を彼とクラスの友達数人で売って、友達が学校に行けるよう助けていたのです。

このことがあった少し前に、この若いアロン神権者は母親に弁当を少し多めにしてくれるように頼んでいました。母親は十代の成長盛りだし、お腹もすくだろうと

思ってそうしました。ところが、父親に告白したことを聞いてみますと、そのお弁当をお腹をすかした友達に分け与えていたのです。

父親は息子の思いやりを心を動かされ、なぜそのようにしたのか尋ねました。少年は答えました。「2, 3週間前によきサマリヤ人について勉強したの。そこで、ほく、ただ勉強するだけでなく、実際によきサマリヤ人になってその本当の意味を知りたいと思ったんだ。」(『人のために』「聖徒の道」1980年2月号, p. 29参照)

青少年がこのような霊的な経験をしますと、人生が変わってきます。神権が、今までになかったような意味を持つてくるからです。そして、そのような少年はおそらくこれからもずっと活発な神権者であり続けるでしょう。このようにして、救い主の教えが少年の生活の一部となった時、それは少年を世の悪から守る盾となるのです。

不活発な少年を活発にする特效薬はありません。必要なのは、成人指導者や定員会会長が定員会会員の助けを得て関心や思いやりを示し、愛し、絶えず導いていくことなのです。そしてこれらの助けはすべて魅力ある、意義あるものであり、実りある経験となるものでなければなりません。ゲームや遊びだけでは人を救うことはできません。ゲームや遊びは友達となるためにはよいかもしれませんが、その友達が福音の真理について証を得ることができなければ、指導者として私たちは失敗していることになります。

願わくは私たちがそれぞれの少年の心の窓を見通す力と、少年たちに手を差し伸べ、その手を取って昇栄と永遠の生命への道を共に歩いていく知恵とを賜われることができるように。イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

## 傷ついた兄弟



十二使徒定員委員会  
ニール・A・マックスウェル

**羊** 飼いイエス・キリストは、羊たちが主の群れから離れ、関心を失い、心傷つき、あるいは背くようになる原因について、繰り返し勧告を与えておられます。世のわずらいや楽しみ、誘惑、迫害、試練、不当な扱い、疎外感、他人の粗探<sup>おとしめ</sup>しなど、その原因は様々です。(マタイ13：21；24：10；ルカ8：13-14参照)

兄弟の皆さん、皆さんの家族以外で、最も皆さんを必要としているのは、群れから離れている人々です。福音を耳にしたことのない人とは違って、これらの人々は幾らかの光を知っており、したがって何がしかの責任を負っています。ですから、事は急を要するのです。

会員の再活発化をはかる活動でよく行なわれるのが、グループ研究や社交活動です。しかし、本来この活動は、一時にひとりずつ、穏やかにかつ威儀を正して進めるべきものです。人数でかかるのではなく、みたまによって行なうのです。テクニックではなく、心からの関心です。新しい手引きを作ることよりも、実際に援助の手を差し伸べる必要があるのであるのです。

うわべだけのごまかしは通用しません。成果を急ぐキャンペーンも成功しないことが多いのです。「怒れる兄弟は、堅固な城のようだ」からです。(欽定訳箴言18：19)ほかの人を引き上げるためには、自分が高い所に立っていなければなりません。しかも恩きせがましい態度をとったり、私たちの関心が靈的なものでなく、出席数の上からのものであるという印象を与えたりしてはならないのです。また、苦心して引き上げたからといって、すぐにその人から関心をそらすわけにもいきません。私たちは、それこそ何度も何度も訪問を重ねて、主が選ばれた人々を捜さなければならないのです。

私たちはまず第1に、それらの人々が教会から離れた原因をできるだけ知ることです。つまりこれは、私たちの関心を相手に合わせてどのように示すかという問題を提起しています。しかしながら、愛の込められた、しかも直接的なチャレンジを持つ力を過小評価してはなりません。たとえそれが報われないものであっても、愛は決して無駄になることはないのです。

第2に、この働きかけには時間がかかり、日常生活が妨げられるという点に留意することです。良きサマリア人のたとえ話が、それを教えています。(ルカ10：29-37参照)靈的に傷ついた人の中には、応急処置だけで済ますことのできない人がいるのです。

第3に、これは神権役員会とワード部コーリレーション評議会で管理する問題ですが、教会から離れている人に働きかける活発化会員を慎重に選ぶことです。よく準備され組織化された愛は、漠然とした関心に勝ります。そうは言っても、この賸<sup>あま</sup>りの業をあまりに制度化してしまうと、不活発会員の友人や隣人たちが活発化の責任から解放されたと感じるようになるので、これは避けなければなりません。いずれにしても再

活発化では、最善のアプローチが成功に至る唯一のアプローチですから、みたまに感じた働きかけが必要なのです。ある兄弟に対していつアプローチするかを決めるにあたっては、断食と祈りが必要になるかもしれません。

第4に、彼らに新たな気持ちで奉仕する機会を与えることです。なぜなら、彼らの働きが本当に必要とされているからです。モーセはモアブを案内人として加える時に、この原則を学びました。(民数10:29—38参照) 忘れないで下さい、無条件の愛を必要とする状況に置かれた人でも、自分の持つ愛や才能を少しでも発揮したいと、その機会を待ち望んでいるのが普通なのです。例をあげてみましょう。長老定員会の会長会は、定期的に報告のできる活発な長老を委員長とし、さらに2、3人の活発な長老を補佐にして、幾つかの委員会を設けます。そして、スポーツ委員会、福祉委員会などそれぞれの委員会に、要請すれば委員として働いてくれそうな兄弟たちの名前をあげます。教会から離れている人にしてみれば、教会に来るように一般的な誘いを受けるよりも、自分の関心が加味された委員会で働くように頼まれるほうが、応じやすいものです。あまり教会に来ていなかったある兄弟は、最初に歓迎委員としての責任を受け、今では監督として働いています。

これは非常に重要なことですが、大平原を横断していた時の聖徒たちには帰属感があり、自分が必要とされているという気持ちが強かったために、教会から離れる人はいませんでした。

第5に、必要な事柄を教えることです。活発化には改宗が必要です。信仰には、福音を理解した上での信じる気持ちが必要です。したがって、定員会のレッスンと福音の基礎クラスのレッスンは質が高く、そこに出

席する人々がみたまを感じるものでなければなりません。彼らに必要なのは、食卓から落ちるパンくずではなく、命のパンなのです。放蕩息子の父親は、帰ってきた息子のために祝宴を用意しました。残り物を温めただけで済ませたりはしなかったのです。

神殿準備セミナーは、格式ばらない本当の学習の場であるべきです。活発な夫婦に割り当てを与えて、教会に来ていない夫婦と一緒にこのセミナーに参加させて下さい。そして、活発でない夫婦が目標を立てて、神殿に参入する備えができるように、愛をもって励ますのです。

調査によりますと、このセミナーへの誘いを受けた人の30パーセントが誘いに応じています。もうひとつ忘れないでいただきたいのですが、これも過去の経験から、適切なアプローチを受けた人は10人中8人までが、神権指導者の訪問を受け入れ、家庭で教えを受けるようになります。兄弟の皆さん、こうした現実があるとすれば、何を恐れる必要があるでしょうか。

こうした喜ばしい統計からおわりのように、大切なことは時機をうかがって手をこまねているのではなく、何かを行なうことなのです。兄弟の皆さん、率直に申し上げますと、成果が得られないというのは何もしようとしていないということです。ある木彫りの名人が、どうしたら木彫りが上手になれるかと尋ねられて、ぶつきらばうにこう答えました。「彫り始めることさ。」兄弟の皆さん、とにかく彫り始めようではありませんか。

第6に、主のみ手がこの業のうちにあるのを忘れないということです。主は教会から離れている人々に、「神の道に聞き入る用意」をする環境を与えて下さいます。(アルマ32:6) 主のみたまは放蕩息子たちを呼び起こし、ある者はそれに気づくのです。

その時には、彼らが「まだ遠く離れて」いても、私たちは走って行って彼らを歓迎しようではありませんか。(ルカ15：20参照)

第7に、予防は常に治療に勝るといふことです。皮肉なことかもしれませんが、予防といっても、それは数分間の愛の込められた会話や思いやりを示すことで足りる場合があるのです。バプテスマを受けたらすぐに神権と教会の責任を与えれば、新しい改宗者の支えとなるだけでなく、忙しさのあまり疲れきっている教会員を助けることにもなります。(教義と聖約81：5参照)

さらに私たちは、主の下で働く羊飼いとて、教会員に過度の献金や活動を求めることのないように慎重に配慮する必要があります。主が求めておられるものは献身であって、疲労や衰弱ではありません。あの重要なモルモン経でさえも、与えられた力と方法以上に翻訳することはできなかったのです。(教義と聖約10：4参照)

さて、兄弟の皆さん、ここでこの大きなチャレンジについて詳しく検討するのはひとまず置いて、不完全な人が集まっている完全な教会の中で、活発な人とそうでない人、双方の会員全体に見られる実情と責任についてお話したいと思います。神権を持って行動する兄弟たちは、以下のことを認識しておかなければなりません。

まず、このまっすぐで狭い道は、途中で標識はあっても、高速道路やエスカレーターのような道ではないということです。実際に、ひざまずいて謙遜に祈らなければ、この道を通れないことが時としてあります。私たちは互いに傷つけ合うのではなく、互いに助け合って道を進むのです。

どんなきっかけであれ、傷ついて道を離れると、その人は己れを低くする人でない限り、報復の道を歩み始めます。意思の疎通を図って仲直りをしようとはしないので

す。兄弟の皆さん、私たちが負うべき十字架と悪感情は、何と重くのしかかってくることでしょうか。

傷つけられて腹を立てた人は、教会が聖徒を整えるためにあることを忘れてしまいます。(エペソ4：12参照) 教会はすでに完成の域に達した人が休息する何もかも整った施設ではないのです。

同様に、ある人々は、私たちが王国において互いに接し、経験を通して学んでいくということを忘れてしています。主は、過ちを犯す私たちではありますが、互いに訓練し合うように求めておられるのです。熟練した外科医ではなく、インターンが治療するのでから、それがどのようなことになるか、よくおわかりだと思います。はからずも、相手を傷つけてしまうことがあるのです。

また、王国にはいろいろな指導法があることも、よく忘れられています。パウロは、弱い兄弟たちをつまずかせないために肉を食べないように配慮しました。それに対してバプテスマのヨハネは、イナゴとハチミツの食事をしましたが、それは一般の人々には、特にエルサレムの上流階級の人人には受け入れられないものだったでしょう。(Iコリント8：13参照)

私たちはいつも「思い違い」をすることのないように気をつけなければなりません。(モルモン経ヤコブ4：14参照) どこに焦点を合わせるかは、私たち自身の責任です。強調すべきことは、ペテロがしばらくの間水の上を歩いたことでしょうか、それともすぐに溺れかけたことでしょうか。たとえ短時間であっても、ペテロのほかにも水の上を歩いた人がいたでしょうか。

不完全な人々が、完全な主によって主のみ業を助ける責任に召されています。ジョセフ・スミスと行動を共にしていた人々は、

彼の不完全なところを目にしましたが、主はすでにそのことを承知していると言われました。そして、予言者ジョセフを通して啓示した事柄が真実であると証されたのです。(教義と聖約67:5, 9 参照)

したがって、私たちが互いの弱点に気づいたとしても、それは驚くに足らないことです。しかし、弱点を見つけて喜んではいけません。欠点を喜ぶのではなく、私たちの小さな歩みに感謝しようではありませんか。間違いを犯した時は、それによって自分の成長を妨げるのではなく、そこから何かを学ぶようにしようではありませんか。

予言者であり聖典の編集者であったモロナイは、多くの能力を持ちながらも非常に謙遜な人でした。私は彼の寛大な言葉を大切にしています。

「私、私の父または私の父の前にこの記録を作った人たちを、不完全なところがあるからと言って批難するな。むしろ神が私たちの不完全な所をあなたたちに知らせ、あなたたちに私たちよりもっと賢い者になる道を学ばせたもう神のめぐみに感謝せよ。」(モルモン9:31)

このような態度であれば、私たちは傷つけられることもないでしょう。

さらに、他の教会員が自分自身を正さなければならぬとしたら、一体どこから始めたらよいのでしょうか。この場合の鍵は、自分の欠点に大きく目を開き、他人の欠点には少し目を閉じるというところにあります。反対の見方をしてはいけません。他人に不完全なところがあるからといって、私たちは自分の欠点を克服する努力から解放されることは決してないのです。

粘土でできた足を捜すこと、(訳注—欠点を捜すこと。ダニエル2 参照)に時間を費やしている人々は、「みいつ堂々と進む神」のおられる天を見ることができないばかり

か、人を高め、形造るという神の栄光を見ることができないのです。(教義と聖約88:47 参照)

このように、王国において互いに譲歩し合う中で、私たちは他人を押ししたり、他人から押されたりします。「罪の誘惑は必ず来る」のです。(マタイ18:7)しかし、そこで我を押し通してしまうと、どんなにささいな原因も、取るに足らないこととは思えなくなります。ミルクについての言い争いから、トーマス・B・マーシュは予言者ジョセフを攻撃するようになりました。

マーシュと同時代のロレンゾ・スノーは、予言者ジョセフに幾つかの小さな欠点を認めながらも、主がジョセフを用いて大切な業を行なわれたことに感謝を述べています。これは、ロレンゾ・スノーに何らかの希望があったからに違いありません。事実、スノー大管長は、「天の窓」から眺めるように人々を愛をもって見守っていたのです。

予言者も私たちと同じように指導を必要としています。しかし、これは多くの助け手を送らなくとも達成できると、主は考えておられます。責任を果たす上で必要な情



報を思慮深く与えて下さるのです。ペテロに対しては、ニワトリの鳴き声によって(ルカ22:54—62参照)、モーセに対しては、シナイ新聞に広告を掲載しなくとも、優しく賢明な義理の父を通して、それぞれのみ旨をお伝えになりました。(出エジプト18:13—16参照)

幸いなことに、福音は贖いを目的としています。福音が強調するのは、大祭司の庭でイエスを否定したペテロでなく、アンナやカヤパヤ評議會を前にして大胆にイエスを証したペテロなのです。(使徒4:5—12参照)

私たちが他の人々を見るにあたって、へりくだった気持ちを持つならば、自分がすべての状況を理解しているわけではないことがわかるでしょう。ペテロとパウロは、時の絶頂における教会の方針について意見の食い違うところもありましたが、記録は使徒という特別な兄弟愛の中でこうした関係を改善していったことについて、何も伝えていません。

その上、真の弟子たちの間では、間違いを犯した人以上にその間違いを悲しむ者はいません。神のみ言葉の著者以上に、彼らの記録の不完全さを知っている者がいるでしょうか。

「すべてこの記録を受け容れ、この記録の中に欠点があるからと言ってこれを咎めない者は、この記録に記してあることよりも偉大なことを知るであろう。」(モルモン8:12)

主の永遠の真理がこの世の中を進んでいく間に、どれほどの代価が必要かを主以上に御存じの方がいるでしょうか。「見よ、われは神なり。而してこの事を語り。これらの誠命はわれより出で、わが僕らの理解せんがため、彼らの言葉ふりにならいてわが僕らの弱きままに与えられたり。」(教義

と聖約1:24)

人々を傷つけてしまう通常の原因のほかにも、次のような特別な状況があります。それは信仰の強い人でさえ、しばしの間迷わされるほどのものです。イエスは法廷に引き出される前に、十二使徒に対して御自身がどのように打たれ、羊が散らされるかをお話しになりました。それを聞いたペテロは決してつまずかないと言い、「みんなの者もまた、同じようなことを言」いました。(マルコ14:26—31参照)

これらの弟子たちを裁く前に、彼らの置かれた状況と苦悩について考えてみて下さい。羊たちにとって不吉な前兆が現われていました。ユダヤ人の有力者たちが近づくとつれて、彼らは恐れをつのらせていました。危険が目の前に迫っていました。そこで救い主は、弟子たちに離れるように説きました。そして兵に身を任せ、裁きを受け、はりつけにされたのです。弟子たちは警告を受けていたにもかかわらず、まだ完全に信じられないでいた状況を目にして、大切なものを奪われた思いと屈辱的な気持ちに苦しみました。しかし、予任されていた通り、これらの忠実な羊飼いたちは時を移さず気力をもり返し、救い主の栄えあるみ業に携わったのです。

ノーヴーでも同じような状況が、しばしの間見られたのではないのでしょうか。

兄弟の皆さん、悪魔とその一味は、羊たちを四散させるために、今日の主の羊飼いに對する不信をつのらせようと、虎視眈々としてその機会をねらっています。

周囲の状況が悪化し、教えが受け入れにくくなった時、イエスは十二使徒に対して「あなたがたも去ろうとするのか」とお尋ねになりました。今日も同じ問いが投げかけられています。そして答えも同じです。

「主よ、わたしたちは、だれのところに行

報を思慮深く与えて下さるのです。ペテロに対しては、ニワトリの鳴き声によって(ルカ22:54—62参照)、モーセに対しては、シナイ新聞に広告を掲載しなくとも、優しく賢明な義理の父を通して、それぞれのみ旨をお伝えになりました。(出エジプト18:13—16参照)

幸いなことに、福音は贖いを目的としています。福音が強調するのは、大祭司の庭でイエスを否定したペテロでなく、アンナやカヤパや評議會を前にして大胆にイエスを証したペテロなのです。(使徒4:5—12参照)

私たちが他の人々を見るにあたって、へりくだった気持ちを持つならば、自分がすべての状況を理解しているわけではないことがわかるでしょう。ペテロとパウロは、時の絶頂における教会の方針について意見の食い違うところもありましたが、記録は使徒という特別な兄弟愛の中でこうした関係を改善していったことについて、何も伝えていません。

その上、真の弟子たちの間では、間違いを犯した人以上にその間違いを悲しむ者はいません。神のみ言葉の著者以上に、彼らの記録の不完全さを知っている者がいるでしょうか。

「すべてこの記録を受け容れ、この記録の中に欠点があるからと言ってこれを咎めない者は、この記録に記してあることよりも偉大なことを知るであろう。」(モルモン8:12)

主の永遠の真理がこの世の中を進んでいく間に、どれほどの代価が必要かを主以上に御存じの方がいるでしょうか。「見よ、われは神なり。而してこの事を語り。これらの誠命はわれより出で、わが僕らの理解せんがため、彼らの言葉ぶりにならいてわが僕らの弱きままに与えられたり。」(教義

と聖約1:24)

人々を傷つけてしまう通常の原因のほかにも、次のような特別な状況があります。それは信仰の強い人でさえ、しばしの間迷わされるほどのものです。イエスは法廷に引き出される前に、十二使徒に対して御自身がどのように打たれ、羊が散らされるかをお話しになりました。それを聞いたペテロは決してつまづかないと言い、「みんなの者もまた、同じようなことを言」いました。(マルコ14:26—31参照)

これらの弟子たちを裁く前に、彼らの置かれた状況と苦悩について考えてみて下さい。羊たちにとって不吉な前兆が現われていました。ユダヤ人の有力者たちが近づくとつれて、彼らは恐れをつのらせていました。危険が目の前に迫っていました。そこで救い主は、弟子たちに離れるように説きました。そして兵に身を任せ、裁きを受け、はりつけにされたのです。弟子たちは警告を受けていたにもかかわらず、まだ完全に信じられないでいた状況を目にして、大切なものを奪われた思いと屈辱的な気持ちに苦しみました。しかし、予任されていた通り、これらの忠実な羊飼いたちは時を移さず気力をもり返し、救い主の栄えあるみ業に携わったのです。

ノーヴーでも同じような状況が、しばしの間見られたのではないのでしょうか。

兄弟の皆さん、悪魔とその一味は、羊たちを四散させるために、今日の主の羊飼いに對する不信をつのらせようと、虎視眈々としてその機会をねらっています。

周囲の状況が悪化し、教えが受け入れにくくなった時、イエスは十二使徒に対して「あなたがたも去ろうとするのか」とお尋ねになりました。今日も同じ問いが投げかけられています。そして答えも同じです。

「主よ、わたしたちは、だれのところに行



きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」(ヨハネ6：68—69)

終わりにあたり、心を傷つけられて教会から離れてしまった方々に申し上げたいと思います。過去にこだわって、将来を台無しにしないで下さい。自尊心にこだわりすぎないで下さい。そこからは何の報いも生まれません。

イエスのたとえ話の中で、迷い出たのは群れ、すなわち教会やその指導者ではなく、個人であったことを思い起こして下さい。

(マタイ18：12—14参照)

同じように、すべての方々に申し上げたいと思います。イエスの次の勧告について今一度考えて下さい。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。」(マタイ18：15) 我を通すことと、兄弟を得ることを比べることはできないのです。

互いに傷つけあうことがないように、特別な配慮をしようではありませんか。

これらの友人に愛と親切を示し、赦しの気持ちを持ち、援助の手を差し伸べることによって、ペテロとパウロが述べたように、「愛に根ざし愛を基として生活」し、自らを確立して「不動のもの」としようではありませんか。(エペソ3：17；Iペテロ5：10参照) 時は残り少ないのです。

悔い改めて戻ってきたW・W・フェルプスに対する予言者ジョセフの度量の大きい、赦しの言葉を味わって下さい。

「愛する兄弟、戦いは終わったのです。初めに友であった者は、ついには再び友となるのですから。」

兄弟の皆さん、これが私の勧告であり、祈りです。これらのことを、「わたしにつまづかない者は、さいわいである」(ルカ7：23)と語られた御方、すなわちその贖いと愛により門口に立って両手を広げて待っていて下さる御方、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

## 什分の一の律法に従う



副管長  
ゴードン・B・ヒンクレー

**素** 晴らしい讚美歌でした。ただ最後の節を歌えなかったのが心残りです。

働け つくして はげめ 祈れ  
価値ある仕事の 車を押せよ  
押せ肩の力もて うたいて義務を果たせ  
人 みなたゆまず 車を押せよ  
(讚美歌172番)

皆さんも持てるすべての力を尽くして、神の王国の前進のために働いて下さい。その働きについて、幾つかの面から話してみたいと思います。今晚ここに集っている若人の皆さんと同じように、私も子供の頃総大会に出席しました。ヒーバー・J・グラント大管長が確信に満ちた話し方で、神聖な什分の一の律法について、また、什分の一や捧げ物を正直に納める人に与えられた素晴らしい約束について証するのを何度か聞いたことがあります。それらの話には私は深く心を打たれました。

その約束を与えられたのが天の神であること、また神は御自身がなされた約束を必ず守られることを知らされました。そして実際に神がそうされることを知るようになりました。

両親に対する私の感謝の念はいつまでも変わることがありません。私の両親は、私が物心つく頃から、什分の一を納めることを教えてくれました。当時私たちが所属していたワード部の集会場には、監督室というものがなく、什分の一の年末面接は監督の家でしていました。まだ幼なかつた頃、ジョン・C・ダンカン監督の家に年末の面接を受けに歩いて行きましたが、その時のどきどきした気持ちは今でもよく覚えています。その頃はあまりゆとりのない時代で、小遣いもそんなに多くなく、什分の一の額は高々25セントくらいだったと思います。しかしその額は、日曜学校でいつも繰り返させられた暗唱文に倣って、子供ながらに正直に計算したものでした。

「什分の一って何のこと？ それならばくが教えてあげる。

1ドルだったら10セント、10セントだったら1セント。」

私たちは什分の一を納めることを、犠牲と考えたことは一度もありませんでした。むしろ、それは義務であり、幼いながらも自分は主が定められた義務を忠実に果たし、教会に与えられた偉大なみ業の進展に寄与しているのだという気持ちを持っていました。

什分の一を納めることによって、祝福を得てきたことは証できますが、その見返りとして物質的な祝福を求めたことはありませんでした。主は天の窓を開き、驚くほどたくさん恵みを注いで下さいました。主はこの戒めに忠実に歩むすべての人に祝福を与えて下さいます。そのことを思う時、私の心は喜びで一杯になります。

誤解しないでいただきたいのですが、私はここで、正直に什分の一を納めたら立派な家や車が買えるとか、ハワイに別荘地が持てるとか申し上げているのではありません

ん。主は私たちの物欲ではなく、必要としていることに応じて天の窓を開けて下さるのです。金持ちになるために什分の一を納めているというのであれば、動機からして間違っています。什分の一の基本的な目的は、主のみ業を推し進めるために必要な財力を教会に捧げるといふ点にあります。この戒めに従う人に与えられる祝福はあくまでも付随的なものであり、目に見える物質的な形で与えられるとは限りません。天の窓が開かれることについてマラキはこう言っています。

「わたしは食い減ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、減ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしよう……。

こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる。」(マラキ 3 : 11-12)

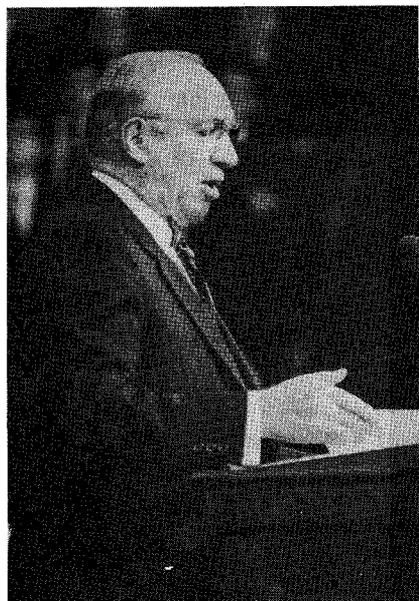
主はこの世の富に勝る祝福を様々な形で与えて下さいます。健康という素晴らしい

祝福もそのひとつです。主は私たちのために食い減ぼす者をおさえると約束して下さいました。この約束は、私たちが努力している事柄や心を寄せている事柄の上に、様々な形をとって実現されているのではないのでしょうか。

また、知恵と知識の祝福、まさしく隠された知識の宝という素晴らしい祝福もあります。もし、この律法に従順に歩むなら、私たちの地は「楽しい地」になると約束されています。「地」という言葉は「民」と置き換えることもできます。従順な人はその心に喜びを得ることができるのです。他の人々から、祝福された民と唱えられるようになることがあります。そうになったとしたら何と素晴らしいことではないのでしょうか。

経済的に苦しい状態にあって什分の一を納める余裕がないという話を、最近よく耳にします。何年も前、ステーキ部長をしていた時のことですが、ある兄弟が私のところに、神殿推薦状にサインをもらいたいと言ってやって来ました。私はいつもするようにその資格について幾つか質問をしました。その中に、什分の一を正直に納めているかどうかということがありました。彼はそれに答え、借金がたくさんあって、什分の一を納める余裕がないと、ありのままを言いました。私はその時、什分の一を納めるようになるまでは、借金を返すことはできないと言うべきだと強く感じました。

それから1、2年の間、彼の什分の一に対する態度は前と何ら変わることがありませんでしたが、ある時、彼はついに決心しました。彼は後に、そのことについてこう語ってくれました。「あなたが言われたことは本当でした。私は借金が多くてとても什分の一など、と考えていました。でも、どんなに頑張っても返済は無理だということに気がついたのです。それで私は妻と話し



合い、主が約束して下さったことを試してみることにしたのです。私たちは実行しました。そうすると、主は私たちには考えもつかないような方法で祝福を下さいました。什分の一を納めたことは、あだになりませんでした。何年かぶりで借金が減ってきたのです。予算を立てて出費を抑えたり、お金の使い道がどうなっているかを確認したりする知恵を身に付けました。大きな目標達成のために、欲望を抑えることもできるようになりました。一番うれいしいのは、その素晴らしい祝福に値する者として、何のやましきも感じずに主の宮居に行けるようになったことです。」

私はすべての末日聖徒に心から申し上げます。主に対して正直に、什分の一や捧げ物を納めるようにして下さい。また、今晚ここに集っておられる若い兄弟たちには、若い内からこの習慣を身に付けるように、そして一生それを守り続ける決心をするようにお願いします。また、教会の指導者の皆さんには、教会員が自分自身のためにさらに忠実な態度で什分の一や捧げ物を納めるように勧めていただきたいと思います。

教会には大きな責任が与えられています。什分の一は、主が定められた数々のプログラムを推進するための財源となるものです。どのような場合でも、必要がことごとく満たされることはありません。神は、私たちがこの偉大な原則に従えるように助けを与えて下さいます。この素晴らしい約束を伴う律法は神御自身が定められたものなので

す。この財政的な事柄に関して、もうひとつのことをお話ししたいと思います。つい最近私のところに2通の手紙が届きました。中身は、教会では経済的に成功した人でないと、責任ある役職を与えられないという不平でした。つまり、監督やステーク部長に

なるにはお金のもうけ方や使い方が上手でなければならず、財産がない人や、目立たない職業の人は召されることがないというのです。

しかし、残念ながらそれは事実を正しく捕らえているとは申せません。

私はこの四半世紀の間に、数多くのステーク部の設立に立ち会ってきましたが、その経験から言えることは、経済的な力というものはステーク部長選出の基準としては取るに足らないということです。私はあるステーク部長の小さな家に泊めていただいたことがあります。私の知る限りでは、彼ほど人々から愛されている有能なステーク部長はそういません。彼の職業は大工で、腕一本で生活を支えていました。そのステーク部には裕福な人々がたくさんいましたが、彼らは皆、大工さんのステーク部長を指導者として愛し、尊敬していました。

数週間前にまた別のステーク部長に会いました。彼も大工仕事で生計を立てている人で、やはり霊的な指導者としてステーク部の会員の愛と尊敬を受けています。

ステーク部長がそのステーク部の霊的な<sup>いかに</sup>錨でなければならないことはもちろんですが、ステーク部内の複雑な事柄を処理していく力も求められます。そうすると管理手腕、少なくとも積極的に物事を学んでいく姿勢がどうしても必要になります。時にはイスラエルの判士として、知恵と識別力を用いなければならない場合もあります。しかし、教会の責任を受けるに当たって、富や経済的な面での成功を問われることはありません。私はここで全教会幹部に代わって申し上げたいと思います。シオンのステーク部を管理する人の選出は、度重なる祈りをもって熱心に主のみこころをうかがい、そのみこころが確認できた時にしか実行に移されません。

それはサウルの後継者を捜すために遣わされたサムエルの場合と同じです。

サムエルは、エッサイの一番上の息子が自分の前を通り過ぎた時、彼の顔かたちを心動かされました。しかし主は言われませんでした。「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上 16: 7)

これと同じことが、ステーキ部長が監督として働く人を召す場合を初め、教会の他の責任についても言えると確信しています。もし選ばれた人が裕福な人であったとしても、正直な働きによって得た富である以上、それはそれでとやかく言うべきことではありません。そういう人はより多くの時間と財力を主のみ業に注ぐことができるでしょう。またその人の優れた管理能力が主のみ業に利することもあると思います。しかし、財力が理由で選ばれるということはありません。神の王国の中で働く者に問われる最も大切なことは、正しい生活をしているかどうかという点です。

「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、權威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」(「信仰箇条」第5条)  
主のみ業にあつて、この原則は変わることがありません。

さて、話を別の事柄に移したいと思えます。私の両親は子供たちのために、家庭の中に良い書物を備えていてくれましたが、年をとるにつれ、そのことへの感謝の念を深くしています。千冊を越す蔵書がありました。当時はテレビはもちろん、ラジオでさえもなかなか手に入るものではありませんでした。かと言って、決して子供の頃から父の本を読みあさっていたと言うつもり

はありません。ただ、よい読書環境ができていたのです。私たちは両親が読書する姿を見ていましたし、両親から本を読んでもらいました。それで、だれに言われたからというのではなく、良書に親しむようになりました。良い本を読んでいる時は心が休まりました。私たちにとって、本は他人ではありませんでした。こちらがちょっとでも努力をすれば、喜んでそれに報いてくれる友達のような存在でした。

そういった本のほかに、教会の機関誌もありました。両親はそれを自分たちで読むだけでなく、子供たちにも読んでくれました。

また「デゼルト・ニュース」もありました。「チャーチ・ニュース」が発刊される大分前のことです。私たちはこの新聞にとっても親しみを覚えました。

高校生や大学生の頃を振り返ってみて驚かされるのは、当時は今日のいわゆるポルノグラフィーといったわいせつな物がほとんどなかったことです。たぶん私たちは、悪の攻撃の及ばない社会にいたのだと思いますが、そのような中で成長できたのは、本当に素晴らしいことです。

遺憾なことです。私たちは今、性の氾濫した時代に生きています。映画、本、雑誌、新聞広告、テレビと、至るところからその波が押し寄せています。

これらを完全に締め出す方法はありません。しかし、何らかの手段を講じてその悪しき影響力に対抗することはできます。子供たちに良書を与えて下さい。子供を教会の機関誌を初めとする良書の中で育てようではありませんか。

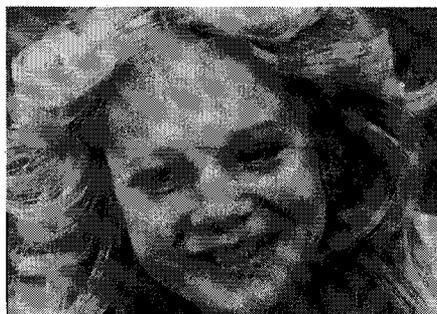
私は何年も前、最も感銘を受けた本は何かと聞かれた時にエマソンの言葉を読んだことがあります。エマソンはその質問に答えて、どんな食事をしたか一々覚えていな

いように、どんな本を読んだかは覚えていない。ただそれらの本が今の自分を作ったことは確かだと言っていました。私たちは良い影響力を持つものを子供たちに与え、それによって、良い結果を得ることもできるのです。皆さんがそのように努力なさるよう祈るものです。

最後に、今ここに集っておられる若人の方々に、2、3申し上げたいと思います。きょうの午後の部会で、リグランド・リチャーズ長老の話が聞かれた方はどのくらいいるでしょうか。リー大管長はある時、リチャーズ長老を指して、彼こそ奇しみ業の人であると言ったことがあります。リチャーズ長老はすでに96歳、足こそちょっと弱っていますが、頭脳は明晰そのものです。彼はメモも原稿も何も用意せずに私たちの前に立ち、聖典をひもときながら、自分の体験をいろいろと聞かせてくれました。彼の伝道中の経験談に私たちは思わず笑わされてしまいました。私たちはリチャーズ長老の話聞いて、一人一人がもっと雄々しく主のみ言葉を宣言できるように祈り求めなければならないという気持ちを覚えました。

昨日は、独身男性宣教師の任期を24カ月から18カ月に短縮するという発表がありました。つまり、現在宣教師として働いている独身男性たちが伝道に捧げている時間が25パーセント減るということです。しかし、それをそのまましておくわけにはいきません。その25パーセントを補う方法はふたつしかありません。第一は一人一人がもっとよく準備をして伝道に出ることです。そうすれば今よりもはるかに効果的な伝道が行なわれるでしょう。もうひとつは、皆さんの中からもっと多くの人々が伝道に出ることです。

私はリチャーズ長老の話聞きながら、あの燃えるような情熱、聖典への理解の深



さ、説得力のある話し方は、伝道生活を通して得た甘い実なのだと思います。若人の皆さんに申し上げます。伝道に出る備えをして下さい。そのための貯金をして下さい。必要になった時のために、しっかりと蓄えておいて下さい。

機会があれば外国語を勉強して下さい。その言葉が話されている国に遣わされるとは限りませんが、外国語の勉強によって外国語、それにこれから習得するように求められるかも知れない言語への理解を深めていくことができるでしょう。

機会を見つけて聖典の学習に励んで下さい。セミナーやインスティテュートを受講するように頑張ってください。

皆さんは持てる力を最大限に発揮して主のみ業を推し進めなければなりません。そして今がその備えの時なのです。世の人々に対する主の代理人となるにふさわしく、身を清く保ってください。アルコール、タバコ、麻薬、一切の不道徳な行為から身を守ってください。

神権者の皆さんの上に神の祝福があって、主とその神性かつ偉大なみ業に対する信仰、証、愛をさらに強いものとされるように。皆さん同様、私もこのみ業が真実であることを知っています。皆さんと共にそれを証したいと思います。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

# 神 権



第二副管長  
マリオン・G・ロムニー

**皆**さん、私はしばらくの間神権について考えてみましたが、結論として理解したのは、神権とは力であるということです。今宵の話の中から、神権の義務を全力を尽くして遂行することの大切さを思い起こしていただければ幸いです。(教義と聖約 84：33参照)

神権を授けられている私たちは、この世の中で最も大きな榮譽にあずかっています。私たちは祈りと研究によって、また神権の義務を忠実に遂行することを通して、神権についてなし得るすべてのことを熱心に学ぶ必要があります。それでもなお、この死すべき世では神権のすべてを理解することはできないのです。しかし、神権が力、すなわち神の力であることは理解できます。父なる神はこの神権の力によって、すべての被造物をこの世に生じさせ、統治しておられます。ブリガム・ヤング大管長はこう語っています。「神の御子の神権は、諸々の世界を過去、現在、そして永遠にわたって存続せしめる律法である。神権は諸々の世界を創造し、そこに人を住まわせ、その回

転により、日と週と年と季節とを与える制度である。また、神権によって諸々の世界は巻物のように巻かれ、より高い状態へ到達するのである。」(Discourses of Brigham Young 「ブリガム・ヤング説教集」 p.130)

イエスは私たちに、神権の力がどのようなものかを何度となく示して下さいました。記録として伝えられている最初の奇跡は、水をぶどう酒に変えたものです。

マタイは、イエスが舟の中で眠っている間に、激しい暴風が起り、舟が波にのまれそうになった時の様子を次のように書いています。「そこで弟子たちはみそばに寄ってきてイエスを起こし、『主よ、お助けください、私たちは死にそうです』と言った。

するとイエスは……起きあがって、風と海とおしかりになると、大なぎになった。

彼らは驚いて言った、『このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは。』(マタイ 8：25-27)

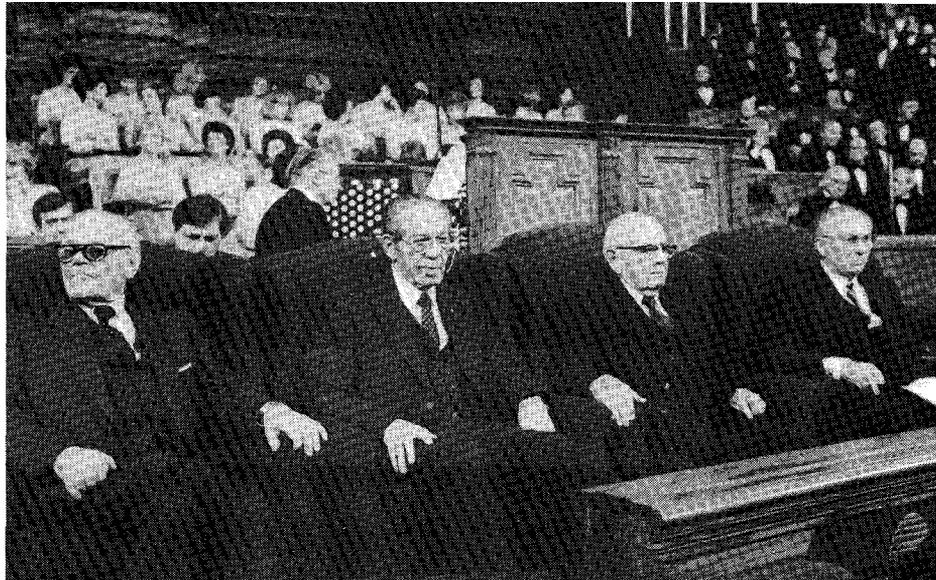
またある時には、「パン五つと魚二ひき」だけで大勢の人々の腹を満たされました。

「みんなの者は食べて満腹した。パンくずの残りを集めると、十二のかごにいっぱいになった。

食べた者は、女と子供とを除いて、およそ五千人であった。」(マタイ 14：17, 20-21)

イエスは神権の力によって目じりの目を開き、耳しいの耳を聞こえるようにし、足なえの足を強くし、あらゆる病を癒しました。またナインのやもめの息子を死の眠りから目覚めさせましたが、御自身も神権の力によって復活なされたのです。

御父と御子は御自身のみこころと権能により、直接神権の力を行使されます。ラザ



口を墓から呼ばれた時、イエスはただ大声で、「ラザロよ、出てきなさい」と言われただけです。(ヨハネ11:43-44)

しかし私たち死すべき人間は、イエスのように自己本然の権能として神権を行使することはありません。私たちの神権は委任されたものです。主が定められた範囲と条件の中で、主のみ名によってするのでなければ、神権を行使することはできません。

しかし全力を尽くして自分の召しを遂行するなら、私たちは主がなされた多くの業をすることができます。

主は最後の晩餐を終えてゲツセマネの園へ向かう前に、最後の偉大な説教をなさいましたが、その中で使徒たちにこう言っておられます。

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。」(ヨハネ14:11)

そうです、私が聖典の中から学んで理解したように、神権とは力なのです。それは神が天地創造の時に用いられた力であり、

モーセの時代、人々にマナを与えた力なのです。また、もし信仰を持ち、神の靈感に従おうという気持ちがあるなら、私たちは自分に託された権利によって、神権を行使することができるのです。そのことについては先程マッコンキー兄弟が素晴らしいお話をして下さいました。

それは私たちが教会の召しを果たす中で、行使することのできる力です。しかしそのためには、謙遜になり、学び、聖なる神権にふさわしい生活をし、自分に与えられた責任を主の導きの下に遂行しなければなりません。

神権者の皆さんが福音に従順な生活をし、神権の召しを全力を尽くして遂行するように祈るものです。そうするなら私たちは、この力を教会のみ業の前進のために、また永遠の生命を目指して自分の生活をさらに完全なものとするために用いることができるでしょう。私の証を皆さんに伝え、へりくだり、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。

# 教会役員の支持

副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

**前** 回の総大会から教会幹部の異動がありませんので、教会幹部ならびに中央管理役員を現状のまま支持して下さるよう提議致します。

この提議を支持して下さる方は挙手をもってその意を表わして下さい。

もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。



# イエスの証をなすに 雄々しくあれ



十二使徒定員会会長  
エズラ・タフト・ベンソン

**愛**する兄弟姉妹の皆さん、私はきょうあふれるばかりの感謝の念を持って、皆さんの前に立っています。皆さんの信仰、祈り、また今こうして生を受けていること、そしてすべての恵みに感謝しています。復活祭の時期に当たり、私はきょう、人類の救い主、また贖い主であられるイエス・キリストを雄々しく証するとはどういうことかについて、少し話したいと思います。

この教会の会員に開かれている最も貴い祝福は、イエス・キリストが神の御子であり、この教会が神の教会であるという証です。証は私たちがこの世を去る時に携えて行くことのできる数少ない祝福のひとつです。

イエスに対する証を持つということは、聖霊を通してイエス・キリストの神聖な使命について知ることです。

イエスへの証とは、キリストはまことに、御父が肉において生みたもうた独り子であるということ、つまり主が神の御子であることを知ることです。

イエスへの証とは、イエスが約束のメシ

ヤであり、地上におられた間に数多くの偉大な奇跡を行なわれたことを知ることです。

またそれは、主が御自身の教義として定められた律法が真実であることを知り、その律法と儀式を受け入れて生活することです。

主がゲツセマネの園において、全人類の罪を一身に引き受け、肉と霊ふたつながらを苦しめ、すべての毛孔から血を湧かせたことを知るのもそうです。主はそうすることによって、悔い改める人が苦しみを受けてもすむようにして下さいました。(教義と聖約19:16, 18参照)

主は復活し、死を滅ぼされましたが、これを知るのも証です。主がよみがえられたことによって、すべての人類が死から解放されたのです。

父なる神とイエス・キリストが、新たな福音の神権時代の幕を開け、再臨の前に全人類に救いのおとずれを宣べ伝えさせるために、予言者ジョセフ・スミスにみ姿を現わされたのを知ることもそうです。

主が時の絶頂に建てられた教会と、現代の回復された教会が、主御自身の言葉にあるように、「全地の面に於ける唯一の真にして生命」ある教会であることを知るのも証です。(教義と聖約1:30)

証を持っている人は、主の僕である予言者の言葉を受け入れます。主はこう言っておられます。「わが声にて言われるも、僕らの声にて言われるもみな一つなり。」(教義と聖約1:38)

つまりイエスに対する証とは、主の神聖な使命を受け入れて、福音のすべてを信じ、主のみ業を行ない、ジョセフ・スミスとその後継者たちを予言者として受け入れることです。

最後に日の光栄の王国の祝福を授けられる人々について、主はジョセフ・スミスにこう言われました。「これらの者は、イエスの証詞を受け入れ、その御名を信じ、その葬られたまいし様に従い御名によりて水中に沈められてバプテスマを受けし人々なり。こは、主の与えたまいし誠命によるもの」なり。(教義と聖約76:51)

これらの人々は雄々しくイエスを証する人であり、主御自身の宣言にあるように、「信仰によりて打ち勝ち、御父が正しく且つ真実なる者に皆注ぎたもう約束の聖き『みたま』によりて結び固め」られる人々です。(教義と聖約76:53)

「正しく且つ真実なる者」、雄々しくイエスを証する人を表現する言葉として、これ以上に適切なものがほかにあるでしょうか。そのような人々は真理と義を雄々しく擁護します。教会で自分の召しを全力を尽くして遂行し、(教義と聖約84:33) 什分の一と捧げ物を納め、道徳的に清い生活をし、言葉と行ないの両方で指導者を支持し、安息日を清く保ち、神のすべての戒めに従う会員こそがそう呼ばれるにふさわしい人なのです。

そのような人々に与えられている主の約束はこうです。「あらゆる王権と統治の権、公権とその他の支配権踏されて、イエス・キリストの福音のために勇敢に耐え忍びたる者皆の上に飾られん。」(教義と聖約121:29)

月の栄の王国やそれより下位の王国に行く人々については、「これらの者はイエスの証詞をなすに雄々しからず、この故に彼らはわれらの神の王国の冠を得ざるなり」(教義と聖約76:79)と書かれています。

雄々しく証をしない人々には永遠の悲し

みという結果が待ち受けています。そのような人はこの末日のみ業が真実であることを知っていても、最後まで耐え忍ぶことはできません。神殿推薦状を持っていながら、教会の責任を全力を尽くして果たそうとしない人もいます。勇気がないために、神の王国を擁護して固く立つことがないのです。人の誉れ、阿諛追従、賞賛を求める人もいれば、自分の罪を覆い隠そうとする人もいます。中には自分たちを管理する人を批判する人さえいます。

教会が現在抱え、また将来も続くであろうと思われる様々な問題について考える時、今は亡き3人の指導者の言葉が思い出されます。

ジョセフ・F・スミス大管長はこう述べています。「教会内を脅かす危険で、管理役員が絶えず民に警告を発しなければならないものが、少なくとも3つある。その3つとは、著名人へのへつらい、誤った教育概念、それに性的不道徳である。」(「福音の教義」p.302) この3つの脅威はスミス大管長の時代と比べて、さらに増大しています。

次にあげるのは、プリガム・ヤング大管長の副管長を務めたヒーバー・C・キンボールがソルトレーク盆地へやって来た聖徒たちに語った言葉です。

「将来の困難な状況に対処するために、私たちはまず、この業が真実であることを自らの力で知らなければならない。難しい問題と言うのは、この知識を身に付けていない男女は、試練にあうと必ず屈してしまうということである。もしもまだこの証を得ていなければ、正しい生活をして主により頼むことを証が得られるまで続けなさい。そうしなければ、あなた方は耐えることができなくなるであろう。

いかなる男も女も借りものの光では耐えられないときが来る。一人一人が自らの内にある光によって導かれなくてはならなくなるであろう。……

自らの内に光を持っていない者は耐えることができない。だからイエスに対する証を求め、その証にしっかりとつかまっていなさい。そうすれば試しの時が来ても、ひるんだりつまずいたりすることはないであろう。」(オルソン・F・ホイットニー、*Life of Heber C. Kimball*「ヒーバー・C・キンボールの生涯」p. 450)

3番目にあげるのは、私の幼なじみであり、友人でもあった第11代大管長ハロルド・B・リー長老の言葉です。

「今は主を迎える最後の神権時代である。主がその教会と世に対する業を終えられる前に、私たちは困難な時期を切り抜けないと行かない。まず主を迎える備えをさせるために福音が回復された。これからサタン力は強大なものとなっていくだろう。その徴候はいたるところに現われている。教会の内部でもそれは起こるであろう。タナー副管長が言われたように、『偽善者は信仰を公言する。だがその心の中は死人の骨で一杯なのである』といった事態が起きるであろう。教会員であることを公言しながら、主がこの教会を管理するために任命したもうた指導者に従わないよう、陰で手引きをする人が出てくるであろう。

さて、私たちにとって最も安全な道は、主が教会設立の日に語られた言葉に従うことである。私たちは主が予言者を通じて下される言葉や戒めによく従わなければならない。この言葉や戒めは、『心にとめてよく聞き』、主の前に『全く聖き道を履』み、さらに『あたかもわが口より聞くが如くに』

受け入れるように与えられたものだからである。(教義と聖約21:4-5) 信仰と忍耐を必要とするものもあるだろう。教会幹部からのメッセージを快く思えないこともあるかもしれない。あなたの政治的見解や社会観と相反するものもあるだろう。またあなたの社会生活を多少なりとも犠牲にしなければならないようなメッセージかもしれない。しかし、これらのメッセージを神の口から出た言葉として忍耐と信仰をもって従うならば、主は次のような約束をかなえて下さるであろう。『地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かさしめん。』(教義と聖約21:6)

(ハロルド・B・リー、*Conference Report*「大会報告」1970年10月、p. 152)

以上3つの予言者の言葉の中には、私たちに必要な勧告があるように思えます。こ



の困難な時代にあつて、イエスとこの教会のみ業を雄々しく証し続けていく上で、忘れてはならない勸告です。

イエス・キリストへの証を持っていると言いながら、主の教会の指導者の教えや勸告に従おうとしないことを正当化する人は、非常に危険な状態にいます。救いを危うくしているのです。

教会の指導者も普通のひと何ら変わらない、欠点や誤ちがあるのだと言って、粗探しをしている人々がいます。そういう危険な考えについて警告したいと思います。

ブリガム・ヤング大管長が明かしたところによると、ある時、彼は財政上のひとつの問題で予言者ジョセフ・スミスを批難したいという思いに駆られたことがあったそうです。しかし、その気持ちは30秒も経たない内に消えました。自分の中にそのような考えが湧いてきたことを、彼は非常に悲しく思ったのです。

ヤング大管長が教会員に与えたこの教訓は、サタンがさらに激しく動き回っている現在、一層意義深いものになってきているのではないのでしょうか。

「私は、ジョセフにも誤ちがあるという考えにいつまでも捕らわれていたとしたら、彼に対する信頼感を失くし始めていたであろう。そして段々とその思いを募らせて、最後には他の人々同様、ジョセフが全能者の予言者であるという証をも失うようになると、自分に与えられた啓示のみたまによってはっきりと知らされた。……

私はすぐさま自分の不信仰を悔い改めた。その誤ちを犯すのも早かったのだが、悔い改めも時を移さず行なった。ジョセフがいついかなる時も神の導きの下にあったのは、疑いをはさむ余地のないことである。

彼の行ないの一つ一つを疑ったり、批判したりする権利など私にはない。彼は神の僕であり、私の僕ではないのである。彼は人間にではなく神に従っていた。彼がしていたのは主のみ業だったのである。」(Journal of Discourses「説教集」4:297)

私は若い頃から、私たちが携わっているこの栄えある業が真実であるという証を感謝の念をもって大切に育んできました。私がどれほどキンボール大管長を愛しているか、皆さんに知っていただけたらと思います。本大会の最後の部会をキンボール大管長と共に過ごすことができ、感謝に堪えません。副管長、十二使徒、七十人、管理監督会の皆さんに対しても、その気持ちは変わるところがありません。彼らは靈感を通して、神によって選ばれた人々です。その靈感あふれる言葉と勸告を支持し、教会幹部の中にある一致を証するものです。

私は教会員を愛しています。また天父のすべての子供を愛し、皆が皆永遠の生命の祝福に目を開くように願っています。人類の救い主であり贖い主であられる主は、私たちがひとりも残さず永遠の生命を受けられるように望んでいらっしやいます。

全教会員に申し上げます。雄々しく、また忠実、従順であって下さい。「われら受けし信仰持ち、殉教者の持つ真理を信じ、いましめ守らん、手に心に霊にも」(讃美歌150番)

この教会はイエス・キリストの教会であります。神はこの教会を管理し、御自身の僕たちと共におられます。神の祝福をいただき、私たちが雄々しく主を証することができるように祈るものです。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

## 神殿の業を推し進めよ



七十人第一定員会会員  
A・セオドア・サトル

➤ の教会の霊的な力の根源は何かと言  
➤ えば、それは主の宮居の中で執行さ  
れる神聖な儀式にほかならないのではない  
でしょうか。

あまりよく知られていないことですが、  
ジョセフ・スミスに与えられた主のみ言葉  
の内、初期に属するものは集合とこの教会  
の設立に関するみこころを示したものが多  
く、後期のものには神殿事業に関するもの  
がほとんどです。

あの素晴らしい最初の示現があった1820  
年の春から数えて3年半たったある日、2  
度目の天の示しがありました。天使モロナ  
イがジョセフ・スミスに現われ、モルモン  
経のことを告げ知らせたのです。

そのメッセージのあまりの素晴らしさの  
故に、多くの人がもうひとつの非常に大切  
なメッセージを見落とし勝ちです。最初に  
モロナイは少々言葉を変えて、マラキの予  
言を引用しました。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来  
る前に、予言者エライジャの手によりて、  
われ神権を汝に顕さん。

彼は先祖になされし約束を子らの心に植  
え、子らの心にその先祖を思わせめん。

もし然らずば、主の来る時、全地はこと  
ごとく荒れ廃れん。」(教義と聖約2:1-  
3; ジョセフ・スミス2:38-39)

モロナイはさらに、イザヤ書、使徒行伝、  
ヨエル書などを初め「多くの他の聖句」を  
引用しました。(ジョセフ・スミス2:41)

モロナイはエライジャに関するマラキの  
予言を引用するに際して、他のいかなる聖  
句とも違う特別な扱い方をしています。そ  
してそれは特に重要視され、現在では教義  
と聖約の第2章として示されています。<sup>1</sup>

モロナイが予言者に伝えたメッセージは、  
エライジャが間もなく訪れることを知らせ  
るものでした。神殿事業に関してあらかじめ  
定められていた事柄が、巻物が開かれる  
ように展開し始めました。教会が設立され  
て1年半もたたない内に、予言者はミズー  
リ州ジャクソン郡で神殿用地を奉獻しまし  
た。(1831年8月)しかし様々な障害があっ  
て、そこに神殿を建設することはできませ  
んでした。

それに続いて、主の宮居の建設に関連す  
る数多くの出来事がありました。(後出の年  
表を参照)

非常に困難な状況下にあって、最初に完  
成したのはカートランド神殿です。この神  
殿の献堂式の時には天使たちが訪れ、神殿  
の上には火が現われました。そして、ある  
人は示現を見、ある人は他の輝かしい顕現  
を受けました。

カートランド神殿献堂式の1週間後、歴  
史的に大きな意義を持つ出来事がありまし  
た。救い主が現われ、神殿を嘉納されたの  
です。モーセもエライヤスも現われました。  
そして、マラキの予言が成就されて、予言者

エライジャが現われ、次のように語ったのです。

「見よ、ここに於て正にその時は全く至れるなり。主は嘗てマラキの口によりて言われしことにして、すなわち主の大いなるおそるべき日の来らん前に、彼（エライジャ）遣わさるべし。

すなわちエライジャは来りて先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせん、然らずば、全地は咄いをもて打たるべし、と言われしことを証する時なり。

この故に、この末日の神権の時代の鍵を汝の手に委す。これによりて汝らは、主の大いなるおそるべき日のすでに近づきて正に門口にあるを知るを得ん。」（教義と聖約 110：14—16）

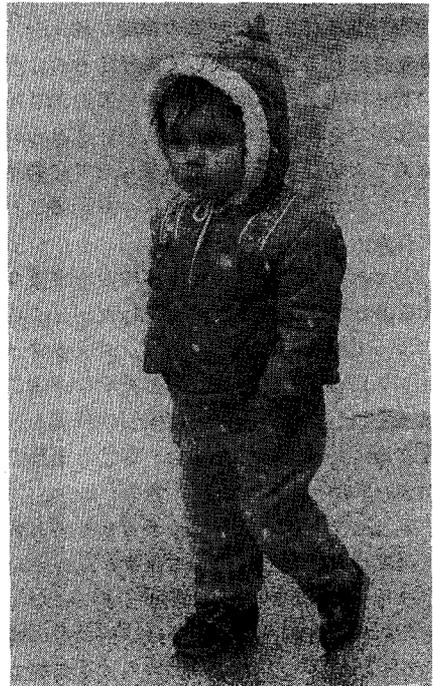
この出来事が起きたのは146年前の昨日のことです。その日ユダヤ人たちは古くから伝わる祭を祝っていました。ユダヤ人たちは2千年以上もの間、エライジャの訪れを待ち望んでいます。彼らは今でも過越しの祭りの時に、幾世紀にもわたって守ってきた習慣を繰り返します。食卓に空席を作り、そこに椅子をひとつ置きます。そしてドアを開け放してカップを掲げ、エライジャを迎えるようにテーブルから立ち上がるのです。

エライジャは再び地上を訪れました。数数の鍵を授けて下さった神に感謝します。今や、神の結び固めの権能を通して、夫婦を、そして親子の永遠の輪の中につなぐための業が神殿の中で始められるようになったのです。神の神権を授かり、権能を持った者が地上でつなぎ、解くすべてのことが天においてもつなぎ、解かれるようになることは是非とも必要でした。（教義と聖約 127：7）なぜなら、栄光、誉れ、永遠の生

命はこの神聖な儀式と神の権能によってもたらされるものだからです。（教義と聖約 128：11—12参照）

この権能によって夫婦は永遠の伴侶として結ばれ、親子の間にも決して切れることのない絆がもたらされるのです。この権能なくして有効とされる儀式は教会にひとつもありません。これは神の王国の至上の権威なのです。

いかなる時代にあっても、この権威が存在せず、またその権能が行使されなければ、だれも天父のみもとに帰り、天父のような者となることはできません。それに、万物の存在意義が全く空しいものとなってしまいうのです。その故に主はこう言われました。「主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」（教義と聖約 2：3）



私たちが理解し得る限り、主が予言者に与えられたみ言葉の内、後期に属するものはやはりほとんどが神殿事業に関するものです。主は予言者にノーヴーに神殿を建てるように命じられました。そして聖徒たちはその事業を始めたのです。

完成に先立って、主は神聖な儀式と、「創世の前より隠されたること、すなわち時満ちたる神権の時代に関すること」を啓示なさいました。(教義と聖約124:41) 死者の身代わりのバプテスマの方法も明らかにされました。また主は、儀式を執行する時は証人を立ててそれが真実であることを証させ、その「録すところは皆天に於て記さ」れるようにと定められました。(教義と聖約124:41)

そしてついに、十二使徒会の会員たちはエンダウメントを授けられ、結び固めの権能を付与されました。この権能が地上から取りさられることは決してありません。今や彼らは完全なる福音に基づいて行動することができるようになりました。これらの極めて大切な事柄が予言者ジョセフに啓示されたのは、殉教のわずか数カ月前のことでした。

ジョセフ・スミスの生涯の中から重要な事件をかいつまんで見てきましたが、これによって明らかになったのは、ジョセフ・スミスにとって、神殿建設と神聖な永遠の儀式を執行するために結び固めの権能を回復することは、何にも増して重要な義務であったということです。

ジョセフ・スミスに続く予言者たちも皆この業に深い関心を示してきました。キンボール大管長が教会を管理するようになってから建設された神殿の数は、他のどの時代をもしのぐものです。文字通り全世界で

神殿を建設しています。

兄弟姉妹の皆さん、私はこの神聖な業について証したいと思います。私はこの業が真実であることを知っています。この業に伴う原則は永遠です。また儀式は神から与えられた永遠のものであり、創世以前に定められていたものです。私たちにはこの業を進めていく責任があります。主がこの業をなすように望んでおられるのは、ほかならぬ私たちに対してなのです。これは決して重荷ではありません。特権です。

神殿推薦状は私たちが受けることのできる栄誉の中で、最も貴いもののひとつです。定期的に神殿に参入するならば、教会の守護の下に最高の賜を受けることができるでしょう。そこで特別なスピリットを感じることができます。平安に包まれるのです。神殿でなされる奉仕の業は、この世を去った人々に救いをもたらす助けとなるものです。私は、神殿で奉仕の業に就く人々は除除に幕のかなたからの祝福を受けるにふさわしい人となることを知っています。神殿で受けた数々の祝福は皆さんの家庭の中に注がれます。

神は生きておられます。また、イエスがキリストであり、これは神の王国の至高の業であります。イエス・キリストのみ名によって、申し上げます。アーメン。

### 1831年から1843年にかけての、神殿事業に関する要約年表

1831年7月20日。ミズーリ州インデペンデンスに建設される神殿について明らかにされる。(教義と聖約57:1-3)

1831年8月1日。ミズーリ州ジャクソン郡の地と神殿用地を奉獻せよとの指示が与えられる。(教義と聖約58:57)



1831年8月3日。ジョセフ・スミス、ミズーリ州ジャクソン郡の神殿用地を奉獻する。(History of the Church「教会歴史」1: 199)

1831年。新しく且つ永遠の誓約に関する教義と原則が啓示される。ただしこの啓示は1843年7月12日に至るまで記録されることがなかった。(教義と聖約132章)

1832年9月22日。新エルサレムと神殿に関する予言が与えられる。(教義と聖約84: 1-5)

1832年12月27日。聖徒たちに「神の家」(神殿)を建てよとの命が下される。(教義と聖約88: 119)

1833年6月1日。ミズーリ州の聖徒たちに再び神殿建設の命が与えられる。その中で「天よりの能力の祝福」が授けられると約束される。(教義と聖約95)

1833年7月23日。カートランド神殿定礎。  
(History of the Church「教会歴史」1: 400)

1833年8月2日。先に命のあったミズーリ州に建てらるべき神殿に関して啓示が与えられる。主が示す「範式」にならって

10-17)

1836年1月21日。死者の救いに関する教義が啓示される。(ジョセフ・スミス——日の光栄の王国に関する示現)

1836年3月27日。カートランド神殿献堂の祈りが記される。(教義と聖約109)

1836年4月3日。エライジャの来訪。結び固めの鍵が回復される。(教義と聖約110: 13-16)

1838年4月26日。ファーウエストに神殿を建設せよとの命が下される。(教義と聖約115: 7-16)

1838年7月8日。什分の一を神殿建設のために用いよとの指示が与えられる。(教義と聖約119)

1839年4月26日。ファーウエスト神殿定礎。  
(History of the Church「教会歴史」3: 336-37)

1841年1月19日。ノーヴー神殿建設の命が下される。(教義と聖約124: 25-45)

1842年9月1日。儀式の記録作成を命ぜられる。(教義と聖約127: 5-9)

1842年9月6日。儀式執行に際して証人を立てよとの聖徒への指示。様々な教義、原則が明らかにされる。(教義と聖約128)

1843年5月16-17日。予言者、結び固めの教義を説く。

---

注1。この時のモロナイの言葉は「<sup>いさしの</sup>誠命の書」の第1章に収められていたが、1831年11月1日に「<sup>きん</sup>前書」として知られる啓示(現在の「教義と聖約」第1章)が与えられてからは、その後第2章として載せられ、現在では、「教義と聖約」の第2章となっている。  
(「教義と聖約」の『解説』[pp.1-4]参照)

## 教会の将来



七十人第一定員会会長  
G・ホーマー・ダラム

**私**は今皆さんを前にしてこの壇上に立っていますが、幾人かの医師が証するところによると、これはまさに奇跡だということです。(訳注：ダラム長老は病気のため入院して治療を受けていた。そのため前回4月の年次総大会には出席できなかった)神のみ守りがあったこと、聖なる神権による数々の祝福、また最愛の妻、教会幹部、家族、今日この場に出席しておられる多くの方々の助けと祈りに何と感謝の言葉を申し上げたらよいのかわかりません。

さて、私はみたまの導きの下に、これまでの私たちの歩みを振り返りながら、教会の将来について語りしたいと思います。

1879年12月、ユタ州のパロワンステーク部の四半期大会において、49家族の人々が新地開拓の召しを与えられました。その召しはジョン・テイラー大管長と十二使徒会からエラスマス・スノー長老を通して来たものでした。後には近隣の入植者からこの計画の後発隊に参加する人も出てきました。教会史上、「ホール・イン・ザ・ロック」の徒渉」としてよく知られている偉業を成し遂

げたのは、この時の開拓者たちだったのです。250人の人々が80台の荷車と数百頭の牛馬を率いて、ユタ南部の未踏の荒地の中を道を切り開きながら進んでいきました。彼らが通ったその地域は今でも世界有数の秘境として当時のままの姿をとどめています。彼らの目的地はサンワン郡でしたが、その行く手には木一本生えていない岩場や崖に加えて、人を寄せ付けぬかのようにコロラド川の大峡谷が立ちはだかっていました。そこに橋が架けられたのは、ようやく1934年になってからのことです。彼らが進んだ道筋に沿って、ユタからアリゾナへ飛行機便が通うようになるには、1959年まで待たなくてはなりませんでした。

最短ルートを探していた先発隊は、グレンキャニオンで、その大絶壁を上から谷底まで切り裂くように走るひとつの隘路を発見しました。谷底の川までは600メートルの断崖が赤茶けた肌を見せていました。この「ホール・イン・ザ・ロック」(断崖の中にできた裂け目の意)と呼ばれる地点を通るのが最短距離のように思えました。

絶壁の中にできたその裂け目は家畜や車が通るには余りにも狭過ぎましたし、人が通れるだけの幅すらありませんでした。ましてやその途中には、野性の羊も通れぬ高さ20数メートルに及び切り立った場所が何箇所もあり、荷車を通すなどどう考えても無理なことでした。

1879年の4月にパロワン盆地、シダー盆地を出発し、12月にここに到着した聖徒たちは、爆薬を使ったり様々な道具を用いたりしてその隘路を切り開き始めました。隊長のプラット・D・ライマン長老の読みでは、そこに道を作るとしてもできるのは上から谷底までの3分の1の間に過ぎず、しかも

勾配は45度というかなり急なものでした。残り3分の2は切り立った小断崖が幾つか続いていました。しかし彼らには備えがありました。信仰はもちろん、崖を爆破して道を切り開くだけでなく、家畜や荷車を乗せて川を渡るためのいかだを作るに必要な物まで準備していたのです。

1880年1月25日までには道と舟ができました。次に待ち受けている仕事は、人間と40台の荷車を谷底の川に下ろすことでした。それが済むと、後方のフィフティ・マイル・スプリングで待機していた一隊が続くことになっていました。

クメン・ジョーンズの記録がこの時の様子を書き残しています。20人の男と子供たちが荷車を後部にゆわえた長いロープで押さえます。車輪は回転しないように鎖で固定しておきます。そうしないと、荷車は全くブレーキがきかず、後ろで押さえている

人たちが引きずられてしまうことになるからです。プラット・D・ライマンの1880年1月26日の日記にはこう書かれています。「きょうは隊の荷車を全部下まで下ろし、その内26台を向こう岸に運んだ。いかだは2本の櫂で動かしたが、非常にうまくいった。」

その日最後に荷車を下ろしたのは、ジョセフ・スタンフォード・スミスの家族でした。その孫レイモンド・スミス・ジョーンズはその時のことを記録にして残しました。私は、現代の映画会社が何百万ドルものお金を投入し、最新の技術を駆使して行なったとしても、その時の様子を再現することはとても無理だと思います。

スタンフォード・スミスはその長い1日、他の人たちの荷車下ろしを手伝いました。ところが自分の荷車がそのまま上に残っていることに気がついたのです。彼は泣くに



泣けない気持ちで600メートルもあるその急斜面を登っていきました。上では妻のアラベラが待ちくたびれた面持ちで、キルトを敷いた上に子供を抱いて座っていました。持ち物とほかのふたりの子供を乗せた荷車は大きな岩の陰に止めてありました。

彼はそれを崖のふちまで持って来ると、3頭いる馬の中から1頭を、荷車の後輪の車軸につなぎました。それからアラベラと一緒にその急斜面を見下ろしたのですが、思わず「とても無理だ。できやしない」という言葉が口をついて出てきました。

するとアラベラが言いました。「でも、どうしてでもやらなきゃならないわ。」

彼女はキルトを敷くと、ロイという3歳の子のひざの上に赤ちゃんをのせ、「お父さんが戻るまでだっこしててね」と言いました。それから上の女の子のアダをふたりの前に座らせました。

アラベラが荷車の後ろにつないだ馬の手綱を握ると、スタンフォードは荷車を前に進めました。ところが、荷車が急な動き方をしたために、アラベラと馬が倒れてしまったのです。アラベラは体勢を直すと足を踏ん張り、必死の思いで手綱を引きました。ごつごつとした岩にぶつかり、アラベラの足腰至るところにひどい切り傷ができました。後ろにつないだ馬はしりもちを着いた格好で、半死半生のまま谷底までほとんど引きずられ通しの状態でした。着物もポロポロになり、ひどい傷を負ったこの勇敢な女性が後で語ったところによると、下までずっとはねるようにして下りていったということです。

下に着いた夫婦の耳に、子供たちが呼んでいる声がかすかに聞こえてきました。父親が上に行くと子供たちは皆じっとして待

っていました。赤ちゃんを抱えると、他の子供たちには自分の体にしがみついて離れないようにさせながら、険しい崖道を下りました。川のほとりに着くと、遠くの方から5人の人が鎖やロープを持って自分たちの方にやってくるのが見えました。スミス家の人々がいないのに気づいて、助けにやって来たのです。スタンフォードは大きな声で言いました。「大丈夫だ……うちの奥さんさえいれば百人力さ。」(デビッド・E・ミラー、*Hole-in-the-Rock: An Epic in the Colonization of the Great American West*, 「ホール・イン・ザ・ロック：アメリカ大西部開拓史詩」ユタ大学出版局、1959年、pp. 101—18)

教会の歴史を振り返ると、このような感動的な出来事が数え切れないほどあります。この歴史は、アジア、アフリカ、あるいは世界のどこの地の人であれ、新しく改宗したすべての人に受け継がれるべき貴い遺産なのです。パウロはこのことを次のように言っています。「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。……

もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。」(ガラテヤ3:27, 29)

今私たちの前には本腰を入れて取り組まなければならない問題があります。全世界の末日聖徒の家庭において、勇気ある男女、従順な子供たちが育てられているでしょうか。子供たちは安全な場所にいるでしょうか。人生の危険な隘路に落ち込んではいないでしょうか。今私たちが教会の将来のためにどのような歴史を築いているのでしょうか。

この教会には、平原も海原も越え、ホール・イン・ザ・ロックも征服してきた歴史

があります。ところで、今私たちはどのような働きをしているのでしょうか。

私たちの前途には、キリストの再臨につながる重大な出来事が待っています。続々と発表される新しい神殿の建設にはどのような意味があるのでしょうか。1831年に予言者ジョセフ・スミスに与えられた次の啓示は、何を言わんとしているのでしょうか。「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じ行きて世の<sup>眞</sup>巢にまでも達せん。」(教義と聖約65:2)

私たちが受け継いでいる教会の歴史は実に偉大なものです。しかしこの行く手に待ち構えている歴史は、一人一人の会員にとって、また一つ一つの教会ユニットにとって、さらに偉大なものなのです。とにかく、その歴史は韓国、フィリピン、アンデス、そして全ステーク部の中で毎日毎日築き上げられています。

様々な時代の人々が新エルサレムに思いをはせ、その思いを駆り立てられてきました。それはこの時代の教会員にも言えることです。私たちは、キリストが「御自ら地上に王となりて治め」たもう日待ち望んでいます。(信仰箇条第10条)しかし、マラキは予言者として次のように問いかけています。「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。」(マラキ3:2)私たちの足跡は将来教会の歴史の中の1ページとして残されるのですが、自分の心と家庭の中にシオンを築き、主が来られる日に耐えられるよう準備をしようではありませんか。キンボール大管長は私たちの人生を、そして家庭を美しいものにするようにと何度も言ってこられました。また、キリストのような、より献身的な働きをするように求めておられ

ます。

予言者ジョセフ・スミスを通して回復されたイエス・キリストの福音は、人を救いに導く神の力であります。また、イエス・キリストは人類の救い主、贖い主であり、父なる神は生きておられます。そして、スベンサー・W・キンボール大管長は今の時代に遣わされた主の生ける予言者であることを証します。ホール・イン・ザ・ロックの開拓者たちがテイラー大管長の召しに応えたように、私たちも主の予言者の声に聞き従うなら、キリストが「王の王、主の主」(黙示19:16)として地を治めたもう時のため備えをすることになるのです。

私たちは主の来られる日に耐えることができるよう今備えなければなりません。そして試しと逆境の時を乗り越えることによって、それを将来の教会の歴史の道しるべとすることができるのです。私たちがそれぞれ持ち分を果たし、またそれによって主と隣人に愛を示すことができるように、イエス・キリストのみ名によって祈るものです。アーメン。



# 愛は家族を癒す力



七十人第一定員会会員  
F・エンツィオ・ブツシエ

人類の歴史を振り返ってみて、現代ほど結婚と家庭が危機にさらされている時代はありません。過去において、家族が一緒に生活するというきわめて自然な形を生み出していた周囲の状況は、そのほとんどが姿を変えてしまいました。しかもその変化は、過去わずか70年という短期間の間に起こったのです。

ほんの一昔前まで、一般の家庭では、ささやかな生活を営むために家族が一日中働かなければなりません。そして夜になると火を囲んで集まり、歌を歌ったり、個々の経験を語り合ったりしながら、家族の絆を楽しんだものです。これが自然の教育であり、喜びでありました。また、円満な家庭生活に欠かせないほど完璧な環境がそこにありました。

今日、ラジオ、テレビ、印刷物、その他現代文明が生み出した数多くの媒体が、文字通り源となって測り知れない影響を与え、歴史上家族が果たしてきた文化的な役割を根底から覆してしまいました。結婚と家庭がこのような苦境に立たされている時代に、主は末日の予言者を通して、夫婦間の永遠

にわたる誓約を回復されました。そして、家族の真の目的を悟るという責任を私たちに課せられたのです。

この誓約はそっくりそのまま、末日の世に啓示された福音の真理の中心となり、後の予言者デビッド・O・マッケイ大管長はこれを簡潔な言葉で次のように表わしました。「いかなる成功も家庭における失敗を償うことはできない。」(Conference Report 「大会報告」1964年4月, p. 5) 今日結婚生活では、主が私たちに授けて下さった力を育み、完全なものとし、実際に活用しなければ、昔の規範に従っても無意味です。主が授けて下さったその力とは、最大の戒め、すなわち「互いに愛し合いなさい」という戒めのことです。

2千年近くもたった今日でも、世の人々はマタイ伝第5章に記されている救い主の言葉を受け入れようとしません。

「隣人を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」(マタイ5:43-44)

キリストが教えておられるこの愛は、世の中の愛とは異なっています。それは、素晴らしい人や、行ないが立派で尊敬に値する人、能力を備えた影響力のある人を愛するだけにはとどまりません。天の父なる神は末日の予言者を通じ、神の愛を、すなわち俗世からの影響におびやかされることのない天よりの力を育むように呼びかけておられるのです。モルモン経の予言者ニーファイによれば、この神の愛はだれもがたどりつかねばならないもので「どんなものよりも好ましいもの」(I ニーファイ11:22)です。

しかし、同じくモルモン経の偉大な指導

者ベンジャミン王の教えによれば、私たちが肉欲に従う状態にいる限り、この愛は私たちの内に存在しません。ベンジャミン王は「肉欲に従う人は神の敵で……ある」（モーサヤ3：19）と説明しています。私たちは神の敵である肉欲を克服しなければならないのです。そのためには、ベンジャミン王の言葉によれば、聖きみたまの導きに従い、文字通り神と誓約を交わすことです。つまり、救い主の贖罪を受け入れ、「幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」することです。（モーサヤ3：19）

何と力強いメッセージ、何とチャレンジにあふれた責任でしょうか。私たちは日々決意を新たにして、神がその子供たちに授けられたこの重要な戒めを生活の中心としなければならないのです。

モルモン経の予言者モロナイは、どうしてもこの愛に到達できるか説明しています。

「この愛はキリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。

それであるから、私の愛する兄弟らよ、あなたたちは、神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。」（モロナイ7：47—48）

天父が私たちに望んでおられることは、この無条件の愛で自分自身を満すことです。これはすなわち、日々の十字架を自ら負って謙遜な心で主のあとに従えという訓戒を受け入れるために、備えることです。救い主はマタイ伝10章で次のように述べておられます。

「自分の十字架をとってわたしに従って



こない者はわたしにふさわしくない。

自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」（マタイ10：38—39）

永遠の誓詞と誓約の中で無条件の愛を基に築かれる結婚は、現代社会でしばしば見られるような、ふたりの自己中心的な者同志の生活とはまったく無縁です。神の愛である無条件の愛を礎石とすれば、結婚生活に離婚という言葉は浮かんでできませんし、短期間の別居でさえ耐えがたい苦痛になります。別居や離婚は弱点の現われであり、時には邪悪のしるしとなるものです。

主は結婚の誓約の神聖さについて、明確に教えておられます。マタイ伝第19章に、救い主がパリサイ人に語られた言葉が次のように記されています。

「さてパリサイ人たちが……言った、『何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか。』

イエスは答えて言われた、『あなたがたはまだ読んだことがないのか。』創造者は初めから人を男と女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきで

ある。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない』。

彼らはイエスに言った、『それでは、なぜモーセは、妻を出す場合には離縁状を渡せ、と定めたのですか。』

イエスが言われた、『モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。』(マタイ19:3-8)

心をかたくなにして苦しむことのないようにする唯一の方法は、キリストが説明しておられるように、愛の力を自らの中に培うことであり、この愛の賜を文字通り天父に願い求めることです。そして、主なるキリストの贖罪を通して聖徒となり、幼子のようにへりくだって無条件の愛で満たされることです。この愛を身にまとうことによってみたまを受け、みたまと共に生活することによって、日々のチャレンジを克服するために必要な導きを受けるのです。

私たちは不完全な肉体を持ちながら、完成に向かって努力しています。時にはその途上で、家族や伴侶でさえも、自分の行動を妨げる敵のように思えることがあります。そして、力としての愛が必要とされ、試される時がくるのです。最もわずかな愛しか備えていない人が、最も愛を必要とするからです。

終わりにあたり、私が経験したことをお話したいと思います。ある日のことです、私は急な用事ができて普段なら家にはいない時間に帰宅しました。私が奥の部屋にいと、学校を終えて帰ったばかりの11歳になる息子が妹に下品な言葉を浴びせているのが聞こえてきました。息子の口からそのような言葉を聞こうとは夢にも思わなかった私は、ひどく腹をたてました。怒りのあまり立ち上がり、息子をしかりに行こうと

しました。しかし幸いなことに、息子のところへ行くには、部屋を横ぎってドアを開けなければなりませんでした。その数秒間に、私はこの事態を正しく処理できるように真心から天父に祈ることを忘れなかったのです。私の心は平安をとりもどし、怒りはすでに消えていました。

私がかにいるのを知った息子は激しく動揺し、私が近づくにつれて恐れの色を濃くしました。ところが驚いたことに、私はこう言ったのです。「やあ、お帰り」そして手を差し伸べて握手をしたのです。それからごく普通の態度で息子を居間に招き入れ、ふたりで話をするために近くに座せました。私の口からは息子への愛を表わす言葉が出てきました。私は息子に、すべての人が日々心の中で戦いをしていることについて話しました。

そして息子を信頼していることを伝えると、息子は泣き出して、自分のふさわしくない行ないを告白し、激しく自分を責め始めたのです。こうなると私の役目は、息子の罪を正しく見すえ、息子に慰めを与えることでした。私たちは素晴らしきみたまに包まれ、しまいには互いに涙を流し、愛に満たされて抱き合いました。そして喜びが訪れたのです。父と息子の悲惨な対立にもなり得たこの出来事が、天からの力に助けられ、ふたりの間に忘れることのできない最も美しい経験を残してくれました。

兄弟姉妹の皆さん、神は生きておられます。この教会は神の教会であって、現代はまさに備えと警告の時です。もし私たちが神から命じられたように、力としての神の愛を完全に行使していなければ、私たちの結婚生活は堅固なものとならず、家庭は弱体化し、私たち自身の救いは危うくなることでしょう。これらの証を、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

## 神殿の目的



七十人第一定員会会員  
W・グラント・バンガーター

**本**日この部会で教会幹部の方々が神殿について話をされました。昨年の11月になりますが、ジョーダンリバー神殿の献堂式の際には、5日間にわたり毎日3回のセッションが行なわれました。しかし、それでもすべてを語り尽くすことはできませんでした。私はここに、神殿についてお話する機会に恵まれましたので、神殿の持つ目的について説明してみたいと思います。

末日聖徒はひとつの民として、神殿の中で素晴らしいみ業を成し遂げてきました。亡くなった先祖の名前を調べ、記録から人名を抄出するために働き、死者の贖いのために、また自分自身のために儀式を執行するなど、実に献身的に奉仕しています。すでに16,000名以上の神殿職員の方々が神殿で奉仕しておられ、その数は、福音を宣べ伝える専任宣教師の数に迫りつつあります。

今はまさに、予言の成就する時です。イザヤは2,700年前にこう告げています。

「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべ

ての国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」(イザヤ2:2-3)

この言葉の意味するところ、その深遠さ、そしてその力は、神殿を知る者でなければ理解できません。

神殿に関して言えば、私たちは現在、目覚ましい発展の時期にいます。先週、新たに4つの神殿の建設が発表されました。過去2年間を振り返ってみると、計画の段階にある神殿や工事中の神殿も含めて、その数は21から41に急増しています。この間に、3つの神殿が献堂され、業務が開始されました。このようなことは、教会歴史上かつてなかったことです。今では教会の各地でステーク部大会が開かれ、末日聖徒は主の宮居で奉仕するという使命についてさらに教えを受けられるようになりました。

しかし、ここで少々話しておく必要があると思うのですが、神殿について、その意味を十分に理解していない誤った考えが皆さんの中に広まっています。例えば、次のように言う人がいます。

1. 私の系図は全部終わりました。
2. コンピューターや人名抄出プログラムが、私に代わって系図をやってくれます。
3. 神殿活動は死者のためのものです。
4. 神殿活動は老人のすることです。
5. 身代わりの名前をもらうために神殿に行きます。
6. 神殿は参入してもしなくてもよいところですよ。

聖典を研究するとわかりますが、神殿の教義は末日聖徒に次のことを求めています。

1. 神殿を建設する。
2. 自分自身の祝福を受けるために神殿に参入する。
3. 亡くなった先祖の身代わりの儀式を行なうために再び参入する。
4. その他の人々のためにも儀式を行なう。
5. 自ら霊的な糧を得るためにしばしば参入する。

それでは、これらの神殿は何のために存在しているのでしょうか。

第1に、神殿は生ける教会員のためにあるということです。神殿は参入してもしなくても良いというものではありません。聖典には、神殿について次のように記されています。「福音のために働く仕事に召されたることごとくの人々を教うる一つの場所となり、かくて、彼らが……この世の神の王国に関するすべてのことに於て完き者となるを得んためなり。」(教義と聖約97:13-14)「この故に、われ誠に汝らに告ぐ、汝らの灌油の儀、汝らの聖なる洗ひ……汝らの聖会……聖き所に於ける汝らの神託……シオンのすべての市制〔換言すればシオンの市民〕の栄と誉とエンダウメントは、わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるるわが聖なる宮居の儀式によりて制めらるるなり。」(教義と聖約124:39)

神殿におけるエンダウメントは、バプテスマと同じく、教会員にとって欠くことのできない聖なる祝福なのです。エンダウメントの後には、妻を夫に、子供を両親に結び固める儀式があります。これらの祝福なくして、完き福音は存在しません。モロナイは次のように述べています。「もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廢



れん。」(教義と聖約2:3)

神殿から遠く離れた地域では、まだこの祝福にあずかっていない家族が数多くあります。神殿が献堂されてから数世代にもなる地域でさえ、半分の家族しか結び固めを受けていません。神殿事業は、教会の生ける会員のためにあるのです。

第2に、神殿は死者の贖いのためにあるということです。聖典や教義の中には、この死者についてさらに具体的に述べられています。マラキは、「父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる」(マラキ4:6)と言いました。ジョセフ・スミスは、私たちに縁ある死者、私たちの死者のための神殿の祝福を強調しました。(教義と聖約124:32-36; 127:5-6; 128:8, 14-15 参照)つまり、中心は家族にあるのです。私たちがまず行なうべきことは、亡くなった親族を探すことです。

皆さんの系図は、完全に終わったわけではありません。私の祖父母は今から55年前に、先祖のための神殿の儀式はすべて終わ



ったと考えていました。ところが、その後私の家族は、さらに1万6千人の親族の名前を探しあてました。新しい神殿を建設中の地域では、この業は始まったばかりです。多くのステーク部で人名抄出プログラムが実施され、大勢の教会員の献身により成果をあげていますが、この中には私たちに近い世代の死者は含まれていません。ですから、このプログラムは、そういった私たちの比較的最近亡くなった親族を救うことはできないでしょう。しかし、それよりさらにさかのぼった世代の死者を探求する時には、測り知れない価値を持つプログラムです。

もうひとつ忘れてならないことは、神殿の儀式は名前のためではなく人のために行なわれるということです。私たちが「死者」

と呼ぶ人々は、霊界で生きており、神殿の中に実在するのです。

したがって教会の目的は、神殿が完成した時にそれを受け入れることができるように、聖徒たちを備えることにあります。世界各地に神殿ができて参入する人がいなければ、何とも残念なことです。人々を備えさせるひとつの方法に、力強い説教があげられます。私たちは力強い説教を聴くと、罪の意識を感じるがあります。しかし、2週間もするとその意識はしだいに薄れ、やがてはまったく感じなくなります。それでは人々を備えさせるものは何か、その答えは神権指導者の肩にかかっています。

チリの場合を例にとってみましょう。サンチアゴに神殿を建設するという発表があった時、私の仕えていた地域には10万人の

会員がいましたが、神権者はわずか3千人しかいませんでした。神権を持っていないければ神殿に入れませんから、これではわずかな会員しか資格を得られないこととなります。そこで私たちは決心しました。少なくとも1万人の兄弟たちを備えさせて、彼らが神権を受け、忠実な伴侶と共に神殿に参入できるようにしよう、と。

また、チリの聖徒たちも責任を引き受けました。それは神殿が完成するまでに、亡くなった先祖を調べて10万人の名前を準備することです。このような準備は、他の地域でも現在行なわれています。

さて、神殿が建てられてから久しい地域では、この機会に決意を新たにし、引き続き準備を怠らないようにしましょう。これは、ホームティーチャー、定員会会長、監督、とりわけ大祭司、そのほか福音を教える業に携わるすべての人々の仕事です。私の知っている長老定員会の会長は、定員会会員が全員神殿に参入できるように必要な援助を与えるという目標を立てました。最初の報告では、6人を除いて皆その資格を得ました。彼が解任されるまでに、さらに6人の内3人が神殿に参入しました。残りの3人も、その後定員会会員に助けられて、資格を得られるようになりました。

毎日神殿で働くという特権に恵まれ、私はそこで授けられる祝福が豊かで栄光に満ちた神聖なものであることに、いつも心を動かされます。神殿で行なわれる儀式について質問を受けることもあります。もちろん、それは神聖なものですから、神殿外で話すことは許されていません。またある人から、神殿に初めて参入する人がまごつかないように、オリエンテーションを頼まれることもあります。私が特に強調しておき

たいことは、神殿に参入するための準備は福音にあるということです。神殿で語られ行なわれることは、すべて聖典にその基を置いているのです。

福音とは、主イエス・キリストを信じる信仰です。これは、喜んで主の教義を受け入れ、主のみ名を受け、主の戒めに従うことを意味します。福音とは、悔い改めであり、あらゆる罪から清められることです。また、誓約と約束を交わすバプテスマであり、聖霊を伴侶とする権利です。聖霊は、私たちがふさわしい状態にあれば、神殿の儀式を受ける時に導きと教えを与えて下さいます。福音とは聖典です。神殿に関するほとんどの質問の答えは、自ら聖典の中に見いだすことができるでしょう。福音とは、祈りであり、謙遜さであり、素直な心であり、キリストの愛です。それは約束であり、誓約であり、そして祝福でもあります。

最後に教師や監督、ステーキ部長の方々に勧告したいと思います。一度参入しただけで神殿について完全に理解できる人は、もちろんいませんが、もし皆さんが主の民を神殿参入に備えさせたいと思うならば、福音を教えて下さい。神殿で行なわれることを教えるようにはいけません。それを学ぶために神殿に行くのですから。福音の原則を生活の中に確立していれば、神殿で行なわれることはきちんと理解できるはずですが、まだ確立していなければ、ほかのこともしても役立ちません。この知識を身につけていない人は神殿に参入すべきではないのです。

神の恵みが主の民の中にあつて、聖徒たちがこの祝福にあずかり、神殿の中で聖なる儀式を行なうことができますように。イエス・キリストのみ名により心からお祈りします。アーメン。

# 「救い主、イエス」



十二使徒定員委員会  
テビッド・B・ヘイト

**少**しの間、今私たちが生ける予言者を仰ぎ見ながら、「感謝を神にささげん」（讚美歌170番）を歌った時の気持ちを思い出していただきたいと思います。私は、この偉大な讚美歌を歌っている間に感じたあふれ出るような愛ほど偉大な愛を、味わったことはありません。これは救い主が教えられた愛です。

皆さんすべてがこの場で体験されたことを思い起こし、記憶して、記録にとどめておかれるよう希望いたします。おそらくこの場で私たちの予言者を見上げていた時のような気持ちは、言葉には尽くし難いものかもしれません。私も皆さんと同様に胸から込み上げてくるのを感じていました。どうかこのことが皆さん個人の歴史に残りますように。

さて、人種や環境を問わず、あらゆる人人の心の中には、今持っていないものへのたとえようもないあこがれがあります。このあこがれは慈悲深い創造主が授けたもうたものです。

このあこがれの気持ちが、それを満足させることのできるたったひとりの方に導か

れることは、神が意図されたことでした。そうです。私たちは永遠の神の御子キリスト・イエスの中にこそ、その完きを見いだすのです。パウロは次のように指摘しました。「神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ……。」（コロサイ1：19参照）

イエス・キリストはこの世の救い主、贖い主として選ばれ聖任された、たったひとりの御方です。主はジェレドの兄弟にこう言われました。

「見よ、われはわが民を贖うために創世の前より備えられたるものなり。われはイエス・キリストなり。……わが名を信ずる一切の者はわれによりて永遠に光を受け(る)。」（イテル3：14）

主は弟子たちに教えました。「わたしが天から下ってきたのは、自分のこのころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。

子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう。」（ヨハネ6：38、40）

今日多くの人々は、主のエルサレム凱旋入城を記念して、しゅろの日曜日を祝っています。群衆は、マタイやヨハネが記したように「自分たちの上着を道に敷き」（マタイ21：8）、「しゅろの枝を手に取り、迎えるに出て行った」（ヨハネ12：13）のです。

それは年に一度の過越の祭の時でした。当時サンヒドリンの大祭司たちは、イエスを捕らえ、死に陥れるためにいろいろと策略を巡らしていました。そして機会が訪れたと思ったのです。

過越の祭の前日、イエスは弟子たちに、教えを授けるので皆で集まれる部屋を捜すようにと指示されました。そしてその部屋で、イエスは十二使徒と食を共にされました。

た。食事が終わると、主は弟子たちに教えを施されました。そして彼らの足を洗い、こう言われました。

「あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。……わたしはそのとおりである。

しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。」(ヨハネ13:13—14)

そして、主は弟子たちを教えて言われました。

「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。

子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、……『あなたがたは私の行くところに来ることはできない』。

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ13:31, 33—35)

また、続いてこう言われました。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。

わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意に行くのだから。

そして、行って場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所<sup>ところ</sup>にあなたがたもおらせるためである。

わたしがどこへ行くのか、その道はあな

たがたにわかっている。」(ヨハネ14:1—4)

トマスは聞きます。「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう。」(ヨハネ14:5)すると主はこう答えられました。

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである。」(ヨハネ14:6—7)

「わたしは父から出てこの世にきたが、またこの世を去って、父のみもとに行くのである。」(ヨハネ16:28)

「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。」(ヨハネ16:23)

二階の広間で、イエスは聖餐としてパンをとってさき、祝福し、弟子たちにお配りになってこう言われました。

「これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい。

……この杯は、あなたがたのために流すわたしの血<sup>ち</sup>で立てられる新しい契約である。」(ルカ22:19—20)

聖餐を教えられた後、救い主はこう説明されました。「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。」(ヨハネ16:7)

救い主は使徒たちと従う者たちのために祈られました。

「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。

あなたは、子に賜わったすべての者に、

永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネ17:1-3)

イエスは御父への祈りを終えた後で、弟子たちと共に二階の部屋を離れ、ゲツセマネの園に入られてひとり祈りを捧げられます。

「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさして下さい。」(マタイ26:39)

この時の苦しみについて、主御自身がこうおっしゃっています。

「その苦しみたるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と通つながらを苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。

然しはあれども、父なる神は讃むべきかな。さればわれはこの苦しみをなめ、人の子らの為に準備を為し終りたり。」(教義と聖約19:18-19)

「見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。」(教義と聖約19:16)

兵士とユダが来るのを見て、主は言われました。「見よ、わたしを裏切る者が近づいてきた。」(マタイ26:46)

そしてユダが主のほおに接吻をします。

イエスは言われました。「友よ、なんのためにきたのか。」(マタイ26:50)、「だれを捜しているのか。」(ヨハネ18:4)



兵士が言いました。「ナザレのイエスを。」すると主は次のように答えられました。「わたしが、それである。」(ヨハネ18:5) こうして兵士たちはイエスをユダヤ人の指導者、次いで大祭司カヤバのもとへ連行するのです。(マタイ26:57参照)

「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ。」(マタイ26:63) カヤバが問うと、イエスは次のようにお答えになりました。

「わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう。」(マルコ14:62)

それからイエスはピラトの前でこう聞かれます。「あなたはユダヤ人の王であるか。」(ヨハネ18:33)

主は答えます。「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦った

であろう。」(ヨハネ18:36)

ピラトは群衆に言います。「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがたのしきたりになっている。ついては、あなたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか。」(ヨハネ18:38-39)

群衆は叫びました。「その人ではなく、バラバを。」(ヨハネ18:40参照)

そこでピラトはイエスをむちで打ちます。また、兵士たちはイエスの頭にいばらの冠をかぶせ、紫の衣を着せます。(マルコ15:15-17参照)

ピラトは言いました。「わたしはこの人になんの罪もみとめない。」(ルカ23:4)

ところが、群衆は叫びます。「その人を殺せ。……十字架につけよ、彼を十字架につけよ。」(ルカ23:18, 21参照)

こうして人々は主を捕らえ、ペテロは主を3度否定するのです。主は御自分で十字架を負い、ゴルゴダの丘への長い道を歩まれます。道を埋めた人々の間を過ぎ、むせび泣く女たちの傍を通り、十字架につけよと叫ぶ殺人者たちの間を通り、町の門を通って「されこうべ」という意味のゴルゴダの丘に行くのです。(ヨハネ19:17参照) こうして人々は主を十字架につけます。

イエスは隣の強盗にこうお告げになります。「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」(ルカ23:43)

イエスの最後の言葉はこうでした。

「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。」(ヨハネ19:26) そしてヨハネに向かいこう言われました。「ごらんなさい、これはあなたの母です。」(ヨハネ19:27)

「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。」(ルカ23:46)

「すべてが終わった。」(ヨハネ19:30)

さて、週の初めの日、夜明け前に、女たちが香料を持って墓を訪れ、そして「石が墓からころがしてある」のを見つけました。(ルカ24:1-2参照)

天使の声はこう尋ねました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24:5-6) これは、地球の歴史が始まって以来最も栄光に満ちた出来事のお告げでした。

マリヤは声を聞きました。「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」

マリヤは言います。「もしあなたが、あの方を移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。」

彼女は「マリヤよ」という声を聞きます。

気づいたマリヤは「ラボニ」と答えます。「わたしにさわってはいけない。わたしはまだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい。」(ヨハネ20:15-17参照)

後にイエスは二階の部屋で使徒たちにみ姿を現わされました。お亡くなりになる前に過ごされたあの部屋です。弟子たちは驚きました。そして、主は弟子たちに語って次のようにおっしゃいました。

「やすかれ……

なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。

わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしののだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。」(ルカ24:36, 38-39)

後に、ガリラヤの岸辺で、救い主と弟子たちが共に魚を食べていた時、主はペテロにこう尋ねました。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか。」

「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです。」

「わたしの小羊を養いなさい。」

「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。」

「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです。」

「わたしの羊を飼いなさい。」

「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか。」

「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています。」

そして主はもう一度こう言われました。

「わたしの羊を養いなさい。」(ヨハネ21:15-17参照)

ペテロは主を3度拒みました。そして今主は3度ペテロに、その愛と忠実さが確かなものかどうか確認されるのです。

やがてキリストにも天父のみもとに昇る時がやって来ます。主は前にこう言っておられました。「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げ[た]。」

(ヨハネ17:4)

復活の後、主は約40日間地上にとどまられました。それは弟子たちが、このよみがえられ、栄光をお受けになった御方についてさらに十分に理解し、神の王国につける事柄について教えを受けるためでした。

こうして主は昇天されるばかりとなりました。使徒たちにはその御方が救い主であることがわかりました。主がもはや墓の中

に横たわったなきがらではなく、栄光を受けたもうた御方であることを証したのです。

主は昇天の地としてオリブ山をお選びになりました。そこはラザロとマリヤとマルタとの間に愛を育み、安らぎを得たバタニヤの近くでした。またオリブ山の近くにはひとり苦難を味わわれたゲツセマネの園がありました。主はこのオリブ山の頂上を昇天の場として選ばれました。そしてその同じ山に、主は悲しみの人としてではなく栄光に輝く勝利の王として立たれるのです。

そのオリブ山で、救い主は使徒たちと主を信じるすべての人にこう指示されました。

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、

あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28:19-20)

私は聖霊の力によって証します。このイエスはキリストであり、神の生ける御子であり、世の罪のために十字架におかかりになった方です。こうあります。「あらゆる不義を潔めたもう。……あらゆるものを彼によりて救わんためなり。」(教義と聖約76:41-42)「主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいただき、そのふところに入れて携えゆ[く]。」(イザヤ40:11)イエスは私たちの贖い主、私たちの主、私たちの王です。

主の王国は再び地上に確立されました。それは末日聖徒イエス・キリスト教会です。この教会は神の導きにより、主の再臨の備えをします。なぜなら主は再びおいでになるからです。主の聖なるみ名により、へりくだって宣言いたします。アーメン。

## 自己改善



第一副管長  
N・エルドン・タナー

➤ の集会を閉じる前に、ぜひ少しお話  
したいと思います。きょうの午後の  
ひととき、大管長（スペンサー・W・キン  
ボール大管長）と同席することができ、非  
常に大きな祝福を感じています。大管長が  
いらっしやらないことで一番寂しい思いを  
していたのは私でしょう。先日大管長に、  
十二使徒評議員会と大管長会の集会に来て  
いただいた時は、一同、大変感謝致しまし  
た。先週の木曜日、教会幹部全員が神殿に  
会した折、キンボール大管長が入って来ら  
れ、愛と感謝を示されました。私たちに  
は、まだ指導を与えて下さるキンボール大管長  
がいらっしやいます。

ここで少しお話したいのですが、私は姉  
妹たちの集会に何度か出席させていただきました。  
み業に邁進される姉妹たちの姿には本当に素晴らしいものがあります。その  
ことを姉妹たちにお伝えしたいと思います。  
どうか主が、み業に携わる姉妹たちを祝福  
されますように。

さて、私たちは大会の間この場に座を占  
め、大変幸せなことに、教会幹部の声を聴

くことができました。証を述べて下さった  
方、予言や祝福について話して下さい、  
この教会の伸展について話して下さい方  
もありました。この素晴らしい方々は皆、  
福音の証を持っています。この方々は、嘘  
を申しません。おろそかにできない真理を、  
みたまによって語ります。皆さんは必ずや  
それを正しいと感じ、同感されたことでし  
ょう。

その言葉を思い起こしながら、天父のみ  
前に帰って祝福にあずかるために、どの弱  
点を取り除くかを考え、決意して下さい。

私はこれまで副管長として、4人の大管  
長のかたわらで働いてきました。この4人  
は皆、全く違う個性の持主でしたが、彼ら  
を通じて行なわれるそのみ業を目のあたり  
にすることができたのは、大きな特権でし  
た。だれでも、なぜ彼らが選ばれたのか理  
解することができるでしょう。予言者たち  
の教えに従って下さい。

どうか、自己を改善し、祝福にふさわし  
くならうという思いを持って家路につか  
れますように。先般、孫に食事の祝福を頼  
みましたが、孫がこう言うのを聞いて、私  
は本当にうれしく思いました。「この大会で学  
んだことを思い出せるよう助けて下さい。  
また、それにふさわしく生活できるように、  
教えを生活の中で応用できるように助けて  
下さい。」

兄弟姉妹の皆さん、主に仕えるために、  
どこを改善したらよいか、主がはっきりと  
お教え下さいますように。先般お話し  
したように、きょうの教えをすぐに実行して  
下さい。

午後の部会に出席できたことを、また、  
大会の進行をつぶさに見ることができたこ  
とを、大変うれしく思います。素晴らしい

大会でした。ふたつの部会に大管長の臨席を賜ったことは、本当に大きな祝福でした。どうか皆さんの上に主の祝福があり、

主のみ旨を行ない、戒めを守ることができますように。へりくだり、イエス・キリストのみ名によってお祈り致します。アーメン。



---

## 主が指揮しておられる

---



大管長  
スペンサー・W・キンボール

**愛**する兄弟姉妹の皆さん、私にとって  
きょうはきわめて意義深い日です。  
私はきょうの日を待ち、望み、信じてきま  
しました。私はこの教会の人々をとても愛して  
います。またこの盆地に住むすべての方々  
が示して下さいた愛に心から感謝していま  
す。そのようなわけで、私は皆さんに対す  
る愛と素晴らしい経験を共にできた喜びを  
お伝えするとともに、私の証を述べたいと  
思います。この業は主のみ業であり、主は  
み業を指揮しておられます。教会は真実で  
す。すべては順調に運んでいます。主の恵  
みが皆さんにありますように。主イエス・  
キリストのみ名により祈ります。アーメン。



## 仕事の価値



管理監督会第二副監督  
J・リチャード・クラーク

**今**世紀、ジェームズ・A・ミッチェナーほど質量共に優れたベストセラーを出した作家もいないでしょう。彼の持つ関心の広さ、優れたものへの飽くことなき探究心に、私は圧倒されます。彼のこのような成功は決して偶然にもたらされたものではありません。また、生まれつきの才能だけでもないようです。彼の成功は、熱心に働く習慣を育むことによってもたらされたものです。

ジェームズ・A・ミッチェナーは未亡人の母によって貧しい中で育てられました。11歳の時から、夏になると1週間の内6日働き、冬の間は新聞配達をしました。そして、14歳の時には、鉛管工として弟子入りをし、夏には一日14時間、冬の間は一日4時間も働きました。ミッチェナーは当時を振り返ってこう述べています。「このような過酷な労働のために仕事がいやになったということはありません。むしろ良識ある人は良識ある目標を達成するために熱心に働くという考えを植えつけてくれました。私は今でもこの考えに従っています。」(“An Authentic Work Ethic : I. The Path to

Achievement”『真の勤労精神：成功への近道』「リーダーズ・ダイジェスト」1977年1月号、p.149)

勤労は神からの祝福であり、霊的にも物質的にも救いを得るための基本原則です。アダムがエデンの園から追い出された時、肉体的な苦勞を味わうことにより、すなわち額に汗することによりパンを得よと命じられました。そして、「地は汝のために<sup>の</sup>傭わる」と言われました。注意して読んでみて下さい。すなわち、これはすべてアダムのため、アダムにとって益とならんためでした。この地を治めるのは容易なことではありません。しかし、それはアダムへのチャレンジであり、祝福でもあったのです。私たちがチャレンジを受けることにより、祝福にあずかるようなものです。

私たちは神と協同の創造者です。神は私たちに神御自身が残された仕事を行ない、エネルギーを活用し、鉱山を開き、地球の宝を役立てる能力を与えて下さいました。そして何よりも大切なことは、人格の核心は厳しい労働を通して形成されることを主が知っておられるということです。

勤労はモルモンのトレードマークです。私たちは勤勉で、労働意欲の高い民として世界中に知れわたっています。

この旺盛な勤労精神こそ、モルモンの伝統であります。モルモンの勤勉さはかつてモルモンが住んだ至る所に刻まれています。ミズーリ、ノーブー、ソルトレーク盆地など聖徒たちが住み着いたあちこちの溪谷にはモルモンの汗の結晶が今もなおその名ごりを留めています。

この末日の時代に、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように述べています。「私たちは借金もせず、供与も受けず、自力で移住した。私たちが家を捨てたのはただひとつ、私たちを家から追い出し、

その後代価も払わずに残した財産を自分のものにしてしまった人々のうらみからである。

私たちは物質の不足、そして悲しみと懸命に闘った。毎日のように艱難辛苦と遭遇した。

それでもなお、教会は存続し、民は栄えた。人格は何ら損なわれることなく受け継がれていった。私たちは貧しい人々の世話をした。そして乏しき時には隣人同士が互いに助け合った。

私たちは何度も燃える炉の中をくぐりぬけてきた。そしてその度に磨かれ、不純なものを燃やし尽くし、自らを清めていったのである。」(Church Welfare Plan「教会福祉計画」1939年, pp. 8—9)

そのような中を、予言者は模範によって人々を導きました。ウィルフォード・ウッドラフ大管長もまた、労働をこよなく愛した人と言われています。「彼にとって、仕事は祝福であり、特権であった。渓谷での苦労や収穫畑での汗はすべて、神の計画の中で重要な部分を占めていたのです。

額に汗して働くことは、祈ることと同じように神の命令です。」(マサイアス・F・カウリー、Wilford Woodruff: History of His Life and Labors「ウィルフォード・ウッドラフ、その生涯と働き」1909年, pp. 644—45)

今日、私はキンボール大管長ほど神聖な労働の律法に従っているよい模範を知りません。キンボール大管長は、自分のモットーである「実行」を自ら実践し、幸福の探求に自らを捧げるだけでなく、目標を達成する喜びに自分を託しているのです。ある時、キンボール大管長の囑託医のウィルキンソン博士が大管長の健康と肉体的な負担を心配して話をしたのですが、その時、キンボール大管長は優しくこう答えました。

「ウィルキンソン兄弟、あなたの仕事は私の体がいつも意のままに動くようにしておくことです。」

この話はある時、体が少しだるいので医者<sup>ドクター</sup>に診てもらいに行った農夫の話の思い出させてくれます。診察の後、医者は、問題は君が働き過ぎることだ、と言いました。そこで農夫は答えました。「そんなことはここに来る前からわかっていました。私が来たのは、もっとエネルギーをもらうためです。」

キンボール大管長が主のみ業に完全なまでに打ち込む姿は、私たちに労働の高い標準を示してくれます。私たちは自分の頭と筋肉と霊のすべてを使って私たちの努力の成果を主と家族と社会に還元する道義的責任があります。この責任から逃避すれば満足のゆかない生活を送ることになるでしょう。それはまた、自己を否定し、その機会と特権を私たちに頼っている人々を無視することです。私たちは生計を立てるために働きます。そのことに疑いの余地はありません。しかし、苦労して働いている時は、そのようにして人生を築いていることを忘れてはなりません。私たちのこれからの生活がどうなるかは労働によって決まるのです。

労働は貴いものです。ほとんどの問題を解決する良い治療薬でもあります。悩みの解毒剤です。才能の足りない分を補うものです。労働は並の人間を天才にします。たとえ素質がなくても、実際の労働によって補うことができるのです。

コーサレンは次のように勧めています。「貧しいなら、働きなさい。……幸わせなら、働きなさい。怠惰は疑いと恐れをもたらすだけである。落胆することがあったなら、働き続けなさい。悲しみに負けてしまいそうになったなら、働きなさい。……信

仰を失い、理性をなくしたなら、働きなさい。夢に破れ、希望を失ったなら、働きなさい。生命の危機に瀕するかの如く働きなさい。まさに、その通り。どのような苦しみがあろうとも、働きなさい。……働くことは、精神的・肉体的な苦しみを癒す最大の治療薬である。」(The Forbes Scrapbook of thoughts on the Business of Life, p. 427)

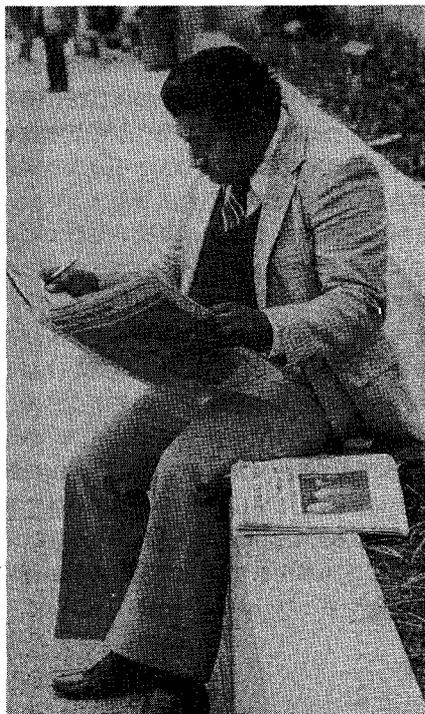
では、仕事の倫理について幾つかの要素を次に挙げてみましょう。

1. 末日聖徒として、私たちが自分の信じていることに忠実でありたいと思うなら、質の高い仕事を行なう必要があります。これは誠実さの問題です。私たちが行なう仕事はすべて、それを造り出す人々の姿を映し出します。私たちは現代社会における労働の質の低下を深く憂慮しています。いつも技術はまやかashiで、製品は標準に達しているかどうかわからないのに、報酬は全額を期待するといった状態をよく見かけます。社会はあまり良くないものでも許容してしまうような風潮ですが、私たちは一段高い理想をもって働かなければなりません。劣悪な仕事をして満足することは、モルモンのかえりではありません。この失業の時にこそ、私たちの宗教の持つ労働の原則を実践する末日聖徒が特に求められています。

2. 私たちはまた、自分が経営者であるかのように、仕事に対して完全に、正直な働きをするようにしなければなりません。実際的な面から言っても、給与を払うのがだれであろうと仕事を行なっているのは私たち一人一人です。雇用主に対して正直でありなさい。「働く者はその値を得るに適わし」(教義と聖約84:79)というようにならなければなりません。雇用主に対して私たちが提供するものは、まあまあのものや通常の標準に合っているものではなく、私た

ちが持っている最高のものでなければなりません。私たちは皆、自分の能力を基とした個人の標準を定めておく必要があります。昔の開拓者のモットーに次のような言葉があります。「一日分の給与を得るには一日分の仕事を。」

3. 自己啓発に投資を。絶えず勉強することによって、自分の仕事の技術を最高の状態にまで高めるように努力して下さい。自分の空いている時間を賢明に使って下さい。もし毎日13分間無駄な時間を過ごしたとすれば、1年間で2週間も時間を浪費したことになります。現在の仕事を自分の生涯の仕事の踏み石として見て下さい。時間をとって十分に考えてみることです。ほとんどの仕事について言えることですが、労働者の考えが非生産的なためにその仕事の本来の領域が次第に狭められています。あるビジネスマンが次のような助言を述べています。私の好きな言葉のひとつです。「ま



ず成功を取めて、それからさらに難しいことにチャレンジしてみることですね。」

4. 子供に労働について教えることは、両親の大切な義務です。今の子供は、親の懸命な努力によって他に類を見ないほどの繁栄を享受しています。親たちは、自分が子供の頃に得られなかったことを自分の子供にはぜひ与えたいと頑張ったのです。しかし、物心両面にわたって子供たちを救うためには、子供たちに働くことを教えなければなりません。仕事は苦痛ではなく、祝福であることを模範によって知る必要があります。

男女を問わず、若い頃に働く習慣を身につけることのできた人は幸運な人です。賢明な親は子供たちに責任について教え、また、その責任を果たす時でも、一定の標準に達することを要求します。

ある美しい末日聖徒の母ビバリー・グレアムは、母の日を祝う話の中で、家庭で受けた教育に感謝して次のように述べていました。

「母はいつも厳しいしつけと規則、約束によってその愛を示してくれました。そして約束したことは必ず守るよう私たちに教えました。このことが、私たちの人格形成の基盤となったようです。

母は女性であること、母親であることをこよなく愛していましたし、ホームメイキングの技術を楽しんでいました。そして、その技術を私や姉たちに教えてくれました。裁縫、料理、家の掃除、アイロンかけなどいつも大変な忍耐を持って教えてくれました。お父さんのワイシャツにアイロンをかけること、それが祝福ですって？ 学校に行く前にせんとくをし、アイロンをかけてきれいにすること、それが祝福ですって？ またてんさいの皮をむき、何時間もかかって豆のさやをとり、かんずめ用にとうもろこ

しの皮をむき、日がのぼって暑くなる前にいちごをつみ取ってしまうこと、それが祝福ですって？ 当時はとても信じられませんでしたが。でも今は信じることができます。そうした仕事をしながら、私は、儉約と仕事と義務の価値を知ったのです。」

子供たちにこれらの価値について教える時の分担原則を強調して下さい。仕事を、これは男性の仕事、これは女性の仕事と区別し過ぎることのないようにして下さい。一般的に言って、子供は男の子であれ、女の子であれ皆、簡単な料理、皿洗い、家の掃除、芝刈り、赤ん坊の世話などを知っておく必要があります。このような技術は彼らが成人した時その生活をより楽しく、生産的なものにしてくれるに違いありません。

それでは、余暇はどのように過ごせばよいでしょうか。余暇をどう過ごすかということは、職業面での向上と同じように私たちが幸福な生活を送る上で欠くことのできないものです。余暇を正しく活用するためには、分別ある判断が求められます。余暇は私たちに心身を再成する機会を与えてくれます。余暇はまた礼拝の時であり、奉仕をし、勉強をし、健全なレクリエーションに精を出す時であり、また家族と交わる時でもあります。そして、私たちの人生に調和をもたらしてくれます。

余暇は怠惰とは違います。主は怠惰であることを非難して次のように言われました。「汝らは時を空しく過すことなかれ。また、人々に知られざらんがために汝らの才能をかくすべからず。」(教義と聖約60:13) 怠惰はいかなる形にしろ退屈、争い、不幸を生じるしかありません。それは悪と弊害の温床を作り、個人の尊厳を喪失させます。怠惰はまさに進歩と救いの敵なのです。

労働は主の福祉計画の中で欠くことのできない要因となっています。しかし、その

労働は単なる労働ではありません。愛によって清められた会員たちの働きは、多くの物資を生産し、それによって貧しい人々の物質的な必要を満たすのです。仕事に精出した人はその無私の奉仕によって清められ、祝福を受けます。困っている教会員は愛と感謝の精神で援助を受けます。それが教会員の汗と犠牲によって作られたものであることを知っているからです。しかも援助を受けた会員は、監督の割り当てにより、自分の能力の範囲内で受けた分を労働によって返済します。こうして受ける尊厳も保たれるのです。

主の計画の中で最も大切なのは個人です。いかなる組織であれ、独創性、自立、受けたものを働いて返すことの必要性を求めない組織は、やがてその本来の姿を失っていくでしょう。教会の福祉計画の基本は施しを避けることです。施しは福祉計画を枯渇させるものであり、人体をむしばむガンのような恐るべき敵です。

ブリガム・ヤングはこう宣言しています。「男女を問わず、健康な体を持ち、自分の必要なものを働いて得ることができる人に対してお金や食物、衣服などをただ与えていたのでは何の益にもならない。怠け者に与えることは悪以外の何ものでもない。いかなるものも怠け者に与えてはならないのである。

「貧しい者には働かせなさい。」(Discourses of Brigham Young「ブリガム・ヤング説教集」pp.274—75)

クラーク副管長はこう述べています。

「兄弟の皆さん、……消費する者が同時に生産する者となるよう配慮して下さい。生活の糧を贈物としてもらうという考えに埋没してしまうことは、人格と独創性の破壊をもたらします。これはひとつの原則です。」(福祉部会における説教より、1960年4月、

p. 3)

働くことは、また広い意味で、幸福と繁栄と救いを達成することです。労働と責任と喜びが調和した時、人間は最大の力を発揮します。インドの詩人タゴールはこう記しています。

われ 眠りて夢を見る

人生に喜びありと。

われ 目を覚まし、そして見る

人生に義務ありと。

われ 行動を起こし、そして見る

義務はすなわち喜びなりと。

(アール・ナインチンゲールの“*Our Changing World*”『激変する世界』への引用から)

労働は時の初めより、神の子供たちがこの地上における管理の職を全うする手段として与えられたものです。労働は神から与えられた遺産です。ステイーブン・L・リチャーズ長老は次のように教えています。「信仰をもって働くことは、私たちの宗教の教えと将来の状態、すなわち天における基本概念である。そしてそれは絶えざる労働を通して得られる永遠の進歩という形となって現われてくるのである。」(Conference Report「大会報告」1939年10月、pp.65, 68)

この末日の世の人々に対して主はこう語っておられます。

「見よ、われ汝らに告ぐ、汝ら出で行き、ひまどることもなく怠ることもなくして、全力を尽して働くはわが意なり。……

かくて汝ら忠実ならば、多くの策を背に加えられ、名誉と栄光と、不死不滅と、永遠の生命との冠を受けん。」(教義と聖約 75: 3, 5)

これらのことを、主イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

# 「その子らは立ち上がって彼女を祝し」



中央扶助協会会長  
バーバラ・B・スミス

**箴**言の中で、レムエル王は母から教えられたことを語っています。母の教えに強い感銘を受けた王は、そのことを細かく記しました。母は息子に、妻であり自分の子供の母親である女性に求める特質と心構えについて述べ、ひとつのことを強調しています。それは、もし家の中のことがよく管理されていれば、やがて子供たちは立ち上がって、母を祝するようになるということです。(箴言31：28参照)

女性の前に次から次へと興味をそそる生き方を投げかけ、その機会を与えようとしている今の世の中にあっては、このような教えが何とも心強く感じられます。私たちはふりかかってくる事柄だけでなく、自分の家族にとって必要なこと、つきつめれば子供に母親として与え得る永遠の祝福をこの世にあって味わわせているか、もっと真剣に考えてみるべきではないでしょうか。

この先、母親一人一人が、子供にどのような祝福を与えることができるかを、自分なりに考えなければならなくなるでしょう。祝福を与える方法は数限りなくありますか

ら、よく考えた上で決めることが大切です。

子供と家にいる母親にとっては、この選択はきわめて重大な意味を持ってきます。そのような母親には、正しい道を示してくれる確かなより所が必要です。聖典、教会の指導者の言葉、祈りを通して得る確信がそれです。エペソ書では、「様々な教の風」(4：14)について警告されていますが、この風がどこよりも強く吹き荒れているのは、おそらく現代の女性が直面しているチャレンジや決定の中だと言えるでしょう。

暗やみに輝くともしびである確かな予言の言葉に目を留めないなら(IIペテロ1：19参照)、私たちはいつも簡単に「様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりする」(エペソ4：14)ことでしょう。

このことを心に留めていれば、女性是自己にとって何が正しいことかをよく知り、自信を持って歩むことができるのです。ただし、ひとつのことがすべての人に当てはまるわけではありません。それぞれ、その人なりの解決法があるはずで

理想的な家庭の姿とは、いつものことながら、母親が家にいて、子供のそばにいて、子供の面倒をみることに、子供の成長を助けること、家族の活動を協力、統制して行なうこと、誤った教えの侵入を食い止めること、そんな母親がいる家です。しかし、家計を助けるために、母親が外に出て働くという状況になることもあります。エズラ・タフト・ベンソン会長はこう述べています。「心ずしも理想的とは言えない状況下に置かれている人がかなりいることを知っています。……やむを得ない事情があって、子供を人に預けて働きに出なければならぬ母親……」(「聖徒の道」1982年4月号, p.178)

きょうお話したいのは、このような状況にある母親の皆さんに対してです。私たちは扶助協会の指導者の方々に、このような母親の皆さんに対しても扶助協会の中で働く機会を与えると共に、彼女たちの必要に応じたプログラムやレッスンを考えていただきたいのです。また、ご主人やホームティーチャー、訪問教師は、このような母親に励ましを与えることに加えて、母親の本来の役割を強調していただきたいと思います。と申しますのも、母親はたとえ働く責任が加わったとしても、子供の必要を満たしてあげるという母親の責任が取り除かれることはないのですから。外に出て働かなければならない母親でも、子供の肉体的必要はもとより、他の様々な面に対して負っている責任を決して回避することはできないのです。

小さい子供を抱えて外に仕事を持っている母親が直面するチャレンジは数多くあります。まず、子供を預かってくれる人を見つけなければなりません。次に、相手の事故や病気といった緊急時にどうするかを決めておかなければなりません。そのような緊急時には、理解ある雇い主や親戚、隣人、学校の先生、そのほかいざという時に助けてくれる人の力に頼らなければならなくなるでしょう。

仕事を持っている母親のほとんどが、時間の使い方を工夫し、前もって計画を立て、買い物をし、予定を組み、家族で仕事を分担して、時間を上手に使うことを考えているようです。また、たとえできあいの食品や料理サービスなど、働く母親にとって便利なものはあっても、栄養豊かな食事を作り、家族で食卓を囲むだんらんのひとつきを大事にすることも、彼女たちは忘れてい

ません。

しかし、私たちが感じているのは、多くの働く母親にとって本当のチャレンジは、疑問や悩み、それに決定すべきことの多い年頃にある子供たちをどう導くかということです。子供の表に現われなければならない必要を感じ取るのは難しいことです。それに未熟なために、自分でもその必要に気づいていないのです。母親は、子供の欲求が最も強い時にいつもそれに応えてあげられるわけではありません。それでも、働く母親の多くが努めて子供と一緒にいる時間を作り出しているようです。子供と一緒に家事をしたり、できる時には一緒に買い物をしたり、計画を立てたり、遊んだりしています。また時時、枕を並べて寝、自分には愛してくれる人がそばにいるという気持ちの子供に感じさせるようにしている母親もいます。

働いている母親はとかく、いわゆる「心のふれあい」の時として、子供と一緒に特別な「お出かけ」をしたり、遊びに行ったりすることを考えがちです。しかし、お気づきのことと思いますが、これは危険な考え方です。子供との時間をレクリエーションばかりに充てることによって、子供にゆがんだ生活のイメージを持たせてしまいます。働くことと遊ぶことのバランスを教えることが大切です。日常の仕事がきちんとでき、分担が完全に果たせた時こそ、「お出かけ」といった、特別な出来事に意味があることを、子供にわからせる必要があるでしょう。

このことを孫にわからせようとした祖母がいました。孫がやって来ると、そのおばあさんは、子供でもできる仕事を捜して一緒に働きました。その後で、ゲームをするのです。それからまた仕事をして、ゲーム

をするという具合にしました。おかげで子供はおばあさんが望んでいたように、働くことと遊ぶことの関係、働いた後で遊ぶ快さを感じ取ってくれたのです。

学校の勉強、音楽の才能やその他の才能を磨く訓練も日課に含まれます。成功の意味を知ろうとしている母親は、子供と一緒に努力することによって、また必要があれば才能を最高のところまで高めることによって、成功の価値というものを子供に教えることができるでしょう。母親の考え次第で、子供の才能をどのようにも磨くことができるのです。また母親は、子供が練習する時に、出来具合や正確さなどを見てあげることによって子供を助けることができます。子供の地道な努力が報われるように助けてあげていただきたいのです。

仕事を持っている母親は四六時中観察することは無理ですが、家にいる時には子供をよく見て、日常の働きを通して訓練されることを子供に教えると共に、よい働きをほめて、喜びを味わうことができるようにしてあげて下さい。

母親は、人生の大切な目標を心に留めておく必要があります。著作家であり、科学者、教授であるレオ・ロステンは、目標について次のように述べています。

「この世の人生がいともたやすく、対立や不安などとはかけ離れたもの、心痛や悩みや苦しみのないものなどと、どこに約束されているだろうか……

人生の目的は、人生に何らかの意義を見いだすことであり、造り出すことであり、あらゆる面でこれまでの自分とは違う自分を造りあげることであり、幸福とは、古くから自己達成と考えられてきた。すなわち幸福は、神が与えたもうた……すべての才

能を最大限に発揮する人々にもたらされるのである。

私にとって幸福は最大限に進歩することの中にあり、それは心と精神のより所となる。」(This Week Magazine, 「ズイス・ウィーク・マガジン」1963年1月20日, p.2)

自分の子供が何を必要としているのかに心を配ろうとするなら、人生の大切な目的を心に留め、主を知り、主の愛と導きを感じ取るようにしなければなりません。そうする時、母親は、子供が主を知り、天父の愛を感じながら成長できるよう助けることができるのです。

このことを悟ったある女性が次のように書いてきました。

「離婚直後、私は子供にすべてにおいて最高のものを与えようと心に決めました。……子供のために良いものを与えよう……あらゆる面で父親の代わりをしようと思われました。私は子供をピクニックに連れて行ったり、木の上に家を作って遊んだり、一緒に野球をしたりしました。離婚したことで、子供に悲しい思いをさせたくなかったのです。

料理や裁縫から、走ったり遊んだり、取っ組み合いまでしました。そして掃除にアイロンかけと、母親と父親の両方をこなそうと忙しい毎日でした。

ある晩、片づけを終えてから、私は3人の子をお風呂に入れました。まず一番下の子を洗い、きれいな湯をかけてからバスマットの上に立たせ、タオルにくるんで、寝室に連れて行き、パジャマを着せて、ベッドに寝かせました。これが済むとまた浴室に戻り、同じことを全員の子にします。一番上の息子を寝かせ、お休みのキスをする時、息子が『お願い、歌をうたって』と言います。

『何の歌?』と聞くと、『ロドルフの歌』と下の子が声を上げました。

『違う、「ジョニー・アップルシード」だよ』と声がありました。

すると今度は娘が、『目をさましてて』を歌って』と言います。

『歌ひとつ歌うのに1時間もかかってしまうわ。そんな時間ないのよ。お休みなさい。』そう言って私は明かりを消しました。

『ママ、お願いだから。ひとつでいいから歌って。ママが決めていいから。』

『お祈りはどうするの?』

私は心を決めてこう答えました。『お母さんはお休みなさいを言ったのよ。だからもう寝なさい。』

後片づけのために浴室に向かいながら、私はこう思いました。子供たちが大きくな

って、私がいろいろなことをしてあげたことがわかるようになれば、きっと感謝してくれると思うわ。

浴室に入ろうとして、私は思わず足を止めました。バスマットの上に3人の足跡がきれいに残っているのです。一瞬、私はこの足跡にやっと寝かしつけてきた3人の尊い子供の霊が立っているのを見た気がしました。そして自分の愚かさをつくづく感じたのです。子供たちの肉体の必要を満たすことに大わらわだった私は、霊の必要をおろそかにしていたのです。その時、私にはその双方を養い育てる神聖な責任があるのだ、とわかりました。たとえ子供たちに流行の服を着せ、お金で買えるすべての物を与えたとしても、彼らの霊の必要を満たそうとしなければ、母親としての尊い責



任を正しく果たしたことになるので  
す。

私は謙虚な気持ちになり、子供部屋に戻りました。そして一緒にひざまずいて祈りました。親子4人が男の子の大きなベッドに入り、次から次へと歌を歌い、気がついてみると、私だけが歌っていて、子供たちはみんな寝入っていました。」

末日聖徒の母親は、扶助協会の中に、子供の必要を満たす際に役立ついろいろなプログラムを見つけることができます。それは子供の健康や安全、食生活や衣服、社会的、情緒的必要から、霊的必要、永遠にわたる家族関係のあり方まで、広範囲にわたっています。

このように、片親であるがゆえになみなみならぬ努力を払ってきた母親の証は数多くあります。主はこのような母親を特に心にかけて下さり、厳しいチャレンジの中にあってもその務めを上手に果たしていくことができるようにして下さい、私たちは確信しています。しかし、そのような母親として、主の原則と目的に照らして決定を下し、望んだことが本当に実現することを信じる信仰を持たなければなりません。

主の助けをいただく時に、家族は力を与えられ、なすべきことを行なえるようになります。つまり、掲げた目標を達成するために、持っている技術を駆使し、節約をして共に働くことです。まだ小さい子供たちも、家族がよりよい方向へと歩めるよう、すぐにでも親と一緒に働いてくれるようになるでしょう。

男性も女性も、すべて神の創造されたものであり、神のようになれる素質を持っています。私たちは神の子なのです。私たちが神の属性を具えることができるように、神

は教えと計画と模範を与えて下さいました。

主の方法を使って子供を教える時に、私たちは主のようになることができます。子供と常に意志の疎通を図る、子供の話をよく聞く、導き励ます、いつも見守る、子供の身を守っても子供を操ってはならない、経験によって学ばせる、従順になれるような方法で子供を正す（親の意志ではなく、子供に正しいことをして知恵を得てもらいたいという願いから行なう）、これらはみな主の方法です。

私たちは、確かな真理を与えてくれる神の原則にのっとり歩む時に、自分の人生の計画ができますし、可能な限り自分の行く末を見通すことができるのです。

私たちは努力次第で義の模範となることができます。子供たちはその模範にならって行なうことにより、人生の何たるかを学んでいくのです。

母親が常に喜びを示していれば、子供の世界も喜びに満たされます。また、母親が賢い選択をすれば、子供に識別の仕方を教えていることになります。そればかりか、健康な進歩をもたらす大切な要素である清めを与えることにもなります。主から主の純粋な愛を学ぶことによって、母親は己を捨てた愛の心を養うことができ、それで家庭を潤し、同時に愛の示し方を子供に教えることができるわけです。聖典の中でも言われています。「その身体<sup>からだ</sup>の力と全身全霊の能力<sup>能力</sup>をつくして努力をしたによって」私たちは生活に安らぎを見いだすことができ、さらに「子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教え」することができるのです。（モルモン言18節；教義と聖約68：28）

母親には、子供を世に送り出す特別な機

会がありますが、同時に、この世にあって子供に幸福と成功をもたらす、永遠の備えをさせる大切な役割もあるのです。

今日の経済状態は、母親とその家族と密接にかかわり、広く影響を及ぼして、数々の問題を引き起こしています。母親が、母親にしか満たすことのできない必要を心に留め、キリストのような特質をみがく上で母親の果たさなければならない役割に目覚める時にこそ、先のような問題の解決の糸口を見つけることができるのです。そして、みたまに近く生活する時に、その方法は一層はつきりと彼女の前に示されることでしょう。妻には家庭の経済を援助する責任がありますが、これについて、私たちはよい指示をいただいています。キンボール大管長の言葉に耳を傾けてみましょう。

「女性の中には、自分の力ではどうにもならない状況に置かれているがために、労働に従事しなければならない人もいます。私たちにはその方のことが理解できます。子供を育てるのと同じように、神から授かった様々な才能を、広く人々のために活用することができます。しかし、天父の霊の子供たちをもうけ、養育するという女性に託された永遠の責任をなおざりにさせるような仕事に心を引かれるという過ちは犯さないで下さい。心からの祈りをもってすべての決定を下すようお願いします。」(「聖徒の道」1980年3月号, p. 142)

テンブル・ベイリーの稿本、「母親のための寓話」(A Little Parable for Mothers)の中で、人生の小道を歩き始めた若い母親がこう言っています。「この道は楽な道ではないけれど、終わりは始めより素晴らしいはず。」彼女は子供に、人生の素晴らしさを教え、勇気と力を与えました。そして最後



に彼女は、人生に暗い影を落とす雲が現われたら、その雲のはるか上を見上げ、神の栄光を仰ぎ見るようにと教えたのです。暗闇の向こうに神を見いだす方法を知り、神の栄光によって生きる方法を心得ていたので、子供はひとりで歩くことができました。その母親の人生の旅は終わりを告げましたが、終わりは始めよりも素晴らしいものでした。それは、彼女が子供に何を教えることができたかによって決まるのです。(教会歴史部蔵)

結局、家庭を第一にし、一人一人の子供に自分は母から愛され、天父から愛されていると感じさせ、生活を通して証する福音が真実であると悟らせる偉大な母である皆さん、皆さんの子供はやがて、「立て、〔あなた〕を祝」すことでしょう。(箴言 31:28) これらを、イエス・キリストのみ名より証致します。アーメン。

# 1980年代の雇用に関するチャレンジ



七十人第一定員会会長  
J・トーマス・ファイアンス

**行** き詰まった経済情勢を報ずる記事が新聞、雑誌をにぎわしていますが、ここで、これまで教会員に与えられてきた勧告を再考してみるのには時宜にかなったことだと思います。その勧告の中には、1年分の食糧の貯蔵、負債を避けること、職業面での備えなどが含まれています。この勧告に従っていたために、失業しても物質的に救済されたという例はこれまでに数多くあります。

主は私たちに、必要な物は自力で供給し、自立した生活を営むように命じられました。次のように記されています。

「見よ、こはわれ<sup>われ</sup>汝ら<sup>汝ら</sup>を備うる準備と、わが与うる<sup>与</sup>礎と範例<sup>範例</sup>とにしてこれによりて汝らに与えらる<sup>与</sup>誠命<sup>誠命</sup>を成就すべし。

これ、汝らに如何なる<sup>如何なる</sup>艱難<sup>艱難</sup>下るといへども、わが摂理によりて日の榮<sup>榮</sup>の世界の下に在る他の一切の生くる者の上にわが教会員の自立せんがためにして……。」(教義と聖約78:13-14)

「日の榮の世界の下に在る他の一切の生くる者の上に」自立するにはどうしたらよいのでしょうか。1946年に、アルバート・

E・ボーエン長老がこの聖句に関して次のように言っていますが、その内容は私たちがかねて承知の、理に適ったものでした。

「教会が自立する唯一の道は、教会員が自立することです。なぜなら、教会は教会員によって成り立っているからです。他の力にもたれかかった依存状態から抜け出せずにいる教会員、そのような教会員によって構成されている教会を自立した教会と唱えることはとてもできません。主は御自身の民に、それが外的な要因によるものであれ、自分の心の中から発する問題であれ、抑圧された状態を抜け出すように望んでおられるに違いありません。どのような人または民であろうとも、日々の暮らしの糧を施し物に頼っていないながら、何の束縛も感ぜずにものを考え、決心し、行動に移していけるはずがありません。そんな例は歴史のどの頁を見ても載っていないと思います。その故に教会は、肉体的また精神的にその能力を持つ教会員に対しては受けた援助に対し、自分の力に応じた働きをしてそれを返すようにと言っているのです。また、働く力のある人をいつまでも他に依存した状態に置いたままにする制度をよしともしません。それとは逆に、与えることの真の目的は、人々が自立できる地点まで到達し、束縛を免れるようにすることであるという主張の上に立っているのです。

今までは考えてもみなかったことだとは思いますが、福祉の基本原則をこの問題に当てはめようとしなないのは、ただで得られる利得をなかなか捨て切れないという人間として当然の情に因を発していることは明らかです。その利得は、表面的にはただで手に入れたかのように見えますが、それは妄想です。値なしに何かを手に入れるというのは絶対にあり得ないことなのです。受ける側は必ず何らかの形でそれを支払っ

ています。お金で支払わないとしても、かけがえのない大切な権利や自由を代償にしているのです。」(アルバート・E・ボーエン, *Church Welfare Plan*「教会福祉計画」p. 77)

教会は、個々の教会員の自立心を総合したものの以上に自立することはできません。私たちは、教会の福祉プログラムによる援助の真の目的を誤解して誤った安心感に浸ってしまい、自立した生活への努力を怠ってしまうことのないように願っています。教会が肉体的に健康な教会員を扶養するだけの富を集めることは、とても不可能です。原則にかなったことでもありません。福祉プログラムの全活動は、人々が自立できるように助けることに、その目的を置いています。もちろん、自活する力のない人々についてはこの限りではありません。このプログラムは、肉体的に健康な人々が嵐を避けて一時的に停泊する港とはなりません。いつまでもそこに住むための家として定められたものではありません。教会の福祉プログラムは、教会が自立するためにあるわけではありません。教会員を自立させるためにあるのです。教会がひとつの組織として自立するためには、個々の会員の経済力を2倍したものがどうしても必要になります。しかし、それは実際的でないばかりか、不可能であり、賢明なことでもありません。私たちは、国家の福祉制度に頼るのは決してかんばしいことではないと教えられてきましたが、それは教会に依存することについても言えます。この原則は自由意志そのものと同じく、極めて重要なものです。

自立した生活を営むためには、仕事に就かなければなりません。今日のような経済情勢では職を見つけるのはなま易しいことではありません。例をあげてみましょう。

合衆国において昨年1年間に新しく建築された住宅は百十万戸ですが、これは1946年以来最低の数字です。今年度のここ何カ月かを振り返ってみても、事態はさらに深刻化する兆候を示しています。住宅資金の貸付金利は1977年の9パーセントから上昇を続け、最近では17パーセントを越えています。

昨年度の自動車の販売台数も過去20年の最低です。自動車業界の減収額は莫大なものです。鉄鋼など自動車関連業界にも景気悪化の波が押し寄せつつあります。

このような情勢に伴って失業者数が急激に増加しています。失業率は間もなく9パーセントに達するばかりの勢いです。多くの経済学者は、失業率の大幅な低下はとても望めず、さらに高くなるという予測をしています。9パーセントというこの数字は、950万のアメリカ人が失業していることを示しています。

この失業問題はアメリカだけに限ったことではありません。カナダでは8.6パーセント、フランスは9パーセントです。南アメリカなど他の地域においても、非常に多くの人々が失業状態にあります。

しかし予言者の教えに聞き従ってきた教会員は、この経済的に混乱した時代にあっても、ショックを受けることはないはずで、与えられた勧告に従っていれば、それに打ち負かされてしまうようなことはないはずで、聖典には、これと同じような、またこれよりももっと悪い時代が来ることが書かれています。そして同時に、次のようにささやく声も記されているのです。「静まれ、黙れ」(マルコ4:39)「もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38:30)「これ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのもなり」(教義と聖約122:7)

ですから、私たちはこの経済的な試練の時にあっても、回復された福音が与えられていることを喜ぼうではありませんか。福音は、私たちが人生の中で直面する様々な問題に見通しを与えてくれます。困難な時代を自己を顧みるきっかけとするのです。そうするなら、霊性を高めることができます。私たちは、恵まれない状態にある周囲の人々にもっと気を配り、助け合いながらこの難しい時代を生きていく必要があります。私たちはひとつの民として、この困難に立ち向かい、それによって成長していかなければなりません。希望をもって歩みを進め、消極的な悲観論の中にある陰うつな影響力のとりこにならないようにしなければなりません。

残りの時間を使って、現代の数々の問題に立ち向かう上で大きな力となるひとつのプログラムについて話したいと思います。そのプログラムとは教会の雇用制度です。これは決して新しいプログラムではありませんが、本当に必要にならないとよく理解されることがないのです。

詳細を記した「教会雇用制度ガイドブック」が神権指導者に配布されるようになります。また、教会の各レベルの評議会においても、その説明がなされます。教会雇用制度の目的は(1)会員や地域社会の中から雇用情報を収集し、また速やかに伝達することによって、個々人が有利な就職先を見つける助けをすること、(2)また、安定した職場や社会復帰を必要としている人々にカウンセリングをし、そのような雇用機会を与え、(3)神権定員会と扶助協会を通して、両親が子供に職業面での人生計画について教えるのを助けることです。

この活動の調整を援助するために、ワード部/ステーキ部雇用スペシャリストが召されます。雇用スペシャリストの召しは慎

重に行なう必要があります。監督の任にある方々は、直接、間接のいかに問わず、失業に関連した問題で、自分がどれほどの時間と労力を投じているかをよく御存じのはずです。雇用スペシャリストの援助は、そういった問題の幾つかを解決することを目的として、受けるようにして下さい。近い内に、私たちは各ワード部、ステーキ部に有能な雇用スペシャリストを召すように要請したいと考えています。

雇用センターについてお話したいと思います。これは地元の神権指導者からの要請があり、代表役員と中央福祉活動委員会の認可が得られた場合に設立されるものです。目的は(1)雇用機会の調整、(2)ワード部レベルで就職させることのできない求職者を就職させること、(3)神権指導者から要請があった場合、ステーキ部、ワード部の雇用スペシャリストを訓練すること、(4)企業への雇用依頼の調整などにあります。

この雇用プログラムの成否は全員一人一人にかかっていることを強調する必要があります。合衆国内の調査によると、全雇用機会の80パーセントは、中に人を介したものであり、残りが職業安定所、新聞などの広告媒体によるものだということです。もし教会員の10パーセントが失業していたら、残り90パーセントは就職している計算になります。求人雇用情報に最初に接するのは、現在職を得ている教会員です。そのような人々に強くお願いしたいのは、同じワード部で失業している会員のために、就職の機会がないかどうか、注意を払っていただきたいということです。雇用情勢が悪化している時代には、神権者の参画が絶対不可欠のものとなります。

自分の力を過小評価しないようにしましょう。雇用センターの管理者たちは企業家と話してみても、一般に教会員は従業員とし

てよい評価を受けていることを知らされたと  
言っています。実際教会の教えに忠実な  
教会員は、模範的な従業員として働いて  
います。雇用機会が非常に少ない時代には、  
雇用者側の採用標準も厳しいものとなりま  
す。私たちは、この困難な時にあって、教  
会員こそ限られた就職の機会に最もふさわ  
しい候補者であると考えています。

私たちは定員会の会員に、失業した人々  
を援助し、彼らが就職に必要な技能を身に  
つける助けをするように勧告します。現在  
失業中の人の中には、初めて失業を経験し  
たというケースがかなりあります。そうい  
う人々には、履歴書の書き方、面接試験の  
上手な受け方などの点で、さらに助けを  
与える必要があるかも知れません。定員会  
は、その人が就職を申し込む際にしかるべ



き技術を身につけておけるように、いろい  
ろな援助をすることができます。不完全就  
業の問題も、定員会や雇用スペシャリスト  
から多くの援助を引き出すことができる分  
野です。不完全就業とは、就職はしている  
がいつ失業するかわからない、また収入が  
あまりにも少ないという状態です。こうし  
た状況にある人がかなりいます。このプロ  
グラムが、会員がよりよい条件で働けるよ  
うにするというもうひとつの目的を掲げて  
いる理由はそこにあります。

私たちは監督に、失業した人や援助を受  
けている人のために一時的な就労の機会を  
調整する際、ワード部雇用スペシャリスト  
を活用するように勧めます。一時的な失業  
期間中に受ける援助に対してもそれに見合  
った労働の機会を与えるという点で、私た  
ちにできることはまだまだ多くあります。

このプログラムは大抵の国で実施でき  
ると思います。ただし、言うまでもないこと  
ですが、プログラムの実施が法に抵触する  
国家においては実施すべきではありません。  
今日の経済情勢や自立という目標を考えた  
場合、この雇用プログラムは多くのものを  
もたらしてくれるように感じられます。失  
業のため霊的に落ち込んでいく人を、手を  
こまねいて見ていることはできません。苦  
しみを和らげるだけでなく、その原因とな  
るものを防ぎ、除くことが大切です。多く  
の人が才能、時間、助けを惜しみなく提供  
してくれるなら進歩は可能です。教会雇用  
制度に従うならば、仕事を持っている90パ  
ーセントの会員が、失業中の残り10パーセ  
ントの会員を助けることになります。

「わたしがあなたがたを愛したように、  
あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハ  
ネ13:34)という救い主の戒めに応える決  
心ができるよう、イエス・キリストのみ名  
によって祈るものです。アーメン。

# 福音一職業の 基盤となるもの



十二使徒定員会会員  
ボイド・K・パッカー

**啓** 示の中に繰り返し出てくるテーマに、学問を求めるということがあります。昔から教会の指導者は、将来の職業に備えて、あるいは仕事面での向上を図るために、機会をできる限り多くとらえて教育を受けるように勧告してきました。例えば、次のように記されています。

「汝ら努めて求め、互いに智慧ある言葉を教うべし。然り、汝ら最も善き善より智慧ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88 : 118 ; 90 : 15 ; 109 : 7も参照)

学問には、信仰が伴うべきです。そうすればモルモン経が教えているように、「学問のあるのも善いこと」(IIニーファイ9 : 29)になります。

これらのことの重要性を理解していただくために、仕事や職業について話を始める前に、頭に入れておいていただきたいことがひとつあります。

それは、いかに生活状態が質素だからといって、自分自身を含め、決して人を軽視してはならないということです。賃金の低い労働者だからといって、その人をさげす

むようなことがあってはなりません。正直な仕事は、それがどのようなものであろうと、貴重で尊いものなのです。世の中の進歩発展に寄与している労働に対して、あるいはその世の中で生活を営んでいる人々に対して、「卑しい」などという言葉を使ってはなりません。

道徳的に正しい仕事であれば、何ら恥じることはありません。それに、主が学問と関連づけておられる信仰の原則は、人間の科学技術よりもはるかに貴重なものなのです。

わずかな財産と低収入のために生活に苦しむ人々の中には、貧しい生活を通して、次の聖句の本当の意味を悟る人がたくさんいることでしょう。「あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければなりません。」(マタイ23 : 11 ; 教義と聖約50 : 26参照)

一般には学校教育即教育と考えられていますが、学校の授業では教えてくれない知識もあります。

例をあげてみましょう。初めに旧約聖書に記されたナアマンの記録です。スリヤ王の軍勢の長ナアマンは、スリヤに勝利をもたらした人物ですが、らい病にかかっていました。王は彼の身を案じていました。

ところがナアマンの妻に仕える奴隷の中にイスラエルの少女がいて、イスラエルにはその病気を癒す力を持った予言者がいると告げました。

スリヤ王はさっそくイスラエルの王に手紙を書きました。「この手紙があなたにとどいたならば、わたしの家来ナアマンを、あなたにつかわしたことと御承知ください。あなたに彼のらい病をいやしていただくためです。」これを読んだイスラエルの王は、策略だと思い込んで言いました。「わたしは殺したり、生かしたりすることのできる

神であろうか。どうしてこの人は、らい病人をわたしにつかわして、それをいやせと言うのか。あなたがたは、彼がわたしに争いをしかけているのを知って警戒するがよい。」

予言者エリシャは、王がひどく悩んでいることを聞き、王に人をつかわして言いました。「彼を私のもとにこさせなさい。」エリシャはナアマンを癒すことを約束し、そうする理由を告げました。「そうすれば、彼はイスラエルに預言者のあることを知るようになるでしょう。」

やがてナアマンがやって来ると、エリシャは使者をつかわして言いました。「あなたはヨルダンへ行って七たび身を洗いなさい。そうすれば、……清くなるでしょう。」ナアマンは怒りました。シリヤにはヨルダンにまさる川がたくさんあると思ったからです。彼が期待していたのは、エリシャが自分の前で手をたたくというような何か厳粛な儀式を行なうことでした。ナアマンは怒って立ち去りました。

しかしその時、ひとりのしもべが（いつもしもべが出てくるようですが）勇敢にも主人をいさめて言いました。「預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じて、あなたはそれをなさらなかったでしょうか。」

しもべの言葉を聞いて謙遜になったナアマンは、「下って行って、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、……清くなった」のです。（列王下5：1-14参照）

人間の本性というものは、時代が移っても変わるものではありません。今日においても、主の祝福を受けるために「何か大きな事」をするように命じられるものと思いついて入っている人がいます。そして、ごくあたりまえの事について、ごくあたりまえの勧告を受けると、ナアマンのように失望して、

立ち去ってしまいます。

最近の例をあげてみましょう。キンボール大管長は8年にわたって教会の大管長を務めておられます。そしてほとんどの大会の説教で、家をきれいにするように、ペンキを塗るように、壊れた部分を修理するようにという勧告を繰り返してこられました。しかし、多くの人はこの勧告に注意を払おうとしません。

そしてこう尋ねます。なぜ予言者がそんなことを言うのでしょうか。もっと素晴らしい予言はないのですか。

しかし、これこそ予言ではないでしょうか。キンボール大管長は何度も繰り返し繰り返し語ってこられました。「皆さんが持っている物質的な財産を大切にしてください。やがてそれらの物を手に入れるのが不可能ではないまでも、困難になる日がやってくるでしょう。」

この言葉はすでに成就しています。8年前には家を買うことができた人も、今ではその望みすら持てなくなっています。

なぜか私たちは、特に福祉部会において、将来の災害を予告する大きな予言を期待する傾向があります。しかし私たちが耳にするのは、ごくあたりまえのことについて勧告する静かな声です。そしてこの声に従うならば、大災害が来ようとも私たちは守られるのです。

アルマはこう言いました。「小さくてやさしい事から大きな事がでてくる。また小さな手段で賢い人をうち破ることがたびたびある。」（アルマ37：6）

さて、このようなことをお話ししたのは、私がこれから申し上げる勧告が、ある人にとってはあたりまえのこと、あるいはつまらないことに聞こえるかもしれないからです。しかし、この勧告は、福祉プログラムが初めて導入された時に大管長会が発表し

た教義や原則と一致するものです。

「私たちの第一の目的は、可能な限り、いまわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除き、独立心、勤勉、儉約、自尊心を再び私たちの間に確立する体制を築くことである。教会の目的は、人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」(Conference Report「大会報告」1936年10月, p. 3)

自立を強調することは、教育とつながっています。しかし、すべての教会員の学校教育に対する責任を、教会に求めるわけにはいきません。

教会幹部は訪問先で、次のような言葉で始まる質問をよく受けます、「なぜ教会はこうしないのでしょうか……。」そしてその後には、もし実現すれば多くの人の役に立ち、教会の名誉となるような価値あるプロジェクトの説明が続きます。

例をあげてみましょう。なぜ教会は、会員の経済的な安定に向けて備えをさせるために学校を設立しないのですか。

何年も前のことですが、私は家の門のそばで、垣根に使う横木を割っていました。そこへひとりの青年が話をしにやって来ました。彼は海外での戦闘任務を終えて帰国したばかりでした。彼は自分の年齢をごまかし、学校をやめて海兵隊に入っていたのです。私は将来の計画について尋ねてみましたが、何も考えていないということでした。仕事が少ない時でしたし、彼は何の技術も身につけていなかったのです。

そこで、高等学校にもどって卒業するように勧めました。しかし彼は自分の年齢を考えて、それはできないことだと思っていました。私は言いました。「もし君が学校にもどったら、おそらくしっくりとはいかないだらう。学生たちは君のことを『じいさん』と呼んでからかうかもしれない。でも

君は戦争で敵兵と向かい合ってきたのだから、そのくらいのことにはぶつかる勇氣は持っているはずだ。」

私が彼に忠告したのはそのことだけです。私はわずか10分間、門のわきの材木の上に座って話をしただけです。学校を建てることも、教会にそれを建てるように求めることもしませんでした。彼の学費を払ったわけでもないし、教訓めいた話を彼のために準備したわけでもありません。彼に必要なだったのは、進む道を教え、助言と励ましを与え、将来へのビジョンを持たせることでした。彼は私の助言を受け入れて学校にもどり、今では自分の家庭を持って仕事にも恵まれています。

私がその青年に与えたものは、将来へのビジョンと励みだけです。そうするのに、教会の予算を立て直す必要はありませんでした。職業について教会員に助言を与えるのは、すべての神権指導者に課せられた責任です。私たちは教会員が自立できるように助けなければなりません。

数年前になりますが、長い間の政治的、経済的な苦境から立ち直ろうとしている国がありました。その国では様々な種類の職業技術を身につけた人を必要としていました。地元でその必要性を痛感した神権指導者は、教会堂の中に職業訓練所を開設して兄弟たちに技術を身につけさせようという計画を思いつきました。そうすれば多くの教会員が職に就けるようになるからです。実に魅力的な計画でした。

この計画に経費がかかっても、職に就いた兄弟たちがそれ以上の什分の一を納めることになるから、十分採算がとれるという主張でした。しかし、教会幹部がこの計画を承認しなかったために、地元の指導者はひどく落胆してしまいました。

彼らは幾つかのことを見落としていたの

です。中でも最も重大なことは、その地区にはすでに職業訓練所があって、本当に訓練を受けたい人はそこを利用できるということでした。新しい従業員を訓練し、技術を向上させる教室が、企業や工場、あるいは政府によって開かれていたのです。

この兄弟たちに最も必要なものは、すでに与えられている機会を最大限に活用するようにという助言と励ましでした。

私たちの責任は、自己を向上させるためにあらゆる機会をとらえて、それを活用することです。

さて、教会がしなければならないことが幾つかあります。いずれも主から命じられていることです。例えば、教会は福音を宣べ伝えなければなりません。神殿を建てなければなりません。聖徒を完き者としなければなりません。これらのことは、教会以外の組織ではできないことです。そのほかにも（教会の使命の中心とはならない）善



いことは沢山ありますが、それらは二次的なものばかりです。どんなに価値あることでも、教会にはそれらを一から十まですべて行なうだけの財源はないのです。

教会は全会員のために学校を建てることはできませんが、私たちの仕事のために重要な貢献をしてくれます。それは教会に与えられた大切な使命です。すなわち、道徳的、霊的に価値ある事柄を教えるということです。

技術訓練以上に私たちの仕事に影響を与えるものに、次のような徳があります。

高潔

信頼性

礼儀正しさ

人を尊重する心

所有物を大切にすること

少し例をあげて説明しましょう。

私たちの息子や娘が結婚すると、少なくとも最初のうちはアパートを借りて生活することになると思います。

私は、中流の家族向けのアパートを多数経営しているステーキ部長と話したことがあります。彼は実際に現場を見せながら、アパートがどんなにひどい扱いを受けているか説明してくれました。その壊れ方は、通常の使用によるものでなく、破壊行為ともとれる乱暴な扱いによるものでした。

このような行為は、末日聖徒がとるべきものではありません。私たちは十分に承知しているはずで、必要ならばぎを打ち、ちょうつがいとを止めるぐらいのことは、進んで行なうべきです。

末日聖徒はアパートを自分の家のように扱い、いつも清潔で魅力的に整え、手入れが行き届いた状態にしておきます。予言者はそのように勧告しなかったでしょうか。また、アパートを出る時は、きれいに掃除をして、次の人がすぐに入れるようにしま

す。

さて、これが仕事とどのように関係するのでしょうか。皆さんも御存じかと思いますが、家庭の状態はそのまま仕事に置き換えられるものなのです。

私の父がまだ若く、子供を数人かかえていた頃のことです。父は事業を始めるための資金を借りに、少し気おくれしながらもブリガム・シティーの銀行へ行きました。すると担保があるか尋ねられました。父は、働く意欲と少しの技術のほかには何も持っていないませんでした。

銀行員は、父からの依頼を断わろうとして、たまたま父がどこに住んでいるのか尋ねました。西一番通りの角にある古い家です、と父は答えました。銀行員は通勤の行き帰りにいつもその角を通り、庭が美しく移り変わるのを目にしていました。そして、だれが住んでいるのかと思いつつ、手入れの行き届いた庭に感心していたのです。

こうして父は銀行から資金を借りて事業を始めることができました。すべては、簡素な借家の庭に母が植えた花のお陰でした。

私たち夫婦は、わずかな収入でたくさんの子供を育てました。子供たちもまた、同じ特権にあずかることでしょう。私たちはその準備をさせるために、将来の職業に役立つごくあたりまえのこと、必要なことを子供たちに訓練してきました。

例えば、(地下室の片隅などに)仕事机を置いて、仕事場を作りました。そこだけは、やりかけの仕事を放っておいても、ペンキやおがくずで床を汚しても良いのです。家をいつもきれいにしておくのはもちろんのことですが、そこだけは別でした。ひとつの目的があったからです。

また、我が家には次のような習慣があります。毎年クリスマスになると、息子たちに贈るプレゼントの中に大工道具をひ

とつ入れておくのです。やがて息子たちが成長したら、金属性の立派な道具箱を贈ります。家を出て独立する時には、大工道具一式がそろい、その使い方も習得しているわけです。簡単な車の修理や大工仕事、プラグや蛇口の交換ぐらいはできるようになります。

一方、娘たちには料理や裁縫を教え、各々がひとり立ちする時には、ミシンを持たせます。この訓練にはふたつの重要な目的があります。第一に、家庭で生活費を節約するため、第二に、仕事に役立つ技術を身につけておくためです。私たちは単に技術を身につけるだけでなく、それを活用するように願っています。

このような話をすると、一部の人は非常に怒って、なぜ男の子にミシンを贈らないのか、なぜ女の子に道具箱を持たせないのかと抗議してくるかもしれません。

そこで説明を加えておきますが、我が家の息子は伝道に出て困らないだけの料理はできますし、ボタンも付けられます。娘の方も、蛇口を交換したり、くぎを打つぐらいのことはできます。息子も娘もタイプは打ちますし、自分でタイヤも取り換えます。

男女両方に適した数多くの仕事がありますが、ここで私が心配することは、男性と女性の両方に、ある意味で各々の特質に反した職業を選ぼうとする傾向が高まっているということです。

私たち夫婦は、息子には男性としての仕事に就けるように、娘には女性としての特質を引き出せる仕事に就けるように、それぞれ準備をさせてきました。

そうしてきた者の立場から、私に言えることは、この教会においても良識になかった行動をとるべきであるということです。

現代人の中で、本当に喜んで仕事をしている人は数少ないと思います。私たちは、

受け取る給料に見合うだけの、できればそれ以上の仕事をするように、自分自身を戒め、子供たちを訓練しなければなりません。

少し早目に出勤してその日の仕事の準備をする人や、退社する前に少し残って翌日のために作業場や机の上を整理しておく人は、実に少なくなりました。

自分の行なった仕事以上の報酬や給与を要求する態度が、世界経済を崩壊寸前にまで追い込んだのです。しかし現在では、職を失わないために賃金カットを進んで受け入れる労働者が大勢います。給与以上の仕事をしようという精神がもっと早く現われていたら、経済危機は起こらなかつたでしょう。

家族に対する責任と家計の苦しさから、望みだけの学業を修めることのできない場合があります。

しかし、それでも自己を向上させることはできます。必要な授業料は、時間と、努力と、熱意です。需要が多くても供給できる人が少ないごくあたりまえの徳を、生活の中に築き上げるのです。

私の話を聞いて、皆さんが失望することのないように願っています。私は皆さんに、何か「大きな事」をするように言ったわけでも、職業を選択するための複雑な公式を紹介したわけでもありません。ただ、ごく身近にあるありふれた事柄で、しばしば見過ごしにされているものを取り上げたいのです。

ここにひとつの公式があります。主は次のように言われました。「われ誠に汝らに告ぐ、およそ己れの家族を扶養せざるべからざる男子には、ことごとく彼をして扶養せしむべし。然もこの者は決して冠を失うことなし。而してかかる者は教会の中にて働かしむべし。」(教義と聖約75:28)

イエス・キリストの福音は、成功するた

めの公式です。福音の各々の原則は、皆さんが職業を選択する時や何かを達成しようとする時に、はっきりとした影響力を与えます。「教会の中にて働かしむべし」という勧告は、大きな価値をもっているのです。福音に従って生活するならば、たとえほかの人が皆さんの仕事をつまらないものだと思っても、あるいは皆さんの人生を月並なものだと考えても、皆さんは将来への展望と靈感とを受けて、自分が成功していることを悟るでしょう。

この教会の会員の上に神の祝福がありますように、そしてあらゆる地に住むあらゆる人々が共に幸せをつかむことができますように。また、現在職を失って苦労している人々や、失業の恐れと闘っている人々の上に、神の恵みがありますように。私たちが、時の始めより福音の一部であった自立と高潔という原則に従って生活することができますように。福音はまさに真実であります。これらの証をすべてイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



# 歴史的見地から見た 労働と福祉



第二副管長  
マリオン・G・ロムニー

**今**から50年以上も前、教会は福祉プログラムを開始しました。先ほど話されたバッカー長老も引用されましたが、ヒーパー・J・グラント大管長はこう述べています。「私たちの第一の目的は可能な限りいまいましい怠惰や施しのもたらす悪弊を除去し、独立心、勤勉、儉約、自尊心を再び私たちの間に確立する体制を築くことである。教会の目的は人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」(Conference Report「大会報告」1936年10月, p. 3)

私たちはこの言葉を今まで何度となく聞きました。しかし、その意味するところを本当に理解しているでしょうか。監督の皆さん、会員の中で怠惰な人はいませんか。皆自立していて、勤勉で、儉約を実践し、自尊心を持っているでしょうか。働かずに援助を受けている人はいないでしょうか。私たちは、教会員が自らを助けるように助けているでしょうか。あるいはただ面倒をみているだけでしょうか。最後に、会員たちは労働の大切さを理解しているでしょう

か。以上の質問に対して首をかしげる人は、なぜ私たちがこのグラント大管長の言葉を何度も取り上げるか、理解できるでしょう。

私の兄(弟)がステーキ部長に召された時のことです。彼は私のところに来てこう言いました。「ねえ、この福祉プログラムについて教えて下さいよ。」彼はたくさんのことを聞きました。質問に答えた後で私はこう言いました。「私は、今説明したようなことをいろいろな会で話したと思うけど、その会に君も出ていたろう。」彼は答えました。「もちろん出席しましたよ。でもその時はステーキ部長じゃなかったんで。」

このように、福音の原則に対する関心というものは、生活環境の変化により変わっていくものです。しかしながら原則そのものは、私たちが従う、従わないにかかわらず一定です。また原則に従わないことから来る結果も同じです。

何年前のことですが、私はローマ帝国の崩壊の原因について書いた厚い本を読みました。それによりますと、崩壊の原因を大づかみに見ると、いろいろな催し物や見せ物や食物などの恩典をただで与えることに決めたことです。政府のこの施策は人々の心に期待と依頼心を植えつけ、やがてそれは独裁権の確立によって終わりました。教会員の多くは、この歴史を繰り返そうとしている国で生活しています。合衆国では、私たちが大切にしてきた「労働は神聖なものである」との考えが揺らぎ、今や働くことなく恩典だけを受けるという危険な考えが当然のこととなっています。

私がリー大管長の下で福祉プログラムの分野に足を踏み入れた時、あるひとりの失業者についてこういう話がありました。彼はだれかに面倒を見てもらいたいと思

ました。什分の一と税金を取っていたので、教会や国が何とかしてくれると思っていたのです。彼は食べ物があったくない上に、自分で働くこともしませんでした。彼の態度にすっかり失望し気分を害した教会の指導者たちは、教会は彼のために何もしないということを決めました。決めたことを彼に知らせに行く途中、ひとりがこう言いました。「ちょっと待って下さい。私の家にはどうもろこしが余分にありますから、それを彼にあげましょう。」家について、指導者たちは事情を説明しました。するとその人はこう聞きました。「ところで、どうもろこしの話ですが、それは皮つきのやつですか」「いいえ」「じゃ、持ってきて下さい。」これがユーモラスに聞こえるのは、常識ではとても考えられないことだからです。このような態度の人を救うことはできませんし、ローマ帝国を滅亡に陥れたと同じ問題を持つような人で構成されている国も救えないのです。人生の中で最も悲しむべき日とは、努力せずに生活する方法を思案し始めた日

です。政府が行なうことの中で最も人を墮落させるものは、人に生活の責任は政府が負っていると教えることです。これとは対照的に、教会はその創設以来、教会員に経済的な独立をはかるように、また働いて必要なものを得、使うものは自分で作るように教えてきました。私は教会がグラント大管長の述べた原則を生きたものとする努力を創設当時から行なってきたことに思いを馳せる必要があると思います。

教会福祉の原則はいつも私たちと共にありました。グラント大管長の声明は1936年のものですが、彼が「自立、勤勉、儉約、自尊心をもう一度確立しなければならない」と言っていることに気づくと思います。また労働を再度最も価値あるものとみなすべきであるとの言葉にも注目されることでしよう。もし時間が許せば、私たちはアダムとイヴがエデンの園を離れた時に、地球が彼らのためにのろわれているのに気づいたところから始めることができます。そしてこの原則は聖書とモルモン経双方に継続さ



れていきます。しかしながら、時間の関係上、この末日の神権時代に限って話を進めていきたいと思います。

教会が設立されてまだ1年もたない内に主は主の経済制度を啓示し、それがミズーリで実施されました。この神権時代最初の「福祉プログラム」は協同制度で、教会員は持てるすべてを教会に捧げ、自分と家族の必要や要求に応じて生活するに足るだけのものを受けるという方式でした。そして教会によって保持された財産は次のふたつのうちどちらかの方法で使われました。

まず第一は、その人が働くことができれば、生計を立てる手段を与えること。第二は、その人が働けなければ、必要なものを与える、というものです。

またいろいろな仕事についた人々は、家族の必要を満たした残りをすべて教会に返しました。そしてこの余剰のものは、さらに多くの人に仕事を与えたり、困っている人を助けたりすることに用いられました。ミズーリに来た時、人々は皆貧しい状態にありました。このプログラムは、そうした人々に働いて生計を立てる手段を提供したのです。彼らは施しを受けたのではなく、実際の仕事を得たのです。

この協同制度は1834年の指示により廃止されましたが、その基本原則はノーブーでも踏襲されました。たとえばある時に、指示を受けた約5千人の改宗者がイギリスからノーブーに移住してきました。その時、余裕のある人たちはアメリカへの旅費を出したり到着してからの仕事を世話したりして貧しい人々を助けました。ノーブーの経済は農業と土木建築が土台でした。その中でも最大のもは、ノーブー神殿の建築で、そのために大勢の教会員が職を得ました。

ある旅行者は、必要な者には教会から仕事が与えられるので、ノーブーには貧困な状態がまったく見られないと言っています。

また教会は、自力で購入できない人々のために土地も与えました。ノーブーの住民の多くは、普通1エーカー（0.4ヘクタール）から成っていたその土地を使って、必要なものをほとんどまかなうことができました。彼らは広範囲にわたって畑を作り、ニワトリや乳牛や豚を飼いました。家畜は何日間かの労働の代償として受け取ったものです。

ノーブーでのこうした援助の背景にある真の目的は、人々に労働と生産への道を与えることにより、できるだけ早く自立させることでした。

ブリガム・ヤングと共にソルトレーク・シティーに到着した後の教会員は、他の社会から隔絶されていたので、経済的に自立することを余儀なくされました。そこには怠惰という文字はありませんでした。働かなければ生きていけなかったからです。

ブリガム・ヤングの労働と雇用に関する考え方は、次の1860年8月の声明に見ることができます。「私たちの中に働けるのに貧しいという人がいないのは、全員に利益を得られる仕事を与えるよう計画しているからであり、自活することを教えているからである。もしも体の不自由な人がいれば私たちが世話をする。監督が自らの召しと職を全うし、全力を尽くしてそれを遂行するならば、ワード部の中に自分にとって最大の利益となる仕事を得ていない人はひとりとしていなくなるであろう。」（*Journal of Discourses*）説教集8：145—46）

状況が変わるとプログラムも変わります。1880年頃になると、ユタも合衆国の一部と



してある程度確立された独立経済体制を放棄せざるを得ませんでした。教会は企業の多くを売却し、指導者たちは教会員に、教会独自の経済活動をやめるよう指示しました。ユタは国家経済の中の一要素となったのです。このようにして、教会が教会員の雇用を援助する新しい時代が訪れたのです。興味あることに、教会が経済活動を国家に依存することになった丁度その時、国家は1890年代の恐慌に入っています。

この恐慌の間に、教会は独自の雇用機関を設けて、教会員の就職の世話をしました。また経済を維持するために血のにじむような努力が払われました。砂糖や塩、石炭などの産業には助成が行なわれました。

1900年代の前半の労働と雇用に関する教

会の活動は、そのほとんどが雇用促進に向けられました。例えば、1920年代に、監督はワード部の貧しい会員のために仕事を見つける責任を受けました。各ワード部で特別な人を召し、雇用問題について担当させ、また定員会でもこの問題について話し合うようにさせたのです。これはファイアーズ長老が今朝説明したものと非常によく似ているものです。

このようにして歴史を振り返ってみますと、助けの必要な人にはふさわしい助けが与えられてきました。しかしそれはあくまでも自活することを基本にしてのことでした。1930年代の大恐慌に見舞われた時、教会員は事態がまったく異なってきたことに気づきました。仕事はまったくなく、働こうにも働けないのです。そこで政府が介入してこの問題を解決しようとしたのですが、政府の取った方法の中には施しの要素があったため、逆に怠惰を助長してしまいました。グラント大管長がああ声明を出したのは丁度こうした事情があった時なのです。生産プロジェクトのひとつのモデルとして、それより半年ほど先の1936年4月21日に、ステーキ部長と監督に出された手紙の中には次のように記されています。

「次にあげるものは、ユタならびにアイダホのビート生産区域にある教会の各ワード部が生産プロジェクトを行なうための概要で、失業している教会員を援助するためのものです。

各ワード部の監督会は、ビート栽培に適した100エーカー以上の土地を選択し、確保して下さい。……

またその土地を困窮家族数に応じて分割し、各家族がそこで働けるようにすることもできます。つまり、土地を耕したり、灌

溉かをしたり、ビートの土落としや収穫、運搬など、いろいろなことを各家族が行なうわけです。労働者には耕作や灌溉などの時に賃金を前渡し、ビートが育成する夏の間に生活を営むことができるようにして下さい。

この失業問題を解決するためには、皆が一緒になって働き、互いに助け合って仕事を見つければなりません。また今年からこのプロジェクトを始めれば来年へ向けてもっと良い準備ができるようになり、プロジェクト自体も拡大されて利益も上がり、かなりのパーセンテージの失業者を吸収できるようになるでしょう。」

もう一度申し上げます。このプログラムの目的は人々を自活させること、すなわち労働と生産に活発に参画させることでした。以来多くのプログラムが紹介されました。その中から幾つかあげてみましょう。

デゼルト産業はほかに働けない人に職を提供し、衣服や日用品を廉価で供給するために設立されました。また金融機関からお金を借りることのできない人々のために少額のローンを提供する組織が作られました。また生産と販売に関して教会が共同組合組織を広範囲にわたって設けることによりどのようなことができるか、それを調査するために農業委員会が設けられました。どれを取ってみても、目的は人々が自力で生活することを援助することにあります。

今までの説明から、皆さんの心の中に、福祉プログラムが初めから私たちと共にあったということを刻み込んでいただければ幸いです。プログラムはその時々状況に合わせて変えられますが、原則と目的は同じです。

私たちは状況の変化に対応できるように

柔軟性を持たなければなりません。時々、プログラムに没入しすぎて、目的を忘れてしまうことがあります。私たちは教会員が独立と自活という目的を達成できるようによく心を配り、また創造力を発揮する必要があります。

今日私たちの教会は国際的になり、問題も国により様々です。つまり、国が違えば必要なプログラムも違ってくるということです。しかし、グラント大管長が述べた基本原則に変わりはありません。

この福祉集会のテーマは、労働と雇用でした。教会の神権を土台とした雇用制度は、必ずしもすべての国に適用できないにしても、人々に利益をもたらすプログラムです。私たちは定員会に属し、しかも職に恵まれている皆さんに、仕事を求めている定員会会員のために努力を傾けて下さるようお願いしたいと思います。

また働く能力のある人に、必要な援助を行わなければならない場合、私たちは監督や他の神権指導者の皆さんに、彼らが誇りと自尊心を失うことのないように、ふさわしい労働の機会を設けてあげることをチャレンジします。

神はこれらすべての活動の基となっている原則を理解できるように、私たちすべてを祝福して下さい。私たちは教会員が自立と勤勉と自活の道を歩むよう切に望んでいます。またこのことが、与える側と受ける側の双方を清めるものとなるように望んでいます。この原則を理解した時、私たちの現在の福祉活動はさらに意義あるものとなり、今日の社会にあってどのような変更や新たなプログラムが必要かが明らかになってくるでしょう。

## いざな 成長への誘い



中央初等協会会長  
ドゥワン・J・ヤング

**私**たちは、一人一人別々にこの世にや  
って来ます。とり立てて変わったこ  
ともありません。しかし、思うにこの  
ことを通して主は、人各々の限りない価値を  
私たちの胸に思い起こさせようとしておら  
れるのではないのでしょうか。

幼子<sup>わがこ</sup>の誕生の瞬間には、何かしら非常  
に神聖なものがあります。私は今でもはっ  
きりと、子供たち一人一人の誕生の瞬間を  
思い出すことができます。最初の子は、3  
年もの間待ってようやく身ごもった子でし  
た。その子はとても小さくて、2,250グラ  
ムしかありませんでした。私は非常な責任  
を感じました。その子の誕生は大きな奇跡  
のように思えました。あふれるばかりの感  
謝の念が湧いてきました。自分の子をこの  
手に抱くことができたのです。幼子が誕生  
するとともに、母親にはより一層はっきり  
と、人生のチャレンジや可能性が見えてき  
ます。私は子供を腕に抱いて寝かせつけな  
がら、自然と口をついて出てくる子守歌を  
歌いました。その子の将来に対する私の夢  
を、自分なりに考えた言葉で、柔かく包み  
込むように歌いました。そして自分の腕の

中にあるこの可能性の奇跡に、つまり神の  
最高の傑作である幼子に目を見張ったもの  
でした。

当然のことながら、幼子は成長します。  
それは、人生の旅路の中で起こる自然な現  
象です。子供というものは、何に抑制され  
ることもなく、急激に驚くほどの肉体的成  
長を遂げます。ほんの短期間に、体重は誕  
生当時の倍にもなるのです。そして、あれ  
よあれよと言う間に3歳になり、4歳にな  
り、やがて戸外に出るのを好む年頃になる  
のです。

幼い子供たちは、まるでせきを切ったよ  
うに学ぶことを始めます。その許容量には  
限りがないかのようです。子供たちは、ま  
ず模倣し始め、次に自分自身で物事を行な  
うようになります。私はいつも驚嘆させら  
れるのですが、何か新しい技術とか仕事を  
たった一回教えただけで、子供たちはそれ  
を自分なりに自分の目標に向かって行なう  
のです。

自然な成長の過程を見ていると、すべて  
のものの成長には、ある永遠の原則が関与  
していることに気づかざるを得ません。ま  
ず私たちは、子供たちが標準的な成長をし  
てくれるようにと願います。この世に生ま  
れ出たすべての子供たちには、成長するよ  
うにという神聖なチャレンジが与えられて  
いるのです。天父は、私たちが生命という  
貴い賜を満喫し、このすべてのものの中心  
である真理を尊び喜ぶようにと望んでおら  
れます。それは、私たちには生命があり、  
成長し、技量を伸ばす等、この世以外の場所  
ではできなかったことができるからなのです。

こう考えてくると、もうひとつの大切な  
真理に気づきます。それは、神の子らだけ  
が正しい方向に成長する能力を持っている  
ということです。私たちには選択の力があ  
るので、この地上の時間を用いて、最も有



効な成長を遂げることができます。しかし、成長するだけでは十分ではありません。草や毒麦でも成長します。私たちは、トプシー（ハリエット・ピーチャー・ストウ作「アंकルトムの小屋」中の奴隷の少女）のようにならぬよう、自分の成長の計画を持たなければなりません。トプシーは「ただ背丈が伸びただけ」でしたが、私たちは才能を伸ばし、自己を鍛練することによって問題や困難を克服していかなければなりません。そうする時に人はこの地上での経験を糧としてより高い人格を得、神にまみえるにふさわしい存在となっていくことができますのです。

知恵ある人々の見解によれば、私たちは徐々に成長するものです。聖典には、規則に規則を加え、誠命にいましめを加え、(教義と聖約98:12参照)と書かれています。

ちょうど赤ん坊が最初の一步を踏み出すことを学ぶように、またひとつずつ言葉を

覚えるように、私たちも人を思いやること、仕えること、愛することを少しずつ学んでいくのです。どのようなものであれ、人は一度にひとつずつ概念を学んでいきます。

主はⅡニーファイ28:30の中で、この大切な真理を入念に説明しておられます。

「われは言葉に言葉を加え、誠命に誠命を加えて、……故にわが誠命を守りわが勤めに耳を傾くる者は智慧を得るによりて幸福なり。われは受くる者に一そう多く与うれども、われら充分なりと言う者よりはその持てるものさえも取り上ぐべし」と。

肉体の成長という自然現象を観察していると、神秘と畏敬の念に打たれます。「私はいつこんなに大きくなったのかしら」「あの子はいつこんなに背が伸びたのかしら」という歌詞を覚えていらっしゃるでしょうか。(屋根の上のバイオリン弾き「サンライズ・サンセット」より)私の家では、壁に子供の背丈の記録をつけています。子供たちの

頭に本をのせて、前に測った時よりもどの位伸びたかを調べるのです。前よりもずっと背が伸びていると、子供たちは大喜びです。これは肉体の成長です。しかし、何かのために絶えず努力して達成した時には、それよりもっと大きな喜びや満足を味わいます。

ある時、小さな子供がお父さんの所へ行って、こう言いました。「ねえ、何かむずかしいことをするように言って」そこでその父親はその女の子ができそうなことを考え出しましたが、女の子はこう言いました。「だめよ、パパ、そんなのむずかしいわ。何か、もっとむずかしい方がいいわ。」すると父親は書類カバンを家の中に運んできて、言いました。「これを運んでおくれ。このカバンを運ぶのはむずかしいよ。」女の子はそのカバンを持ち上げました。しかし、とても重かったのです。女の子は言いました。「私、できると思うわ。」女の子は大奮闘をして、よろめきながらとうとうカバンを家の奥まで運んだのです。人はだれでも、何かむずかしいことを成し遂げたという気持ちを味わうのが好きなものです。

知っておいていただきたいのですが、成長は過程でしかありません。決して最終的な完全な到達ではないのです。私たちは着実に山道を登って行かなければなりません。しかし、過程にも希望と信仰がなければなりません。アルマが雄弁に物語っているように、手入れをして養い育てるならば、やがて花を咲かせる種のような潜在能力を、私たちは持っています。(アルマ32:28—43参照)ひとたび準備が完了すると、成長が始まります。しかし、それは前進しようという信仰を持っている時だけに限られるのです。

ビクトル・ユーゴの言葉を思い出して下さい。

汝 旅の疲れを休めむ



鳥の如くに  
か弱き小枝に身を寄せむ  
たちまちに小枝は折れて、  
とりすがるすべもなし  
されど歌わん  
両の翼のある故に

この鳥のように、自分は飛べるということをはっきりと知り、恐れることなく物事に立ち向かい、真理に従って生きる時のみ、新たな真理を自分のものとする事ができるのです。

ほんの小さな赤ん坊には、親が選択を助けてやります。しかし、体と霊が成熟すると、徐々に、着実に、子供に選択を任せられるようになります。こう言った人がいました。「あなたは、自分で自分のたいまつに火をともしなければならぬ。」

私たちは毎日、命を得なさい、豊かに得なさい(ヨハネ10:10参照)という主の招きに応じようと奮戦しています。日々の生活の中で、私たち神の子らには正しい方向に成長する能力があるということを、心に留めておくようにしましょう。

天の御父が私たちを強く導きたもうように。そして成長するやうにという天の御父の誘いに<sup>live</sup>応じることが出来ますように。イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

## 喜びを求めて



中央若い女性会長  
イレイン・A・キャノン

**私**たちがいつも心に留め、思い起こすべき貴重な遺産、それは、試しは多くとも苦難は私たちに良きものをもたらしてくれると悟ることです。

喜びは苦しみの後にやって来るものです。けがをしても、それが心を活気づけ、精神を豊かにしてくれることがあります。どんな黒雲も裏は銀色に輝いているものであり、葉が落ちて枝はまた芽をふくのです。「夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。」(詩篇30：5)

愛する姉妹の皆さん、日々主のみ業にそしむ時、望みのなかったところに希望が生まれてきます。そして、冬のさなかでも、その寒さに負けることのない夏を心の中に持てるようになります。苦しいことの多いこの世にあって、私たちは喜びを見いだすことができるのです。

私は皆さんに真心で応えたいと思っています。美しくて快活な若い女性のあなた、少しの間生きてきて、多少なりとも苦しみを味わった利発で素晴らしいものを具えたあなた、たくさんの夢を持っているあなた、

そして、夢が壊れてしまったあなた、この末日に私たちすべての上に振りかかっている誘惑にしばし自分を譲り渡してしまったあなた、病に苦しむあなた、そして、信仰をつまずかせ、涙がそのほおを伝い、枕をぬらしたすべての人に、私は心からの愛と深い思いをお伝えしたいと思います。あわせて、天父と主イエス・キリストが生きておられ、私たちを支えて下さっていること、慰め主が今でも共にいて、完き喜びが得られるという確信を抱かせて下さることを証致します。

しかし、最初に来るのは試しです。その後に来る甘さをはっきりと感じ取るための苦い試しです。それから信仰の証が得られるのです。(イテル12：6参照)

よく知っていることですが、私たちはこの地上に来る前に、神が示された救いの計画を聞いていました。私たちは自由意志によって、地上に来てそこで試しの生涯を送ることに賛成したのです。私にとってそれはこのように言うことではなかったかと思えます。「私は地上へ行きます。どんなことがあってもそこで生き抜きます。そこでは学ぶことが許されないような状況に置かれるかもしれませんが。愛する人が別の人と結婚するのを目にするかもしれません。複雑な人間関係の中で耐えることもあるでしょう。学校でただひとり、家庭でただひとりの末日聖徒として生活することもあるでしょう。長年精一杯働いても、報われないこともあるでしょう。それでも、私は地上に行って、試しを受け、学びます。」(アブラハム3：25参照)

試しは、人生のいかなる時にも、様々な方法でやってきます。皆さんは若い女性が十代の兄弟に向かって、こんなことなら生



まれて来ない方がよかったと不満を言うのを聞いたことがあるでしょう。彼女はこう言うのです。「絶対に不公平だわ。お兄さんには卷毛もあるし、鼻だって高いわ。」

すると兄は答えます。「そうだね、お前にだって大きい鼻とまっすぐの毛があるじゃないか。」兄弟たちは意地悪ですね。

どのような人生であろうと、生きなければなりません。そこから学ばなければなりません。人生に真剣に取り組んで、そこに喜びを見つけるのです。

人生について確かに言えることは、だれもが何か大きな試練に直面するということです。これは計画の一部です。またほかに言えることは、現世にあっても来世にあっても、自分が磨かなかつた特質や、何の備えもしなかつた生き方が突然自分の中に現

われることはないということです。逆境は備えをするのに重要な役割を果たしています。その理由として、最低3つが考えられます。ひとつに、神はだれが信頼し得る人か、だれがヨブのようにしっかりと立ち、どんな時にも神を愛す人かを御存じだということです。第2に、逆境に対処することによって、私たちの理解と愛の心が深まります。多くの試練に遭っている人は、人の苦しみがわかり、よい助けができるのです。私たちは、だれかほかの人の祈りに答えられる自分になる必要があります。

第3に、私たちは本当に困ると、以前にも増して天父に近づくようになります。感謝と喜びの祈りが、礼拝に欠くことのできないものであることは言うまでもありません。しかし、悩み苦しんでいる時には、祈

りにも一層真剣さが加わることは、ここにおいでのだれもが感じていることと思います。逆境の時の心の持ち方が、望みのないところに希望をもたらすのです。

要はレモンとレモネードです。すなわちレモン（問題点）からレモネード（何か良いもの）を作ることです。試練に遭うと、私たちはとかく「どうして私が？」「なぜ今？」とぶつぶつ言いがちです。そして自己れんびんに陥り、神を非難するのです。そうではなく、次のような大切な問いかけをすれば、解決策が見つけれられるのです。

「今の私には、天父のどの原則を応用すればいいのかしら。」こうして適切な原則が見つかれば、次はそれを実行することです。



私たちが必要とする祝福は「<sup>か</sup>変らざる<sup>おきて</sup>律法」に基づいて与えられるのです。（教義と聖約 130：21参照）

神の計画は、私たち一人一人に限りない喜びをもたらす計画です。神の原則は、どのような状況にも当てはまります。老いも若きも自分のチャレンジを高く掲げて、そこに自分なりの喜びを見いださなければなりません。

何人かの姉妹たちについてお話ししましょう。

亡きルーズ・レイク姉妹は、30年以上も車椅子に乗って独り暮らしをしていました。次から次へともち上がる問題で、彼女は悩み続けていました。そんな彼女が人生を立派に生き抜き、天父に会う素晴らしい備えをしたのです。彼女が行なったことは、「喜びを見つける練習」です。目覚めると、熱心に祝福を数え上げるのです。これを何年もの間毎朝実践しました。想像してみてください。彼女がどのような状況で喜びを見つけようとしていたかを。彼女は神をのろって死ぬこともしませんでした。（ヨブ2：9参照）逆境の中でも感謝しながら生きていったのです。逆境に対する彼女の考え方は、私たちに様々な点で感慨深いものを与えてくれます。

かつての中央若い女性の副会長であるルー・ロングデン姉妹は、ワード部若い女性会長をしていた時に、幼い娘さんが大変な病気にかかりました。ロングデン兄弟姉妹はベッドの傍らにひざまずき、心の底から祈りました。その時、娘は世を去るという答えを受けたそうです。ふたりとも心が張り裂ける思いでした。葬儀の後、指導者と若い女性たちは、彼女の通り道の両側を、花を手にもんで道を作ったのです。張りつ

めた思いを胸にその中を歩きながら、彼女は若い女性たちの視線にはっとしました。

「私はこれまで教えてきたことを実践しなければならぬんだわ。心から信じていることの模範を示さなくては。」ロングデン姉妹はそう思って、顔を上げ、あの優しいほほえみを少女たちに投げかけたのです。

ある14歳の少女は、癌と闘い克服しました。自分が子供の産めない体になったことを知った彼女は、私に若い女性のテーマを話してくれました。「主はわたしの命のとりでだ。」(詩篇27:1)この聖句が試練に立ち向かうのを助けてくれたと言うのです。そして彼女は、天父が送って下さった子供たちの最高の教師になることを決心したのです。姉妹の皆さん、原則を見つけ、それを実践しましょう。そして喜びを見いだすのです。

私の友人についてお話したいと思います。彼女は、自分で選んだわけではありませんが、片親で子供を育てるという状態に置かれてしまいました。ある日彼女は困り果て、どうしても助けが必要になりました。慰めと導きを求めていたのです。でも、頼る人はいません。彼女の両親は伝道で留守ですし、監督は多忙、ホームティーチャーは引越したばかりでした。泣くことにも疲れた彼女は、聖典を開き、好きな次の聖句を読みました。「すなわちわれに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。」(教義と聖約88:63)ここに彼女は答えを見つけたのです。彼女は祈り、そして助けを得ました。素晴らしいことです。求めたかいはありました。

今日でも、年齢を問わず、すべての女性

が天のみ力に頼ることができます。私たちは神権を通して力を求めることができますし、祝福師の祝福の中に慰めと導きを見いだし、聖典から助けを得ることができます。

人生はいつも思い通りにいくわけではありませんが、私たちは独りではありません。モーサヤ書にはこう約束されています。「頭を高くあげて心に慰めを得よ。……われはまた汝らの肩に負わたる重荷を軽くし、汝らが奴隷である間にさえ背にその重さを感じざらしめん。われがこのようになるは、汝らをこの後われを証する者とし、また主にして神なるわれが、わが民の苦しむ時これを憐みて助くることを確に汝らに知らしむるためなり。」(モーサヤ24:13, 14)

何と素晴らしい約束でしょう。

天父は約束を守られる御方です。皆さんと同じように私もいろいろな点で試しを受けてきました。しかし、先に述べたようなことから、背負った重荷も手の中では賜になることを学んだのです。

私はこのことを固く信じています。試練の時にあっても、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員としてしっかりと立ち、キリストの証人となり、人生の計画に平安を見いだすことができるよう、心からお祈りします。こうして喜びを味わうのです。

私たちは皆さんを愛し、皆さんのためにお祈りしています。素晴らしい皆さんの模範をうれしく思っています。私たちが試しの時を耐え抜けるために互いに助け合う者となれますように、そして喜びを見いだすことができますよう、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

## 同じ心を持つ人々



中央扶協協会会長  
バーバラ・B・スミス

**昨**年11月のある週末のことです。ソルトレーク・シティーに住む若い母親ハイジは、朝早く雲のたれこめる中を、車で開拓者記念公園に向かいました。そして、復元されたメアリー・フィールディング・スミスの家に入りました。

ハイジはそこでメアリーの時代の衣装に着換え、その日一日、近くの学校から訪れる子供たちを迎えるために準備しました。子供たちに保存用の乾燥りんごの作り方を教えるのです。

子供たちが帰った後、雲間から太陽が顔を出し、午後の空に明るく輝きました。その光に照らされた時、ハイジはメアリーの時代に起こった数々の出来事を心に思い浮かべました。その夜、ハイジは日記に次のように記しました。「丘の上の小さなれんが造りの家から見た、たとえようのない美しい景色に圧倒された。……ひずんだガラス窓から射し込むまばゆい光。私の心の中に温かい輝くような気持ちを与えてくれたあの光は、とても口では言い表わすことができない。」

ハイジは、粗末な作りのその小さな家と、さほど離れていない丘の上にある自分の快適な家とを比べて、さらにこう記しました。「私の願いは、私の家庭がメアリーの小さな家庭のように、家族にとって力と信仰の家となり、避け所となり、真理を学び証を強める場所となること。メアリーの時代とは生活様式が変わったが、私は彼女と同じ思いを抱いている。そして、私の身も心も、彼女の家庭にとって大切であったものを自分の家庭にあてはめたいと願っている。」

メアリー・フィールディング・スミスを取り巻く生活環境は、ハイジのそれとは随分異なっていました。

ノーヴーから聖徒たちが脱出する大切な時期に、メアリー・フィールディング・スミスはすでに夫を失い、小さな子供たちを抱えていました。ノーヴーにとどまれば、敵対者や暴徒の攻撃にさらされます。かと言って聖徒と共に行けば、家財をすべて捨て、荷車の隊に付いて、たったひとりで、長く辛い旅の苦難に耐え、かつて経験したことのないチャレンジに答えなければなりません。

ノーヴーにとどまることは、彼女の愛する聖徒や福音との交わりを絶つことを意味します。メアリーにはそれはできないことですし、しようとも思いませんでした。彼女は自分の子供を、新しく且つ永遠の誓約の中で強く育てたいと願っていました。

メアリー・フィールディング・スミスを大きな苦難に向かわせ、西部への旅へと駆り立てた福音の絆は、時と試練の違いを超えて、今やあの頃と同じように、姉妹たちを信仰においてひとつに結び合わせているのです。

南アメリカに住むある女性から手紙を受け取りました。それによると、宣教師から

バプテスマのチャレンジを受けた時に、彼女はこう言ったそうです。「私なんて必要ないでしょう。何の役にも立たないわよ。」しかし宣教師は忍耐強く接し、やがて彼女は福音を受け入れました。こうして彼女の生活に希望と愛がもたらされ、学習と進歩と成長の機会が与えられました。間もなくこの女性は扶助協会の会長になり、献身的な働きを通して、他の姉妹たちに自分の受けた希望と愛を与えるようになったのです。

トシコという名前の日本の立派な姉妹は次のように記しています。

「私は心の奥深く、ひとつの望みを持っていました。それは、イエス・キリストの復活を証する真実の教会がどこかにあるという希望でした。……主は私の望みをかなえて下さいました。……私は宣教師の訪問を受けて、モルモン経について知りました。……その中の教えこそ、私が長い間捜し求めていたものでした。……砂漠の砂に水が吸収されるように、私の心に福音が溶け込んでいきました。」

1978年、すべて黒人の姉妹から成る扶助協会がアフリカで組織されました。そのアフリカからも手紙が寄せられています。

「私は今までとはまったく違った観点から人生を見つめるようになりました。まだ若い母親である私は、子供たちをキリストの教えにしたがって育てる方法を学びました。また、家庭を喜びのあふれる場所にし、福音を信じて実践する場所にすることを学んだのです。」

いろいろな場所に住む女性から、このような実例が次々と送られてきます。独り暮らしの女性、子供のいる女性、年老いた女性、若い女性、改宗したばかりの女性、悲しみにくれる女性、望みを失った女性、幸

福な女性など、それぞれの生活環境は大変異なっています。

環境、タレント、賜<sup>たまひ</sup>などの点で異なった生活を営む数多くの姉妹たちが、ひとつのモザイクを形造っています。それぞれの生活を細かく見てみると、実に変化に富んだものであり、まず私たちの間にある多様性に気付かされます。そして、この多様性が偉大な力と豊かさをもたらししているのです。

そして、様々な経験から導かれるひとつの偉大な真理があります。繰り返し語られるその真理とは、次のようなものです。「神は生きておられ、私を愛して下さいます。神の教えは私を強くし、私の身と霊とを支えてくれます。」

この証によって、パウロが述べているように、私たちは心をひとつにするのです。

「わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つ……である。」(ローマ12:5)

異なった賜を持つ人が大勢いても……イエス・キリストにあって同じ心になっているのです。……イエスの教えが真実であり、その道が真理と愛と光の道であると証する、同じ心を持っているのです。

主の弟子になる人々の生活を数多く吟味してみますと、何年も昔にエライザ・R・スノーが述べたように、福音のどこにも理性や真理と対立するものなどないことがわかります。正しく理解すれば、福音にはあらゆる「徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきこと」が含まれていることがわかるのです。(信仰箇条第13条)福音は天から授けられたものです。暗く険しい道を照らしてくれる光です。真理の光は、私たちの永遠性を明らかにします。もし私たちが十分に力と時間を尽く



左より扶助協会会長バーバラ・B・スミス、中央若い女性会長イレイシ・A・キャノン、中央初等協会会長ドゥワン・J・ヤング

して働き、熱心に祈るならば、私たちの内に秘められた神聖な力が、一人一人に作用するようになるでしょう。

人種間の相違に時には戸惑うことがあっても、各々の独自性というものは、神がお造りになったものです。東洋から合衆国にやって来た美しい姉妹が、生まれて初めて、金髪で青い瞳をした人々と接しました。後で彼女が打ち明けてくれた話ですが、今では愛らしいと感じている青い瞳が、初めの頃はとても奇異に映って、あんな目で見えるのかしらと思ったそうです。

皮膚の色、文化、才能、好み、これらの多様性によって、私たちが人生で経験する完全さと美しさの多くが育まれていきます。東洋から来た姉妹にとって、それは初めの

頃に奇妙に思えた青い瞳でした。しかし、すべての人に違いがあるからこそ、私たちは互いの価値を認めることができるのです。また、ほかの人の違いを重んじるようになるからこそ、自分の特質をさらにはっきりと理解できるようになるのです。

人の持つ違いだけでなく、成功までも尊重できるようになる時、私たちは主が意図された喜びを味わい始めます。自分の成功だけでなく、人の成功をも喜べるようになれば、さらに多くの幸福がもたらされるでしょう。

兄弟姉妹や仲間の人々が達成したことを共に喜ぶには、自分の持つ大きな可能性に対する確信と自信が必要です。福音は一人一人の心にこのような自信を植え付けます。

私たちが心を尽くし、精神を尽くし、身と霊を尽くして主を愛するならば、自分が主の愛の中にいることをはっきりと理解し、確信するでしょう。そして、主の戒めを守り、自分を愛するように隣人を愛するようになるでしょう。これは主が計画された道であり、これによって私たちは愛と信仰においてひとつとなり、同じ心を持つ姉妹となるのです。

それでは、心をひとつにするには具体的にどうすればよいでしょうか。

1. 私たちが神の娘であることを知る。
2. 主が生きておられ、私たちに救いと昇栄をもたらすことが主の偉大な使命であることを確信し、証する。
3. 自らを完全な者にするために、一步一步熱心に努力する。
4. 個人的な導きを求めて、また人を理解し気づかうことのできる優しい心を求めてしばしば祈る。
5. 福音の教えに従って生活し、人を裁くことのないように、神からの助けを求める。私たちは人の道を歩むことはできませんし、人の苦難を知ることでもできません。ですから、決して人を裁いてはならないのです。
6. 確信を持って生活し、主のみ業を押し進めるためにすべてのものを捧げる。福音の真理を分かち合うことは、私たちにできる最大の贈り物のひとつです。
7. これらの善き業に積極的に携わり、私たちの働きを通して世の中をよりよい場所とするために、必要な知識と力とを得る。
8. 引き受けた責任を果たす際に、できる限りの犠牲を払う。
9. 無私の考え方を進んで受け入れ、日頃

の行ないにそれを反映する。

私たちがどのような環境に置かれていようと、これらの事柄を日常生活における責任として引き受けるならば、私たちはひとつの心を持つようになります。

これらの原則は、貧しい人も富める人も、独身者も既婚者も、若い女性も年老いた母親も、すべての人が受け入れることのできるものです。

人の外観、結婚生活、機会、責任などに関して例外や特例はありません。

何の理由もなく制約を加えるようなことはありません。

主は、私たちが心に抱いている愛と、知恵を捜し求める熱心さに心をかけておられます。そして、主御自身がなさったように、私たちが愛と関心をもって行動し、義しい生活を送るように望んでおられます。また、私たちの内に神の属性を育むように求めておられます。

私たちは立派な女性となり、選ばれた女性となり、まさに聖なる女性となることが出来ます。様々な相違点はあっても、私たちは信仰と証に基く素晴らしい姉妹愛によって、ひとつに結ばれた神の娘になれるのです。そして、自分の家庭を天からの光が注がれる安全な避け所とするために、私たちもハイジのように力と信仰を求めて祈ることが出来ます。天から与えられるその光は、11月のどんよりとした日にハイジの上に注がれた美しい太陽の光のように、すべての人に約束されているのです。

数は多くとも、同じ心を持ってキリストにあってひとつになれるように、私たちの模範であり贖い主であられるイエス・キリストのみ名により、へりくだって祈ります。アーメン。

---

# キリストに倣<sup>なら</sup>いて

---



十二使徒定員会会員  
マーク・E・ピーターセン

そうですね。私たちは、私たちの語るキリストがどのような御方であるかを知っています。また、キリストが生きておられることも知っています。

キリストは世の光であり、命です。その故に私たちはこう歌うのです。

主は光 夜も昼も  
近くませば恐れなし  
(讃美歌112番)

私たちはきょう様々な場所に集っていますが、末日聖徒として、喜びをもって世のすべての人々に証したいと思います。ナザレのイエスはまことにキリストであり、私たちの救い主、そして聖なる神の御子であることを。

しかしそれだけではありません。主は天と地の万物を創りたもうた創造主なのです。さらに言うならば、私たちの友でもあります。

私たちは主を礼拝します。主こそ神の御子なのです。

私たちは主に従います。主は人類の救い主、贖い主です。

私たちは主を愛しています。主は慈しみに満ちた友です。

しかし、主は私たちになすべきことを与えておられます。礼拝するだけではよしとされないのです。ただ崇拜するだけでは、主はお喜びにならないのです。主が私たちに望んでおられるのは奉仕です。主の教会と王国の中で日々奉仕の業を行なうことなのです。

主は私たちに、共に救いのみ業に携わるように望んでおられます。それは自分自身を救うだけでなく、他の人々を救いに導くためのみ業です。主は言われました。

「人の値は神の前に大いなることを憶えよ。」この故に、私たちは皆自分自身と他の人々の生活の中に光と永遠の喜びをもたらすため主の助けをするよう召されたのです。(教義と聖約18:10—14参照)

私たちが召されたのは主御自身です。ではなぜ召されたのでしょうか。それは私たちが主に似た者となることができるようにです。

何世紀も前、イエスは肉身をもってこの世にお生まれになりました。イエスは福音をバレスチナで宣べ伝えられました。その周囲には友人や心を入れ替えた人々が集まりました。そしてごくわずかな会員と共に御自身の教会を設立されたのです。

教えを宣べ、奇跡を行なうにつれ、人々が群れをなしてその後に従うようになりました。ある時は4千人、またある時は5千人の人が従いました。子供たちまでもがイエスを愛しました。

男も女もその教えに改宗し、イエスは彼らを受け入れられました。ただ、女性の方が男性よりも献身的であったと思えるふしが多々あります。そしてイエス御自身もそのようなことで女性たちを誉れとされたのです。しかし、その一切の善い行ないにも

かわらず、卑劣な敵が立ち上がり、イエスに無実の罪を着せました。イエスが自分自身を神の子であると言われたことを、神への冒瀆ぼうとくだと言うのです。

それから彼らはイエスを十字架につけました。それもイエスを辱おとしめるためにふたりの盗人の間にその十字架を立てたのです。まるでイエスに彼らと同じ盗人という烙印を押すかのように。

アリマタヤのヨセフはイエスの体を引き取って、墓の中に丁寧に納めると、その場を立ち去りましたが、何人かの信仰深い女性たちはそこを去りかねていました。

それから3日後、イエスは死からよみがえられました。復活されたのです。このきわめて重大な出来事があった時、そこに合わせたのはだれだったのでしょうか。そうです、確かにみ使いたちもいました。彼らは石を転がし、埋葬衣をそこに置きました。では、天使のほかにはだれがいなかったのでしょうか。

そうです。先に述べた信仰深い女性たちです。彼女たちはその日の朝早く、再び墓に戻ってきました。すると天使が現われ、初めて、イエスがよみがえられたことを宣言したのです。

復活された主は、最初にだれにそのみ姿を現わされたのでしょうか。その女性たちの中の信仰深い忠実なひとりのはしために対してでした。

主はだれよりも早く死に打ち勝たれたことを、この献身的で謙遜な、マリヤという女性に告げられました。

マリヤは全人類の中で、復活された主を最初に見、墓から出て来られた主と初めて言葉を交わした素晴らしい女性です。

天の万軍が、主の復活というこの偉大な出来事を待ち望んでいました。古代の予言者たちもそのことを書き、その日の来るの

を待ち焦がれていたのです。しかし、それを目のあたりにするという誉れを受けたのは一体だれだったのでしょうか。女性です。信仰と忠実さを備えたマリヤという女性だったのです。園の中にある墓の近くでみ使いたちが彼女に語りかけました。

救い主の贖いはそれまでの歴史の中で最も重要な事柄でした。救い主の復活はすべてに冠たる偉大な出来事でした。そして、その出来事はひとりの正しくかつ信仰深い女性に最初に示されたのです。

では、キリストは女性を誉れとしておられるのでしょうか。

主の母親は素晴らしい女性でした。乳飲み子、そして幼年時代のイエスを養い育み、導きを与えました。迷い子になったと思ったイエスを神殿の中で見つけたこともありました。イエスが成人して初めて行なわれた奇跡のきっかけを作ったのも彼女でした。(ルカ2:41-49; ヨハネ2:1-11参照)

主は御自分の母親を心から誇りにしておられました。

ヤコブの井戸のそばで、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」(ヨハネ4:26)と、御自分がメシヤであることをはっきりと言ったのも、ひとりのサマリヤの女性に対してでした。

親しい友であったラザロが死んだ時、主は涙にくれる遺族を訪ねました。その時、主は御自身のすべての使命を語る非常に大切な言葉を口にされましたが、それも女性に対してでした。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」(ヨハネ11:25)

涙で主の足をぬらした女性もいます。(ルカ7:37-38参照) また、ある女性は高価な香油を主の頭に注ぎましたが、主はそれを非常に喜ばれ、世界のどこでも福音が宣



べ伝えられる所では、礼拝の心から発したその行為が記念として語られるであろうと言われました。(マタイ26：6—13参照)

悔恨ないのさなか、「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」(ヨハネ8：11)という言葉をかけられた女性もいました。

「あなたの信仰があなたを救ったのです」(マタイ9：22)というみ言葉も、病気に苦しむひとりの女性に向けられたものです。自分を食卓から落ちるパンくずを食べる小犬にたとえてまで、主に娘の癒しを願ったのも女性でした。主は彼女にこう言われました。「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。(マタイ15：28)

息子の死を嘆き悲しんでいるやもめを見て、同情の心から死人を生き返らせたこともあります。(ルカ7：12—15参照) また、もう

ひとりのやもめは、神殿のさいせん箱にレプタふたつを入れたことで主からたたえられています。(マルコ12：42—44参照)

主がカルバリで苦しみを受けておられた時、その十字架の下には献身的な女性たちが主の母親と共にいました。「われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ」(教義と聖約19：18) たという苦しみのさなかにあっても、主は母親のことに深く心をかけておられました。苦しみを受けながらも母親のことを心に留めておられたのです。(ヨハネ19：25—27参照)

正しい生活をする女性というものは、主にとって大切な存在なのでしょう。立派な女性に成長していく少女たちも重要な存在なのでしょう。主は御自身とそのみ業を支えるために、教会のすべての女性を必

要としておられます。

子供、少女、既婚女性、独身女性、男性、少年、そして一度は道を踏みはずしても悔い改めて戻って来た人、とにかくすべての人を主の下に來させて下さい。天の王国を創るのは、正しく、かつ悔い改めた人なのです。

主は年齢や既婚、独身のいかんを問わず、すべての末日聖徒の女性に、立って、主に對して価値ある者となり、主の方に立つよう望んでおられます。決して反対の方に行つてはなりません。

昔主がこの地上におられた時、御自身の教会を設立されたということは確かに真実です。しかし、神の導きを受けない人々がそれを変え、破壊してしまつたのです。そこで主は、この邪惡な地上から福音を取り去り、しばらくの間天にとどめて、よりふさわしい時代の到来を待たれました。福音を守るためです。

予言者たちが予言したように、主は福音を裁きの時に地上に回復しようと考えておられました。そして、天の中空を飛ぶひとりの天使を御自身の使者として遣わそうとしておられました。また、その天使を受け入れ、真理を回復させるために、新しい予言者を立てるみこころだったので。(IIニ一ファイ 3：7—16) 主は今やこれらのすべてのことを果たされました。

この新しい予言者とはだれでしょうか。

その予言者もまた、献身的な母親の庇護の下に幼少期を過ごしました。大きな病を患つたこともあります。迫害は彼がまだ少年の時代から始まりました。

福音の計画において女性が大切な役割を果たすことを御存じの全能者は、この予言者の伴侶としてもうひとりの素晴らしい女性をお立てになりました。このふたりの女性はそれぞれに母としてまた妻として、時

には共に手を携えながら、彼の身の周りの世話をし、暴力による攻撃から彼を守りました。そして、その殉教の時には悲しみを分かち合つたのでした。

ふたりは自らも迫害と死に直面しましたが、それにひるむことはありませんでした。いついかなる時も、ジョセフ・スミスが神によって選ばれた末日の予言者であり、彼が天使を通して受けた福音がまことに真実であるという証を守り通したのでした。ふたりはそのことを知っていました。そしてどのような時もその証に従つて生きたのです。

予言者に忠誠を尽くした屈強な男たちもいました。そして屈強な彼らをより強い人間にしたのもやはり信仰深い女性たちでした。時には彼女たちの方が様々な事柄において、その目的をより適格にとらえていたと感じさせることもありました。

後に彼らは開拓者として西部へ向かいました。様々な年齢の男女が手車を押し、荷車を引きながら、新しい生活の場を作るために、ロッキー山中に向けて旅をしたのです。

なぜそうしたのでしょうか。

神は予言を成就するために彼らをここに導かれたのです。それはキリストの再臨のためのひとつの備えでした。

彼らは持てるすべての物を捧げて、イザヤの予言にあるように、この山のいただきに神のシオンを打ち建てたのです。(イザヤ 2：2—3 参照)

この女性たちは、自分の夫や息子がこの終わりの日に神に代わつて人々を導く王国の神権者として召されたことを知っていました。しかし、目的においてはまったく同じなのですが、女性には特に主が定められた、また別の務めがありました。こうして男性も女性も、既婚者も独身者も、末日における神のみ業の基を据えるために共に主

に召されたのです。そして彼らはその召しに応えました。

それから新たな世代の人々が続きました。信仰においても義しさにおいても、また、忠実さにおいても高潔さにおいてもその両親と同じように従順な少年、少女が続いたのです。たいまつはこの新しい世代に渡されました。

「続け、励め、進め」という声がありました。(讃美歌65番参照)そしてその若人たちはたいまつを受け取ると高く掲げ、こう歌ったのです。

われら受けし 信仰持ち  
殉教者の持つ 真理を信じ  
(讃美歌150番)

彼らはその言葉の一つ一つを守りました。従順だったのです。

しかし、今彼らはそのたいまつを私たちに引き継いでいます。私たちはそのたいまつを持って何をしたらよいのでしょうか。

彼らがしたようにするのでしょうか。そうです、それはどうしても必要なことです。

戦いを避けて後退するのでしょうか。いえ、それは許されないことです。

信仰と権利を守るのでしょうか。そうです、あらゆる手だてを尽くして守り抜くのです。

鉄の棒をしっかりと握り、主の国にふさわしい者となるのでしょうか。

そうです、まったくその通りです。

私たちは主に仕え、主の教会の中で奉仕すべきですが、主を常に心に留めようとしているのでしょうか。

私たちが信じているキリストは、先祖たちが信じていたのと同じキリストです。このキリストは娘にも息子にも等しく愛を注いで下さいます。

主の偉大なみ業に加わって神の王国の中

で責任を引き受け、主の教会を確立せよと私たちに呼びかけているのは、ほかならぬこの主なのです。確かに主の教会は、すべての国民、血族、国語の民、民族に救いをもたらす唯一の道です。主は、老若、既婚未婚を問わずすべての人に呼びかけておられます。キリストは私たちに、信仰、真理、純潔などの神の武具をことごとく身によろい、「悪しき者の火矢をことごとく消す」ように求めておられます。(教義と聖約27:15—18参照)

キリストは勝利への道を御存じです。私たちがその道を見いだし、そこに留まることができるように、「まず神の国と神の義とを求めなさい」と教えて下さっています。このことは、キリスト御自身も実践されたことでした。(マタイ6:33)

キリストは、御自身がなされたように、私たちにも純潔を尊ぶようにと教えています。

また、御自身がそうであったように、慈悲深くあれと言っておられます。

正直であれとも言っておられます。確かに主は正直な方でした。

また、かつて御自身がされたように、悪を避けなさいと命じておられます。

ルシフェルが富、権力、食欲の誘惑をもって追ってきた時、キリストがそれらを拒絶されたことは皆さん御存じです。その時、キリストは何と言われたでしょうか。

キリストは、人はパンだけで生きるものでもなければ、卑しい欲望、俗受けのよさによって生きるものでもないと言われました。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタイ4:4)

主は主のほかにも何ものも神としてはならないという初期の戒めを繰り返し与えられました。それは、快樂や自己満足といった

神についても言えることです。主のみ言葉はこうです。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」(マタイ4:10)

主は私たちに純潔であるようにと求めていらっしやいます。主御自身もその通りになさいました。

正直であるように求めておられます。主は正直な御方でした。

寛容でありなさいと命じておられます。主は寛大な心の持ち主でした。

御自身がそうであったように、私たちに公正でありなさいと望んでおられます。

また両親を敬えとも言っておられます。主も両親を敬われました。

主はまた、御自身の模範に従って神の福音をいつも心に留めるようにと求めておられます。

また安息日を尊びなさいと教えておられます。確かに主も安息日を聖く保たれました。



主は私たちに、信仰を持って主の道を歩むように望んでおられます。主は私たちに助けて下さいます。野のゆり、空の鳥を考えてみて下さい。私たちはそれ以下の存在でしょうか。(マタイ6:22, 28参照)

主は誘惑と闘われましたが、それは私たちにも求められていることです。

主は祈りをお忘れになったことはありません。私たちもそうでなければなりません。

主は片時も天父をお忘れになったことがありません。私たちもそうなる必要があります。

偉大な贖い主は、私たちの行く末を照らすたいまつを高く掲げ、忠実であるようにと命じておられます。主の期待に応えようではありませんか。世には悪がはびこり、日ごとに暴力がひどさを増しています。しかし、私たちが忠実なら、主は守って下さるのです。主は天から火を下してでも必ず義人を守ると約束なさいました。(教義と聖約35:14参照)

私たちが主のために立つなら、主も私たちを助けて下さるのです。

主とはどなたでしょうか。

主こそ私たちの救い主、神であります。また私たちをよく理解して下さる慈悲深い友人でもあります。それでは私たちは何者なのでしょう。

私たちは現代の神の選民です。末日聖徒なのです。私たちはキリストに仕える民なのです。

主のみ名をたたえん 救いのため  
カルバリの丘に 死にたまいぬ  
われら血によりて 救われたり  
主は神の道を 示したまいぬ  
(讃美歌73番)

主イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

